

令和2年度指定

地域との協働による高等学校教育改革推進事業

(プロフェッショナル型)

研究開発実施報告書

【2年次】



兵庫県立佐用高等学校

目 次

- 1 巻頭言
- 2 令和3年度研究開発計画書（文部科学省提出資料）
 - （1）実施計画
 - （2）令和2年度新規指定時の研究開発概要
 - （3）研究開発の実施体制
 - （4）目標設定シート（計画時）
 - （5）学校設定科目に関する説明資料
 - （6）事業概要図
- 3 研究開発の内容
 - （1）地域との連携の推進による生徒の資質・能力を育成
 - （2）生徒が主体的な学びをするための指導方法の工夫
 - （3）指導に生かす評価の研究～「指導と評価の一体化」に向けた取組～
- 4 委員会等実施報告
 - （1）コンソーシアム委員会実施報告
 - （2）運営指導委員会実施報告
- 5 令和3年度の成果と課題
 - （1）アンケート結果
 - （2）目標設定シート（報告時）
 - （3）令和3年度成果概要図
- 6 資料
 - 令和2年度生実施教育課程表
 - 新聞記事
 - 「第12回文書デザインコンテスト」受賞実績

1 巻頭言

はじめに

兵庫県立佐用高等学校長 西坂 美樹

本校家政科は、令和2年度文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業【プロフェッショナル型】」の研究指定校に選ばれ、『食』を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成 ～佐用風土（Sayo Food）を活用したモデルプランの構築～に取り組み、2年目を迎えました。

しかし、今年度も残念ながら、新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受け、予定を変更せざるを得ませんでした。特に、地域の行事やイベント、交流活動が縮小や中止になり、生徒の発表の場や活躍の場が少なくなってしまったことは残念でなりません。しかし、そのような厳しい環境の中でも、地域の皆様のご支援やご協力を得ながら、取り組みの3本柱である「地域活性化のための商品開発」「健康寿命の延伸」「安全安心なまちづくり」について、コロナ禍ではありますが、工夫を凝らしながら精一杯取り組んで参りました。

まず、「地域活性化のための商品開発」については、佐用の特産品を使った佐用風土の開発にとどまらず、非常災害時に必要な備蓄食としての機能を果たすという付加価値をつけた商品の開発に取り組みました。佐用風土である夢茜トマトをベースとした、酸味のきいたトマトソースとトマトカレーを完成させることができました。

次に「健康寿命の延伸」については、学校設定科目である「ヒューマンサービス」の中で、高齢者のお宅に伺っての「高校生訪問サービス」を実践することができました。実施に際しては、新型コロナウイルス感染防止に最大限配慮し、高齢者の方たちに決してご迷惑をかけない対策を講じて臨みました。訪問に理解、協力していただいた方々から、満面の笑みで出迎え、送り出していただけたことに、「高校生訪問サービス」の大きな意義が認められたと実感すると共に、感謝の気持ちで一杯であります。

最後に、「安全安心なまちづくり」については、従来から実施している校内の防災訓練を基軸に関係機関や地域住民の方と如何に広く協働で実践していくかに腐心いたしました。保育園児から高齢者まで多世代向け防災学習、最新技術を取り入れたドローンによる避難誘導、災害食のバッククッキングの実施など多くのアイデアを取り入れ、防災や減災、災害時における知識や技術が身につくと共に、災害に対する興味・関心が高められたことは大きな成果でありました。

今年度の取り組みに際しては、コンソーシアム委員会に参加していただいたすべての関係機関の皆様には絶大なご協力とご支援をいただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

来年度は、本事業3年目で、集大成の年を迎えます。1年目、知識・技術・地域について学ぶ探究活動に始まり、2年目、商品開発・訪問サービス・防災訓練などの実践活動、そして3年目、地域へ還元するための生活改善の実践である発展活動に取り組んでいきます。さらに、それぞれの活動を評価・検証し、目標である「食を通じたハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成のためのモデルプランの構築」を行っていきます。本冊子ではこの1年間の取り組み内容を報告させていただき、多くの情報を共有し、忌憚のないご意見を頂戴して、来年度の取り組みにいかせていく所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

最後になりますが、日頃からご支援・ご指導賜わっています文部科学省、兵庫県教育委員会、佐用町、関係大学・専門学校、関係事業所や自治会、各委員の皆様へ改めて心からの感謝を申し上げ、巻頭のご挨拶といたします。

2 令和3年度研究開発実施計画書

(1) 実施計画

1 指定校名・類型

学校名 兵庫県立佐用高等学校

学校長名 西坂 美樹

類型 プロフェッショナル型

2 研究開発名

「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成 ～佐用風土 (Sayo Food) を活用したモデルプランの構築～

3 研究開発の概要

本研究は「食」を中心に①特産物による商品開発②健康寿命の延伸③安心・安全な町づくりの三本柱で展開している。これまでも特産品を使用した商品開発には取り組んできたが、事業を通じて伝統料理、保存食へと発展させる目的がある。販売が主目的ではなく、「食」を通じて「佐用風土 (Sayo Food)」と地域人材を活用し、健康の見直しや災害時対応などで町を活気づける。その中で、伝統料理や保存食を「高校生訪問サービス」等の実習で高齢者に提供するなど地域と協働するために、履修科目の新規充実を図り、学校設定科目の活用でカリキュラム・マネジメントを行い、生徒の学びと地域課題の解決につなげる。

4 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用（□で囲むこと）

☒ 学校設定教科・科目を開設している

☐ 教育課程の特例の活用している

5 事業の実施期間

契約日～ 令和4年3月31日

6 令和3年度の研究開発実施計画

(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容

一年目は、指定を受けたことにより地域協働活動を広げること为目标に計画を立てていたが、新型コロナウイルスの影響で逆に活動自体は縮小する形になってしまった。二年目である令和3年度は、一番内容を充実させる年度にしたいと考えている。そのために、現状だからこそできる協働を模索している。また、学校現場としてはカリキュラム開発を目的としていることから従来の学校設定科目からの変更を行うとともに、既存科目の内容見直しなど新学習指導要領に沿うカリキュラム・マネジメントを行う。

テーマの3本柱を基準に横断的なカリキュラムの開発を行う。

研究テーマ	実施科目名	連携機関
①佐用の特産品を活用 (商品開発)	課題研究 (2、3 学年) ヒューマンサービス (2 学年) フードデザイン (1～3 学年)	佐用町、IDEC、ナニワフ ード

②佐用で暮らす人を守る (健康寿命の延伸)	生活産業基礎 (1、2 学年) ヒューマンサービス (2 学年) 生活と福祉 (2 学年) 課題研究 (2、3 学年) フードデザイン (1～3 学年)	佐用町自治会、美作市ス ポーツ医療看護専門学校
③佐用の水害から学ぶ (安全・安心な町づくり)	総合的な探究の時間 (1 学年) ヒューマンサービス (2 学年) 課題研究 (2、3 学年) フードデザイン (1～3 学年)	佐用町、山崎高校、日本 調理製菓専門学校

【1 学年】

佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に特産品・健康寿命・防災に関する知識・技術における基礎的能力の習得を図る。

① 総合的な探究の時間

- ・近年、地元生徒の入学が減少していることから「地域探究活動」から実施した。令和2年度実施した際に、生徒のアンケートからは「佐用町について知らなかった一面を知ることができ、興味関心がわいた。」との意見も多く見られたため、引き続きの佐用町を知る「佐用学」で佐用町企画防災課職員による講話、タブレットを活用しての調べ学習・発表の探究活動を行う。(4月～7月)
- ・佐用町は平成21年の水害被害を踏まえて「災害に強い町づくり」を掲げていることから、佐用町企画防災課職員、西はりま消防署職員の講話による災害についての知識の習得を行う。(7月)
- ・佐用町の人口や高齢化率の現状を検証、佐用町自治会の協力によるモデル地区の実地調査を行うことにより、佐用町の抱える課題や要望などを調査する。(9月)

② 生活産業基礎

- ・教科書を用いた基礎学習として、生活産業とそれにまつわる職業についての知識を習得する。また、「商品企画開発」におけるプロセス学習で、2年生の「課題研究」にて実施する「特産品を用いての商品開発」に向けて意識づけを行う。(5～6月)
- ・佐用町の現状を見据えての推測と役場や各施設での聞き取り調査を行うことで、地域に必要な商品、サービス、人材の調査とアイデアを捻出する。これにより、2年生で実施する「就業体験実習(インターンシップ)」への方向付けとする。(8月)

③ フードデザイン

- ・教科書を用いて「食」に関する基礎知識の習得と実習による調理の基本的技術を習得する。(5月～3月)
- ・令和2年度は地元の利神保育園と協働で地元の食材を用いた「クッキング講習会」を企画していたが、実施できなかった。例年保育園も楽しみにして下さり、本校生徒もコミュニケーション力の向上や企画力を身に付ける機会として有意義であるため、今年度も企画し、幼児に対する食育活動を行う。(10月)
- ・令和2年度に実施した災害食学習と地域(いずみ会)からのバッククッキング講習会では、生徒の防災への関心の高まりが見られたため、今年度も実施。(11月)
- ・地域で開催されているものに限らず、全国的に展開されている専門学校や企業による各種コンテストへの応募を行う。令和2年度は多くのコンテストにチャレンジし、

地域の「もち大豆コンテスト」では2名が入賞した。生徒の発想力を十分発揮できるような指導が不足していたと反省点があることから、今年度は新たな発想力を引き出すことに重点を置く。（4月～3月）

【2学年】

従来の地域との協働活動に加え、佐用町の特産品と求める人材にクローズアップした内容で指導計画を立案し、意識付けをする。

①-1 課題研究「食物」

- ・昨年度は「食文化」にて行ってきた特産品を用いた商品開発であるが、カリキュラムの編成により今年度は課題研究で行う。トマトの生産を行う IDEC や商品化するナニワフード、佐用町からは健康福祉課職員や栄養士を招いての協働で「夢茜トマト」、「佐用もち大豆」など、佐用町の特産物を用いての商品開発やレシピを開発する。（4月～1月）

①-2 課題研究「情報」

- ・事業関連の内容を「さようチャンネル」など地元テレビ局や広報誌を通じて佐用高校全校生徒や佐用町、隣接県への幅広い情報発信を行う。
- ・当初の計画では「ヒューマンサービス」における「高校生訪問サービス」では、直接的な訪問や交流を内容に挙げていたが、新型コロナウイルスによる新しい生活様式をふまえてリモートや往復はがきを用いての実施に計画変更を行う予定であることから、タブレット端末を操作できる人材育成を目指す。

①-3 課題研究「福祉」

- ・毎年本校生徒だけで行っている避難訓練を拡大し、地域や専門学校と協働する形で行う「佐用合同防災訓練～KIZUNA 大作戦～」に向けて、企画運営を生徒自身で行う。それに伴い、本校普通科、農業科学科生徒には近隣に住む高齢者や幼児の避難誘導を担ってもらうなど、学校全体での取組に発展させることを目的としている。（4月～12月）
- ・地域の保育園や子育て支援施設、高齢者との協働で防災学習を行い、日常からの防災意識を高め、災害時のスムーズな行動への意識づけを行う。生徒には主体的に動く力と「共助」の意識を持たせる。

② 生活産業基礎

- ・家政科2学年の生徒全員が、一社一人体制で5日間の就業体験実習（インターンシップ）の実施により地域の職業人に学ぶ機会を設ける。例年実施している就業体験活動では、「働くことの大変さや重要さが分かった。」「仕事に対する責任感やコミュニケーション能力の重要性を認識した。」との感想にあるように、職業観や将来の進路に向けての重要な学びの場となっているため、実施予定である。（7月）

③ 生活と福祉

- ・美作市スポーツ医療看護専門学校との協働による福祉の基礎学習と介護に関する実習の研修会を実施する。これにより、3年生での地域の福祉施設での「介護体験実習」につなげる。また、「認知症サポーター」資格取得を目指すことによる目標の見える化と地域に根ざした人材育成を目指す。（年複数回）
- ・地域の障がい者支援施設を訪問し、レクリエーション交流を通じて、体力づくり啓発活動と食育を行う。例年実施している活動では、レクリエーションによる交流のみであるが、来年度は「食」をテーマに掲げることで、健康寿命延伸の観点を取り入れる。（2月）

④ ヒューマンサービス

- ・「高校生訪問サービス」にてアンケート調査と生活改善内容の研究を行う。当初の計画での訪問が困難になっているので往復はがきやリモートを活用しての実施とする。ネットワーク環境や ICT 技術の面で課題が残されているが、学校全体に協力を呼びかけ、教員と生徒がともに知識と技術の向上をするように工夫する。
- ・県境という立地を生かして岡山県や鳥取県で特産品、少子高齢化、防災状況などのアンケート調査を行う。積極的な交流の場として情報の共有と発信を行うことで、課題発見力や解決力の向上を目指す。
- ・佐用町社会福祉協議会との協働で「給食ボランティアサービス」の参画を通じて、独居高齢者のサポートを行う。サービス自体は三年目に突入するが、例年生徒の感想で「大量調理の大変さを学んだ。」「地域の特産物や旬な食材を使うことを意識して献立を考えた。」など、「食と健康、地域」への興味関心が見られている。今年度は一方通行のサービス提供にとどまらず、往復はがきや手紙などで双方向での実施を行う。（５～１２月）
- ・「課題研究（福祉）」との横断的なカリキュラム・マネジメントを行うことで「佐用合同防災訓練～KIZUNA 大作戦～」企画、実施を行う。家政科２年生が中心となって防災訓練を行うことで、他の生徒にも主体的な行動を促す機会とする。

⑤ フードデザイン

- ・教科書による「食」に関する応用知識と応用技術を習得する。（５月～３月）
- ・日本調理製菓専門学校との協働による保存食研修会を実施する。災害に関する事業と横断的なつながりを持たせることを目的とし、缶詰や真空食品の商品開発につなげる。
- ・これまでに開発した商品を用いてのレシピ開発学習と地域（いずみ会）からの伝統食講習会を実施する。伝統食講習会は従来までも行われてきたが、生徒にはコミュニケーション能力の向上や地域への興味関心が見られる。また、地域住民も交流を楽しみにしており、地域に活力を持たせることから今年度も実施する。（９、１月）
- ・地域の小学生や高齢者に向けた食育教室の開催を行う。例年実施している佐用小学校との「合同調理実習」では、双方の自尊感情の高まりや自主性の向上が見られる。今年度は、高齢者も含めた多世代交流の場を提供することで、高校生が主体となる行事を企画運営する。

【３学年】

従来の地域交流や貢献事業の中に、佐用町の課題解決に向けての目的を加え、より地域に根差した教育を目指す。

① 子どもの発達と保育

- ・佐用保育園との協働でレクリエーション交流を通じて、子育て支援と食育活動を行う。例年実施している「ふれあい育児体験」では、生徒自身で交流会を企画運営することで、協調性やプレゼンテーション能力を伸ばしてきた。今年度は「食」を掛け合わせることで、エプロンシアターやおもちゃを製作することで園児に対する食育活動に力を入れる。（１月）

②-1 課題研究「食物」

- ・年間を通じて「高校生カフェ」や「高校生レストラン」を運営することで、多世代交流を行い、内容の反省や軌道修正を行える力を養う。これまでも行ってきた子育て支援センター「ママプラザ」での高校生カフェでは、ママ支援の食育活動を行

う。(6月)

- ・平福にあるお休み処「瓜生原」では、地元食材を用いたお弁当の提供による地産地消啓発活動を行う。(10月)さらに来年度は、中山間地域に位置する「グラミンカ」(7月)や「高校生訪問サービス」を実施するモデル地区(12月)での「高校生レストラン」を開催する。

②-2 課題研究「被服」

- ・毎年行われている「さよう文化祭」では、地元の高齢者施設や佐用保育園、子育て支援センターの利用者と共演し、交流を行ってきた。今年度も地域との交流や健康寿命の延伸を心と身体の面からサポートすることを目的に計画する。(11月)
- ・佐用町の特産物「皆田和紙」を使って小物や服飾製作を行い、佐用町を広報、活性化する活動を行う。これらを「高校生カフェ」や「高校生レストラン」の開催時に展示、販売、ワークショップを行う。(9月～11月)

②-3 課題研究「福祉」

- ・地域の高齢者施設や障害者支援施設であるきらめきケアセンター、朝陽ヶ丘荘にて「介護体験実習」を行うことで、生徒の将来の進路実現に向けてはたらきかけ、協働先では将来の人材確保の一助を目指す。保育分野では佐用保育園、子育て支援センターでの定期的な実習では、進路を見据えることに加え、子育て世代の地域住民の生活サポートと実態調査を行う。(7月～8月)

【学校家庭クラブ活動】

学校家庭クラブの基本方針である「創造」「勤労」「愛情」「奉仕」の精神を柱として、地域に貢献する目的で「研究活動」「ボランティア活動」「交流活動」を行う。

- ・「ふれあいの里上月」にて地元食材を用いた焼菓子の定期販売を通して、地域の活性化を行う。(5月～3月)
- ・佐用町、上月町、三日月町など地元主催のイベントにおける地元食材を用いた焼き菓子の販売活動を通じた地域交流(11月～12月)
- ・「兵庫県総合文化祭」「西播磨高校生マルシェ」などの県内学校関係イベントで開発商品や特産物使用の焼き菓子販売・皆田和紙アクセサリ製作の体験活動を通じて、佐用町のPR活動(11月～12月)

これまでの取組の見直しや、新学習指導要領に基づいたカリキュラム開発を行ってきた中で、生徒の「主体的・対話的で深い学び」につながる内容を吟味し、身につけさせたい力を明確にしてきた。コロナ禍で予測不可能な現状であるが、逆転の発想を持ち、現状の課題を見直す機会を持つことで、生徒の新たな発想を引き出し、課題解決力を身につけさせたい。また、令和2年度は4月より2ヶ月間緊急事態宣言に伴う臨時休校となり、多くの活動が制限を受けて、予定していた取組が中止・変更・縮小となった。新しい生活様式を踏まえての取組なので十分な成果とは言えないが、今年度にかしたい。

課題としては、他学科・他教科との連携などカリキュラム・マネジメント体制の構築があげられる。今年度に向け、現状だからこそできることを明確にし、より地域との協働を推進していきたい。

(2) 県外研修による先進的な取り組みの研修を通じた、地域協働の深化と検証

県外の本事業を先進している家庭に関する学科設置校の研究発表会に参加することや、健康長寿医療センターでの研修で調査や分析の知識を習得することで、本校での事

業への参考とし、より深い地域との協働へとつなげる。

- ・東京都健康長寿医療センター研究所にて健康寿命延伸の具体的施策を学ぶ、佐用町の課題を相談し、指導助言をいただく。（11月）

（3）カリキュラム・マネジメントの推進

令和2年度は校内組織「地域協働部」を中心に、コンソーシアム内の「佐用風土（Sayo Food）」、健康福祉、防災教育推進の三つの小委員会、校内組織のビジョン委員会、教育課程委員会、キャリア教育推進委員会と連携・協働して、「インターンシップ」や「ヒューマンサービス」等の教育内容、「高校生訪問サービス」「高校生カフェ」等の体験活動や探究活動の充実に向けた協議・検討を行い、地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランの構築推進に取り組んでいった。

また、緊急事態宣言に伴う臨時休業のため、事業開始や組織構築が大幅に遅れたり、活動に制限が加わったりしたが、感染対策等に留意しながら、できる範囲で探究活動に取り組んだ。

事業の実施に際しては、職員会議等での連絡・報告等を通して全職員の周知理解と情報共有を行い、生徒の探究活動に対して全ての教職員が積極的に関わっていく体制作りを推進していった。全教職員の協力のもと、「インターンシップ」や「高校生カフェ」等の体験活動や探究活動を実施・成功できたことは、その成果の現れである。

現在、令和4年度からの新教育課程実施に向け、教育課程編成を協議・検討しているが、本事業の指定を受けたことと令和2年度での取組結果を踏まえ、普通科選択科目で家庭科と農業科の専門科目を導入し、三学科連携のカリキュラム・マネジメント構築に向けた取組をスタートさせた。

令和2年度は、緊急事態宣言に伴う臨時休業のため、コンソーシアム委員会と運営指導委員会の開催が遅れたが、いただいた研究開発、事業内容、組織体制等についての指導助言を、探究活動にできるかぎり反映し、コロナ禍でも実施できる活動内容を模索していった。令和3年度はこの反省を活かし、コンソーシアム委員会と運営指導委員会での指導助言をもとに、4月からのスタートに向けて準備を行い、佐用町との連携を軸に学校全体で研究開発を行う体制を整え、よりよい探究活動に取り組む。

（4）成果の発表・普及

①「さよう文化祭」にて研究成果の披露

毎年11月に行われる「さよう文化祭」では、地域の方々と共演のファッションショーを披露し、地元特産品を使用した焼き菓子の販売を行ってきた。令和2年度は、コロナウィルス感染拡大のため、残念ながら中止となってしまった。令和3年度は、2年間の研究成果の発表として開発商品の発表や掲示による調査統計結果、研究内容の披露を行う。

②校内発表会の開催

- ・校内にて本年度の研究成果の発表会を行うことで、次年度校内連携体制の確立と職員全体への協力体制の確認を行う。（1月）

③さよう文化情報センターでの発表会の開催

- ・地元の施設を使って本年度の研究成果の発表会を行うことで研究内容を地域に還元し、次年度につなげる。（2月）

（5）成果の評価・検証

研究成果の評価として、生徒にはポートフォリオの作成やパフォーマンス評価、学力調査やアンケート調査などを通じて多面的な評価を行う。

研究成果の検証としては、佐用町の住民やコンソーシアム関連機関各所へのアンケートや意識調査を通して、次年度への検証とする。

(6) 報告書の作成

本年度の調査、研究、発表の成果として報告書の発行を行い、近隣高等学校や家庭に関する学科設置校、地元の学校、連携機関に配布し事業成果の還元を図る。

7 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
①佐用の特産品を活用 (商品開発)	校内、佐用町、まなび舎 農園、ナニワフード	岩崎 由香子 (地域協働部長 本校教諭)
②佐用で暮らす人を守る (健康寿命の延伸)	校内、佐用町、美作市ス ポーツ医療看護専門学校	岩崎 由香子 (地域協働部長 本校教諭)
③佐用の水害から学ぶ (安全・安心な町づくり)	校内、佐用町、日本調理 製菓専門学校、	岩崎 由香子 (地域協働部長 本校教諭)

運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
西田 利也	兵庫県教育委員会 高校教育課長	学校教育に専門的知識を有する者
江見 秀樹	佐用町役場 企画防災課長	関係行政機関の職員
浅野 博之	佐用町教育委員会 教育長	学校教育に専門的知識を有する者
岸田 恵津	兵庫教育大学 教授	専門的知識（生活科学等）
田和 久典	IDEC 株式会社 グリーンリノベーション事業部長	学校教育外部有識者（産業）

※備考欄には、学校教育に専門的知識を有する者、学識経験者、関係行政機関の職員等、運営に関して指導・助言にあたる専門の区分を記入すること

高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
兵庫県教育委員会	高校教育課副課長 清水 道子
兵庫県立佐用高等学校	校長 西坂 美樹
佐用町	町長 庵途 典章
佐用町教育委員会	教育課 教育推進室長 西川 典男
IDEC 株式会社	社長 船木 俊之
ナニワフード株式会社	社長 松田 良彦
島根大学	教授 作野 広和
兵庫教育大学	教授 永田 智子
日本調理製菓専門学校	校長 水野 博
美作市スポーツ医療看護専門学校	校長 黒瀬 通弘
兵庫県立山崎高等学校	校長 武田 由哉
佐用町自治会連合会	会長 井上 洋文
一般社団法人ドローン減災士協会	代表理事 久保 正彦

カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	作野 広和	島根大学 教授	非常勤
カリキュラム開発専門家	永田 智子	兵庫教育大学 教授	非常勤
海外交流アドバイザー	なし	なし	なし
地域協働学習実施支援員	服部 憲靖	佐用町企画防災課	非常勤

(2) 令和2年度新規指定時の研究開発概要

指定期間		ふりがな		ひょうごけんりつさようこうとうがっこう						
令和2～最大3年間		①学校名		兵庫県立佐用高等学校			②所在都道府県		兵庫県	
③対象学科名		④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模			
		1年	2年	3年	4年	計	創立112年目の伝統校である。各学年とも普通科3クラス、農業科学科1クラス、家政科1クラス。			
		27	36	35		98				
⑥研究開発構想名		「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成～佐用風土（Sayo Food）を活用したモデルプランの構築～								
⑦研究開発の概要		本研究は「食」を中心に①特産物による商品開発②健康寿命の延伸③安全・安心な町づくりの三本柱で展開している。これまでも特産品を使用した商品開発には取り組んできたが、事業を通じて伝統料理、保存食へと発展させる目的がある。販売が主目的ではなく、「食」を通じて「佐用風土（Sayo Food）」と地域人材を活用し、健康の見直しや災害時対応などで町を活気づける。その中で、伝統料理や保存食を「高校生訪問サービス」等の実習で高齢者に提供するなど地域と協働するために、履修科目の新規充実を図り、学校設定科目の活用でカリキュラム・マネジメントを行い、生徒の学びと地域課題の解決につなげる。								
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	(1) 目的・目標 【目的】 佐用町は、老年人口率40％（全国平均の1.5倍）という現状に加え、平成21年台風9号の豪雨被災の教訓を生かし、地域の活性化と安全・安心で充実した暮らしができる町に進化させることが課題である。本校もこの課題を認識し、町と協働で活性化・貢献活動に取り組んできた。この事業では地域特産品や伝統料理、健康食といった「食」を中心に町と連携している「佐用風土（Sayo Food）」に関する取組を発展充実させ、「ローコスト・ハイクオリティ社会」の実現に貢献するとともに、「高校生訪問サービス」等の実習や探究活動を通して地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランを構築する。 【目標】 ①地元の特産品を使った商品開発を通して地域活性化に参画できる人材の育成。 現在、産官学協働で地元特産品を使った商品開発に取り組んでいるが、さらに上級学校との連携で、地域資源を活用した地域活性化に主体的に取り組む生徒を育成する。 ②健康寿命を延ばすための地域福祉活動に参画できる人材の育成。 高齢者向けイベントの考案、体力作り啓発活動、食生活・食育指導等健康寿命を延ばすための取組を通して、地域福祉に貢献できる生徒を育成する。 ③安全・安心で災害に強いまちづくりに参画できる人材の育成。 地域と上級学校と連携して災害・被災時の課題を理解し、保存食・非常食の開発を行うなど、「食」を中心に取り組むことで、災害に強いまちづくりに貢献できる生徒を育成する。								
		(2) 現状の分析と研究開発の仮説 【現状の分析】 本校は、佐用郡内唯一の高等学校であり、「まちを支える人づくり」をスローガンに地域連携・貢献活動に取り組んできた。家政科は、以前から「佐用風土（Sayo Food）」を使った焼菓子やジャム等の開発を行っており、これらの商品は地域のイベント等で生徒たちが販売を行い、地域の活性化に役立ってきた。また、地域食育ボランティアとの連携で伝統食を学び、保育所や幼稚園、小学校での食育活動を行っている。昨年から佐用町社会福祉協								

		議会と協働し、独居高齢者の給食サービスにも取り組んでいる。 【研究開発の仮説】 コンソーシアムと連携して特産品を活用した商品開発・食改善活動・防災食開発等を行う中で「食」への学びを深めるとともに、課題発見・解決力、プレゼンテーション能力等を身に付け、地域課題である健康寿命延伸、災害に強い町づくりへの改善策の提言を行い、その推進に取り組む。また、地域住民の生活状況等を分析・考察し、「高校生訪問サービス」等の取組を通してボランティア精神・コミュニケーション能力等を身に付け、地域課題である高齢者が充実した暮らしのできる町づくりに向けた提言・実践を行い、積極的に地域福祉に参画し活力ある町づくりに取り組む。これらのことを通じて地域活性化を実現できるとともに「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成ができる。
	⑧-2 具体的内容	(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画 【1 学年】 佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に特産品・健康寿命・防災に関しての知識・技術における基礎的能力の習得を図る。 「総合的な探究の時間」「生活産業基礎」「フードデザイン」 【2 学年】 調査研究を深め、商品・活動開発や「高校生訪問サービス」等の協働事業を行う。少子高齢化等の地域課題解決に向けた探究・実践活動を行う。 「生活と福祉」「生活産業基礎」「課題研究」「フードデザイン」「ヒューマンサービス」 【3 学年】 新たな学びの中で調査研究を総括し、地域が求める人材としての進路実現を行う。研究成果を踏まえ、地域課題解決のための提案と実践を行う。 「保育基礎」「伝統文化」「課題研究」「フードデザイン」「ヒューマンサービス」 「フードスペシャリスト」 【学校家庭クラブ活動】 ・「ふれあいの里上月」にて地元食材を用いた焼菓子定期販売を通じた地域活性化。 ・佐用郡内各町主催イベントにおける地元食材を用いた焼菓子販売活動を通じた地域交流。 ・県内各種イベントでの販売・体験活動を通じた佐用町 PR 活動。 (2) カリキュラム・マネジメントの推進体制 本事業を運営するため、校内組織に「地域協働部」を、校内委員会に「地域協働事業推進委員会」をそれぞれ新たに設置した。「地域協働事業推進委員会」は、本校教職員にカリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員を加えた構成で、コンソーシアム内の「佐用風土（Sayo Food）」、健康福祉、防災教育推進の三つの小委員会、校内組織のビジョン委員会、教育課程委員会、キャリア教育推進委員会と連携・協働して、「インターシップ」や「ヒューマンサービス」等の教育内容、「高校生訪問サービス」「高校生カフェ」等の体験活動や探究活動の充実に向けた協議・検討を行い、地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランの構築推進に取り組む。 また、生徒の探究活動に対しては、全ての教職員が積極的に関わっていく。 (3) 必要となる教育課程の特例等 なし
	⑨その他 特記事項	指定終了後も、本事業の取組を持続可能なものにするために、県独自事業「ひょうごスーパー・ハイスクール」の指定を受ける等、一定の事業経費を計上して、支援することができる。また、「ひょうごふるさと貢献・活性化事業」やクラウドファンディングによる経費の捻出、佐用町からの貸切バス提供等も活用し、発展的に実施することができる。

(3) 研究開発の実施体制

管理機関名：兵庫県教育委員会

1. コンソーシアムの構成

機関名	機関の代表者氏名
兵庫県教育委員会	高校教育課副課長 清水 道子
兵庫県立佐用高等学校	校長 西坂 美樹
佐用町	町長 庵途 典章
佐用町教育委員会	教育課 教育推進室長 西川 典男
IDEC 株式会社	社長 船木 俊之
ナニワフード株式会社	社長 松田 良彦
島根大学	教授 作野 広和
兵庫教育大学	教授 永田 智子
日本調理専門学校	校長 水野 博
美作市スポーツ医療専門学校	校長 黒瀬 通弘
兵庫県立山崎高等学校	校長 武田 由哉
佐用町自治会連合会	会長 井上 洋文

2. カリキュラム開発等専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習実施支援員の体制

区分	氏名	所属	備考
カリキュラム開発等専門家	作野 広和	島根大学 教授	②
カリキュラム開発等専門家	永田 智子	兵庫教育大学 教授	②
地域協働学習実施支援員	服部 憲靖	佐用町役場 職員	②

※「備考」欄には、本事業における活用の形態別に①～③のいずれかの番号を記入すること。

- ①常勤：本事業のために管理機関又は指定校に配置され、管理機関又は指定校で常時勤務する者
 ②非常勤：本事業のために管理機関又は指定校に配置され、管理機関又は指定校では常時勤務するものでない者
 ③ボランティア：本事業のために活用されるが、管理機関又は指定校から賃金・謝金等の支払がされない者（①又は②に該当する者を除く。）

3. 運営指導委員会の体制

所属	役職	氏名
兵庫県教育委員会	高校教育課長	西田 利也
佐用町役場	企画防災課長	江見 秀樹
佐用町教育委員会	教育長	浅野 博之
兵庫教育大学	教授	岸田 恵津
IDEC 株式会社	グリーンソリューション事業部長	田和 久典

4. 経費

区分	金額（千円）	備考
委託費	3 5 9 9 千円	
管理機関よる負担	0 円	
その他	0 円	

5. 本研究開発実施のための自財源確保の工夫（※該当する場合は、回答欄に○印を記入すること）

区分	回答
本研究開発実施のために、企業版ふるさと納税制度を活用している	
本研究開発実施のために、ふるさと納材制度を活用している	○

(4) 目標設定シート

ふりがな	ひょうごけんりつさようこうとうがっこう	指定期間	令和 2 ～ 4
学校名	兵庫県立佐用高等学校		

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート（計画時）

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)		
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 地域をよくするために、地域課題の解決に関わりたいと思う生徒の割合						単位：％		
	本事業対象生徒：			90	70	80	80(R4)		
	本事業対象生徒以外：			20	20	69	40	50	50(R4)
	目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。								
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 健康寿命を延ばす食生活の在り方を考え、提言した生徒の割合						単位：％		
	本事業対象生徒：			30	65	80	80(R4)		
	本事業対象生徒以外：			0	0	0	0	0	0
	目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。								
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 佐用町の防災行事等に参加した生徒の割合						単位：％		
	本事業対象生徒：			100	100	100	100(R4)		
	本事業対象生徒以外：			30	30	30	40	50	50(R4)
	目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。								
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 家庭科技術検定（食物調理1級）取得生徒の割合						単位：％		
	本事業対象生徒：			100	100	100	100(R4)		
	本事業対象生徒以外：			5	5	0	10	10	10(R4)
	目標設定の考え方：知識と技術の定着度合いをはかる。								
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 高校卒業後、いずれは地元で働きたいと希望する生徒の割合						単位：％		
	本事業対象生徒：			43	60	70	70(R4)		
	本事業対象生徒以外：			50	50	38	60	70	70(R4)
	目標設定の考え方：地元に着用を持ち、就業することを目標としている。								
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 高校卒業後、地元で貢献したいと思う生徒の割合						単位：％		
	本事業対象生徒：			62	65	80	80(R4)		
	本事業対象生徒以外：			50	50	61	60	70	70(R4)
	目標設定の考え方：学んだことを将来に生かしたいと思う指標をはかる。								
c	(その他本構想における取組の達成目標) 地域交流や「高校生訪問サービス」等の体験的な学びに参加した生徒の割合						単位：％		
	本事業対象生徒：			100	100	100	100(R4)		
	本事業対象生徒以外：			50	50	50	60	70	70(R4)
	目標設定の考え方：学んだことを将来に生かしたいと思う指標をはかる。								
c	(その他本構想における取組の達成目標) 地域の方々と交流を持ち、協働することへの生徒の満足度						単位：％		
	本事業対象生徒：			88	80	90	90(R4)		
	本事業対象生徒以外：			50	50	73	60	70	70(R4)
	目標設定の考え方：主体的な学びにつながっているかをはかる。								

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)						単位：回
a 外部講師による講義や研究会の実施回数	3	3	13	15	20	20(R4)
目標設定の考え方：研究開発の専門性を高めるために外部講師に委託する。						
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)						単位：回
a 商品開発に際し、関係機関と生徒の会議の回数	0	5	10	8	10	10(R4)
目標設定の考え方：生徒が直接地域と方々と交流を持ち、課題に取り組む。						
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)						単位：回
b 研究開発成果の発表会の回数	1	1	1	2	3	3(R4)
目標設定の考え方：地域に開かれた学校づくりを目指す。						
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)						単位：回
b 校外に向けてイベントなどで学びを発表する回数	3	3	3	8	10	10(R4)
目標設定の考え方：研究開発の成果を広く校外に発信をする。						
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)						単位：％
b 「食」、「福祉」等に関する各種コンテストに参加した生徒の割合	100	100	100	100	100	100(R4)
目標設定の考え方：生徒の学びの到達度を測る。						
(その他本構想における取組の具体的指標)						単位：％
c 地域のことが好きな生徒の割合	50	65	67	85	95	90(R4)
目標設定の考え方：地域に対する生徒の愛着度をはかる。						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						単位：回
a コンソーシアムの委員会の開催回数	0	0	2	4	4	4(R4)
目標設定の考え方：研究開発の進捗状況をはかる。						
(その他本構想における取組の具体的指標)						単位：人
b 協働に際し、地域と企業で人材が参画した人数	10	10	13	20	30	30(R4)
目標設定の考え方：連携機関の充実度をはかる。						
(その他本構想における取組の具体的指標)						単位：人
b 校内外の探究活動などの教育活動に協力した地域の方々の延べ人数	50	70	10	90	110	100以上(R4)
目標設定の考え方：地域連携の充実度をはかる。						

< 調査の概要について >

1. 生徒を対象とした調査について

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
全校生徒数（人）	625	587	558	575	600
本事業対象生徒数			108	115	120
本事業対象外生徒数			450	460	480

(5) 学校設定科目に関する説明資料

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	兵庫県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	兵庫県立佐用高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

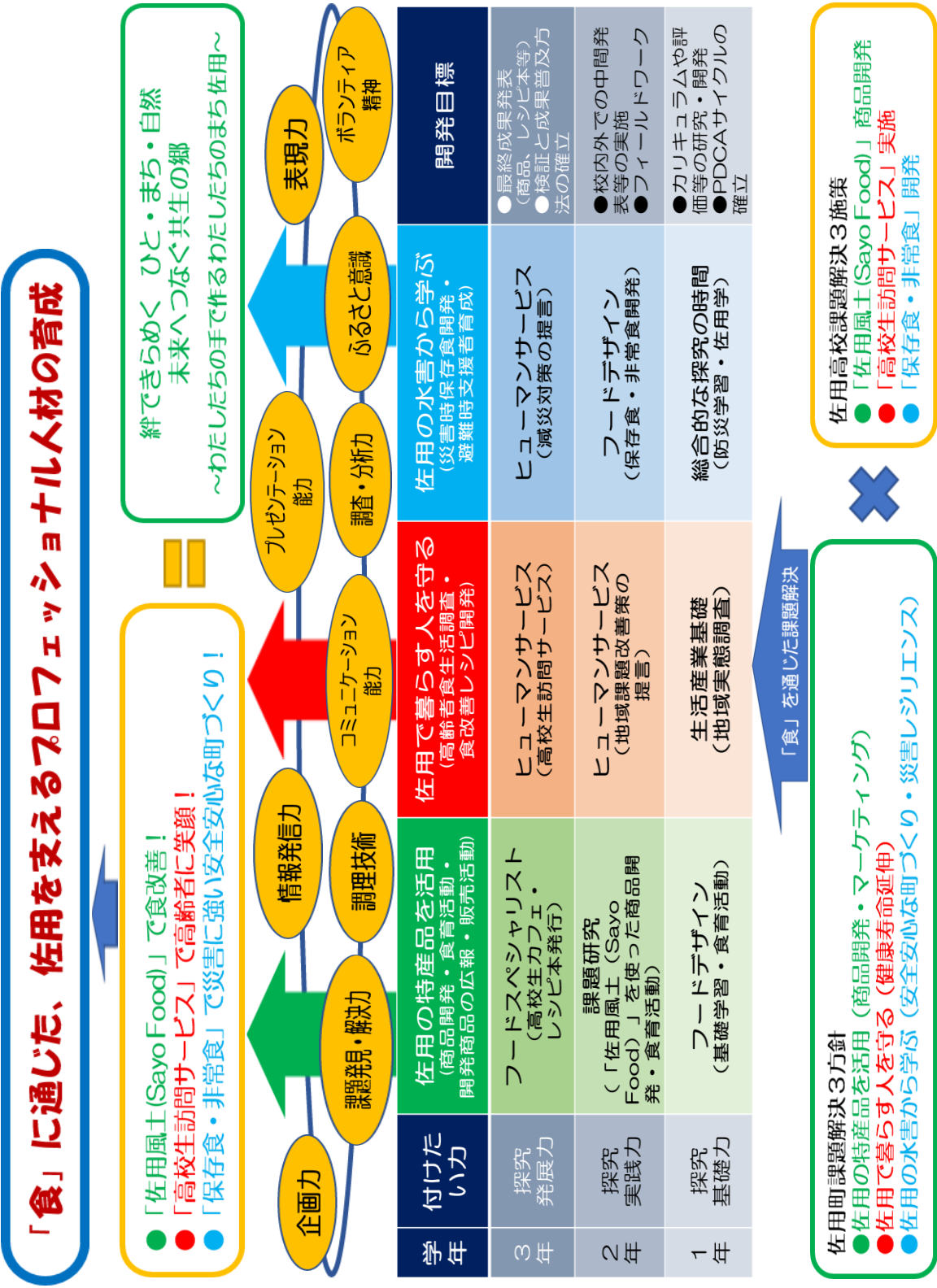
教科・科目名	家庭・ヒューマンサービス、ヒューマンサービスⅡ
単位数	4単位（2学年 2単位、3学年 2単位）
対象学科・学年	家政科・2学年、3学年
必履修・選択の別	必履修
設定する教科・科目の内容	地域との協働事業を実施するにあたり、①地元の特産品を使った商品開発で地域活性化、②健康寿命を延ばすための地域福祉活動、③安全・安心で災害に強い町づくりの三本柱を軸に研究開発をするためには、佐用町の現状や地域住民の実態調査を行うことが必要である。 具体的な内容としては、1学年の「総合的な探究の時間」で佐用町の現状や課題に触れ、「生活産業基礎」で地域の求める人材を基にした生活産業分野の職業について学ぶ。 2学年では、本科目において佐用町内の高齢者宅を中心に「高校生訪問サービス」を開始し、生活状態を調査・分析し改善に向けての研究を行う。また、県外の商品開発や健康寿命延伸、防災に取り組む自治体を訪問し、実態調査と研修を行う。調査統計に関しては佐用町の企画防災課や健康福祉課などの関連機関や、商品開発協働企業と連携し、意見交換や実習を行う機会を多く持つことで専門家に助言を求める場を設け、生徒の学びを深化させる。また、県境という立地を生かし隣県である岡山県や鳥取県も積極的な交流の場とし、情報の共有と発信を行う。 3学年では、特産物の開発商品や郷土料理の販売実習を行い、「高校生訪問サービス」では高齢者宅で実際の生活改善指導を行う。さらに、調査研究・開発内容を発表する場を設けるなどして、広く発信する機会を設ける。 新学習指導要領の理念である「社会に開かれた教育課程」を実現するために、研究・開発した内容を地域に還元することにより、生徒の学びを周知する機会とする。2・3学年では「課題研究」「フードデザイン」とカリキュラムの横断的なつながりをもたせる。
その他 特記事項	地域とより関わることを目的として設定する科目であり、実技を中心に展開することから、評価方法としては「何ができるようになったか」ということを明確にするために、ルーブリック評価を用いる。また、教員のみならず協働先の評価を取り入れる。

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	兵庫県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	兵庫県立佐用高等学校

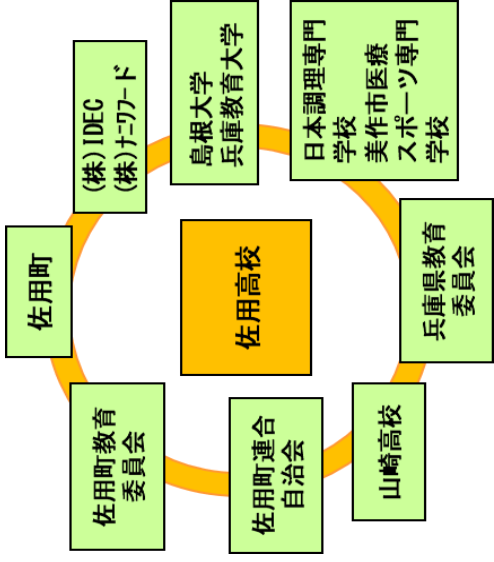
設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	家庭・フードスペシャリスト
単位数	2単位
対象学科・学年	家政科・3学年
必履修・選択の別	必履修
設定する教科・科目の内容	本研究の主題では、「食」を通じて佐用風土（Sayo Food）を活用した地域の活性化が目的の一つであり、地域の課題解決につなげる内容である。構想で、①地元の特産品を使った商品開発を通じた地域活性化、②健康寿命を延ばすための地域福祉活動、③安全・安心で災害に強い町づくりの三本柱を挙げており、1・2学年の「フードデザイン」で地域食材を用いた献立作成や調理実習を行うことにより、基礎的な知識と技術を習得し、発展的な学習につなげる。3学年でも「フードデザイン」は履修予定であるが、既存教科としての中では限りがあることから、差別化して設定した。 具体的に本科目では特産品開発商品の利用方法や調理法、健康食や保存食の開発やレシピ本発行、高校生カフェや郷土料理・保存食・高齢者向け料理教室の開催など、より地域に根差し、地域との関わりを深化させる内容である。また、1学年の「総合的な探究の時間」での県外での実地調査や2学年の「生活産業基礎」でのインターンシップ体験活動や調査統計結果を生かし、佐用町と照らし合わせたデータに基づく高齢者の食生活改善の指針を佐用町に特化した内容で可視化を図る。三年間で生徒が学んだ高い技術と知識を広く共有するために、各種コンテストに積極的に応募したり、研究発表の場を設けたりすることで情報を発信する。 さらに、健康寿命を食生活の面で支える内容を研究することで、「高校生訪問サービス」の一環として、同じ学校設定科目である「ヒューマンサービス」でのフィールドワークに活用する。将来的に介護や保育などの生活産業にまつわる職業でフードスペシャリストとして食分野で活躍する人材の育成をする。
その他 特記事項	地域と食をよりつなげることを目的として設定する科目であり、評価方法としてはポートフォリオなども積極的に活用する。校内のみならず外部からの評価も取り入れる。

『「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成』
～佐用風土(Sayo Food)を活用したモデルプランの構築～



【コンソーシアム】



【事業対象学科の生徒数】

学 科	1 年	2 年	3 年	計
家政科	40	36	33	108

【学校全体の生徒数】

学 科	1 年	2 年	3 年	計
農業科学科	40	34	36	110
家政科	40	36	33	108
普通科	120	106	114	340

3 研究開発の内容

本研究は「食」を中心に、①特産物による商品開発、②健康寿命の延伸、③安心・安全な町づくりの 3 つの研究テーマをもとに、(1) 地域との連携の推進による生徒の資質・能力を育成、(2) 生徒が主体的な学びをするための指導方法の工夫、(3) 指導に生かす評価の研究、の 3 つの研究開発を行い、系統立てた学びを確立し、家庭に関するプロフェッショナル人材を育成する。その中で地域と協働するために履修科目の新規充実を図り、学校設定科目の活用でカリキュラム・マネジメントを行い、生徒の学びと地域課題の解決につなげる。

(1) 地域との連携の推進による生徒の資質・能力を育成

ア 仮説

「食」における探究活動では、地域と連携した取組を行うことで、地域の問題等に対する具体的な視点を持ち、ふるさと意識の醸成と課題解決のための目的意識がしっかり認識された探究活動となる。さらに専門機関との連携により、探究内容を深め、効果を上げることができる。また、校外の活動を通して、コミュニケーション能力を育成すると共に、研究成果を広報することで情報発信力を身につけることができる。

育成できる力:

課題発見・解決力、調理技術、コミュニケーション能力、調査・分析力、ふるさと貢献意識、ボランティア精神、企画力、情報発信力、プレゼンテーション能力

①課題発見・解決力

地域の課題を発見し、生徒がグループワークなどを行うことで解決に向けた事業やツールを考えだす力を身に付ける。

②調理技術

商品開発での試作や、地域でのカフェやレストランで提供したりすることで調理技術が向上する。

③コミュニケーション能力

外部講師を招いて会議を行ったり、生徒同士で話し合いやグループワークを行ったり、地域の福祉施設訪問や小学校での出前授業を通じてコミュニケーション能力を身に付ける。

④調査・分析力

地域住民に対して聞き取りや適切なアンケートを作成することで調査を行い、分析し解決する力を養う。

⑤ふるさと貢献意識

地域に根差した活動を行い特産品や現状を知ること、地元に対する愛着を持つことができる。

⑥ボランティア精神

地域の課題をじぶんごととして捉える中で、地域交流を行うことで貢献意識が芽生える。

⑦企画力

地域課題解決に向けたイベントや行事を計画し、外部との協働で実施する力を身に付ける。

⑧情報発信力

SNS や広報誌、地域イベントで取組を広めることで、的確な情報発信力を身に付ける。

⑨プレゼンテーション能力

成果発表会や地域イベントで取組を発表することで、プレゼンテーション能力を身に付ける。

イ 活動実績

【佐用の特産品を活用～特産品での商品開発～】

1 テーマ設定の理由

佐用町は清流千種川の良質な水、寒暖差のある気候、豊かな土壌により夢茜トマトや佐用もち大豆など魅力的な特産品が数多く生産されており、それらを「佐用風土 (Sayo Food)」としてブランド化している。町と連携している「佐用風土 (Sayo Food)」を使った商品開発に取り組むことを通して、地域資源を活用し地域活性化に貢献する。そして、特産品を使用した商品開発に取り組み、事業を通じて伝統料理・保存食へと発展させ、生徒の学びと地域課題の解決につなげる。

2 目標

- ・地元の特産品を使った商品開発を通して地域活性化に参画できる人材の育成。
- ・現在、産官学協働で地元特産品を使った商品開発に取り組んでいるが、さらに上級学校との連携で、地域資源を活用した地域活性化に主体的に取り組む生徒を育成する。

【カリキュラムの構成】

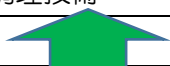
商品開発におけるカリキュラムの構成と生徒が身に付ける力の概要図を次ページに示した。

【食に通じた、佐用を支えるプロフェッショナル人材の育成】

～佐用の特産品（佐用もち大豆・夢茜トマト）を活用～

商品開発・マーケティング

学年	付けたい力	科 目	内 容
3年	【探究発展力】 ○企画力 ○情報発信力 ○課題発見・解決力 ○コミュニケーション能力 ○表現力 ○プレゼンテーション能力 ○ふるさと意識 ○調理技術	フードスペシャリスト	○「高校生カフェ」の実施 （瓜生原・グラミンカ・ママプラザ・モデル地区） →特産品・開発商品を活用したオリジナル料理の提供
		課題研究	○「レシピ本」の発行・配布 →特産品・開発商品を使ったレシピの開発 外部講師による指導・助言
		フードデザイン	○特産品を取り入れた調理実習 ○各種コンテストへの応募



2年	【探究実践力】 ○企画力 ○表現力 ○プレゼンテーション能力 ○コミュニケーション能力 ○ふるさと意識 ○調理技術	課題研究	○特産品を使った商品開発 →企業や役場との連携 商品開発について発表会・商品販売の実施 ○佐用町、隣接県への情報発信 →開発レシピを佐用チャンネル・広報誌で発信
		ヒューマンサービス	○隣接県で調査（特産品を活用した商品）
		フードデザイン	○伝統料理の研究（いずみ会） ○開発商品を使ったレシピの考案 ○生徒による小学生・高齢者向け食育教室開催 →特産品・開発商品を使ったレシピ ○保存食開発 ○特産品を取り入れた調理実習 ○各種コンテストへの応募



1年	【探究基礎力】 ○ふるさと意識 ○表現力 ○プレゼンテーション能力 ○知識力	総合的な探究の時間	○役場による特別授業 →佐用町の特産品を知る ○佐用町についての調べ学習・発表
		フードデザイン	○食に関する基礎知識と技術の習得 ○幼児向け食育活動 ○各種コンテストへの応募
		生活産業基礎	○商品企画開発におけるプロセス学習

3 実施内容

(1) 特産品を使った商品開発

●目的

佐用町の特産品を使った商品開発を行い、食を通じて地域の活性化に貢献する。

●生徒に身に付けさせたい資質・能力

企画力・プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力・ふるさと意識・調理技術

①商品開発について

日 時 令和3年5月～令和4年2月

対 象 課題研究（家政科 第2学年 食物コース選択者 12名）

内 容

○実施概要

令和3年 5月	商品開発に関する講習会 第1回、第2回商品開発会議
令和3年 6月	第3回商品開発会議
令和3年 9月	第4回商品開発会議
令和3年10月	第5回、第6回商品開発会議
令和3年11月	第7回商品開発会議 開発商品完成 発表会・販売会
令和3年12月	第8回商品開発会議
令和4年 2月	課題研究発表会



商品開発会議

今年度は、「佐用町の特産品×災害備蓄食」をテーマに外部から佐用町の職員、地域の栄養士、トマトやもち大豆の生産者、食品会社の方々に毎月来校いただき、会議を開いた。会議での意見を参考に、試作を繰り返し、商品開発を行った。

②商品開発に関する講習会

商品開発を行うにあたり、協働先の方々に事前に商品開発に関する講習会を行っていただき、商品開発に必要な知識の習得を行った。

【内容】佐用の水害について
佐用の特産品について
夢茜トマトについて
災害備蓄食について

○生徒の感想

- ・特産品をPRするために、様々な取組が行われていることが分かった。
- ・生産者の方々が品質の良いものに仕上げるために、努力をされていることが分かった。
- ・佐用町に住んでいても、まだまだ知らないことがたくさんあって驚いた。
- ・学んだことをもとに、佐用町の皆様に喜んでいただけるような商品を開発していきたい。
- ・佐用町以外の方にも佐用町の魅力を伝えられるような商品を開発したい。



商品開発に関する講習会



開発商品の決定

③開発商品の決定

今年度は、「佐用の特産品×災害備蓄食」をテーマに協働先の方々と、KJ法により付箋を使って、自由にアイデアを出し合い、開発商品の決定を行った。たくさん出た意見の中から、備蓄食に適した商品を考え、トマトソースとトマトカレーに決定した。

④開発商品

トマトソース

いろいろな料理に活用でき、どんな世代の人でも食べやすいということから、開発した。試作・試食を重ね、人参はおろし金でおろしたり、うま味を足すために昆布だしを使用したりするなど改善を行い、レシピを決定した。

トマトカレー

幅広い世代の方に好まれ、温めるだけですぐ食べられるということから、開発した。「夢茜トマト」をたくさん入れ、トマトの酸味やうま味を出した。また、佐用町の特産品である佐用もち大豆も入れた。会議で、うま味が足りないという意見が出され、昆布だしを使用した。ラベルは、生徒が考えたものを基に企業の方に3案作っていただき、その中から決定した。



試作調理



完成商品

⑤開発商品発表会・販売会 「姫音祭」

日 時 令和3年11月28日（日）

場 所 イーグレひめじ 2階 「しろみエール」

内 容

○実施概要

生徒による主体的な企画運営を促し、情報発信力とコミュニケーション能力を養うことを目的とし「姫音祭」において、今年度の開発商品「トマトソース」と「トマトカレー」の発表会と販売会を実施し、成果の披露と地域との交流を行った。また、ステージでPR活動を行うことで、佐用町以外の方にも佐用町の特産品や開発商品を知っていただく良い機会となった。



チラシ配布の様子



販売・接客

○生徒の感想

- ・自分が声をかけた方がお店に買いに来てくださり、うれしかった。
- ・大きなイベントで不安だったが、接客や商品の説明をすることができて良かった。
- ・初めてのことで緊張したが、多くの人に買っていただきとても良い経験ができた。

⑥今年度の商品開発について協働先の方々からの感想

- ・お客様とコミュニケーションをとって販売している様子を見て、頼もしく見えた。
- ・商品開発を通して、地域と学校がお互いに連携でき、地域貢献にもつながっている。
- ・自分たちで考えて、自主的に取り組んでいた。

○生徒の感想（商品開発を行って）

- ・協働先の方々と一緒に開発を行って、たくさんのアドバイスをいただくことで、完成度の高い商品を作ることができて良かった。
- ・何回も試作・試食を繰り返し、話し合いを行い、一から商品を考えることは、大変だったが、出来上がった商品を見ると、大きな達成感を感じることができた。
- ・話し合いや販売・接客をすることで、コミュニケーション能力を高めることができた。
- ・商品開発を行って、作り上げる大変さと楽しさ、協力することの大切さを知った。
- ・商品開発を通して、地域に貢献することができた。

(2) 特産品・開発商品を使ったレシピ開発

●目的

佐用の特産品を使った献立を開発し、地元の人に提供することで地域に貢献する。

●生徒に身に付けさせたい資質・能力

企画力・プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力・ふるさと意識・調理技術

①地産地消のお弁当製作について

期 間 令和3年9月～令和3年11月

対 象 課題研究（家政科 第3学年 食物コース選択者 15名）

内 容

○実施概要

9月	お弁当・焼き菓子の考案、試作
10月	試食会、改善、レシピ決定
11月	高校生カフェ本番

9月より、特産品を使った献立の研究・開発を始めた。オリジナル弁当の献立の考案や、ブルーベリージャムと夢茜トマトジャムを使ったマドレーヌの開発を進めた。何度も試作を繰り返し、試食会を行った。試食会の意見を参考に改善し、お弁当とマドレーヌを完成させ、11月に「高校生カフェ」を実施した。

【使用した特産品】

さよ姫ポーク 三日月豆腐 鹿肉 もち大豆みそ ブルーベリー
夢茜トマト たつ乃屋醤油

②地産地消献立のお弁当試食会

日 時 令和3年10月25日（月）

場 所 本校 第一食物室

内 容

○実施概要

生徒が考案した佐用町の特産品を使用した献立をもとに作ったお弁当の試食会を行い、佐用町役場や企業の方、平福まちづくり協議会、日本調理製菓専門学校の水野先生などからご意見をいただき、レシピの改善を行った。

【お弁当献立】

- | | |
|----------------------------|--------------|
| ・ さよ姫ポークの生姜焼き | ・ もち大豆みそのナムル |
| ・ 鹿肉ハンバーグ | ・ ほうれん草の白和え |
| ・ 筑前煮 | ・ さつまいもご飯 |
| ・ だし巻き卵 | ・ きのこの炊き込みご飯 |
| ・ 夢茜トマト | ・ 季節の果物 |
| ・ 夢茜トマトジャム&ブルーベリージャムのマドレーヌ | |

【改善点（一部）】

鹿肉ハンバーグ

トマトベースが合うので、ソースに入れるケチャップの分量を増やした。

もち大豆みそのナムル

お弁当全体に変化が出るので、酢を入れた。



試食会

③高校生カフェ in 平福「瓜生原」

日 時 令和3年11月13日（土）

場 所 お休み処 瓜生原

内 容

○実施概要

家政科生徒によるカフェの実施

地域の特産品などを使用したオリジナル弁当の提供、焼き菓子の販売

家政科 学びの展示

家政科、地域協働事業活動パネル、皆田和紙衣装の展示

ファッションショーの映像披露

特産品・開発商品を使った献立を開発し、お弁当や焼き菓子を提供することで地域の活性化へとつなげることを目的として取り組んだ。また、地元の飲食店を使用させていただくことにより地域の方々とのつながりを大切にし、対話的で深い学びに結びついた。



お弁当調理



接客の様子



オリジナル弁当と焼き菓子



家政科 学びの展示

○生徒の感想

- ・コロナの影響でカフェの実施ができるか不安でしたが、無事に開催することができて、とてもうれしかった。
- ・佐用町の特産品を使ったことで、佐用町以外の方に特産品をPRできた。
- ・お弁当を食べて「おいしい」と言っていただき、地域の皆様にも満足していただけるお弁当が作れた。
- ・たくさんのお客様にお弁当を食べていただき、「ありがとう」と直接言ってもらえたことで、大きな達成感を感じた。
- ・カフェを通して、地域の方との交流を深めることができて、良かった。

④「高校生カフェ」に向けた講習会

日 時 令和3年11月10日（水）

場 所 日本調理製菓専門学校

対 象 フードデザイン（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

次年度、実施する「高校生カフェ」「高校生レストラン」に向けて、大量調理についての知識や技術を身につけることを目的とし、講義を受け、ワンプレートランチの実習を行った。また、実際にカフェスペースで接客体験を行い、接客をする上での注意点やポイントなどについて理解を深めることができた。ポップの作り方も教えていただき、今回の講習会で学んだことを次年度に活かしたい。



大量調理の実習



接客体験

○生徒の感想

- ・お客様に食べていただくものには、手早さやきれいさが大事だということが分かった。
- ・「高校生カフェ」を体験して楽しかった。今回学んだことを次に活かしたいと思った。

(3) 食改善レシピ考案

●目的

高齢者の栄養と食生活の特徴を考え、「高校生訪問サービス」でのアンケート調査を参考に食改善レシピの考案を行う。

●生徒に身に付けさせたい資質・能力

課題発見・解決能力・表現力

①食改善レシピについて

日 時 令和3年10月～令和4年1月

対 象 ヒューマンサービス（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

高齢期に不足しがちな栄養素を取り入れ、アンケート調査を参考に、高齢者向けの食改善レシピの考案を行った。佐用町の特産品なども使い、高齢者が食べやすいように工夫した。

(4)食育活動

●目的

食育をテーマにしたおもちゃを用いて食育活動を行うことで、幼児に食に関する興味・関心を引き出すとともに、食の大切さを伝える。

●生徒に身に付けさせたい資質・能力

企画力・プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力・ボランティア精神

①ふれあい育児体験

日 時 令和3年12月21日（火）

場 所 佐用町立佐用保育園

対 象 子どもの発達と保育（家政科 第3学年 35名）

内 容

○実施概要

幼児に遊びを通して食べ物に興味・関心をもち、食の大切さを知ってもらうことを目的に食育おもちゃの製作を行った。コロナ禍での交流のため、おもちゃの数を増やし少人数で遊べるよう工夫をした。



食育おもちゃ（ままごと）



食育活動

○生徒の感想

- ・子どもたちに何を作ったら、食べ物に興味を持ってもらえるのかを考えるが難しかった。
- ・普段、子どもと関わる機会がないので、不安だったが、子どもたちが元気にあいさつをしてくれたので、緊張せずに交流できた。

- ・自分たちが作ったおもちゃに想像以上に興味を持ってくれ、楽しそうに遊んでくれている様子を見て、うれしく思った。

②食育おもちゃ製作

日 時 令和4年1月～令和4年2月

対 象 フードデザイン（家政科 第1学年 25名）

内 容

○実施概要

佐用町立利神保育園の園児たちと特産品を使った「ふれあいクッキング」を行う予定であったが、コロナ禍のため実施できなかったため、食育おもちゃ製作を行った。後日、保育園へ訪問しおもちゃを寄贈させていただいた。少人数の訪問だったが、直接おもちゃを渡せたことで、達成感を感じることができた。

○生徒の感想

- ・交流ができなくて残念だったが、製作したおもちゃで遊ぶことで、食べものについて興味を持ってもらいたい。
- ・子どもたちにも分かるような絵や文を考えるのが難しかった。



食育おもちゃ（カルタ）



保育園訪問

4 成果

(1)特産品を使った商品開発

- ・開発商品に関する講習会や試作を行うことにより、商品開発に関する知識と技術を身につけることができた。
- ・協働先の方々と商品開発を行うことで、生徒のコミュニケーション能力の向上や課題発見・解決能力を養うことにもつながっている。
- ・開発商品の販売会では、佐用町以外の方にも情報発信をすることができた。
- ・グループ活動や商品販売、商品のPRをすることで生徒のプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の向上につながった。
- ・生徒たちがアイデアを出して商品化し、販売まで体験することで、商品開発の難しさや大きな達成感を感じることができた。

- ・特産品を使って商品開発を行うことでふるさと意識も高くなった。

(2) 特産品・開発商品を使ったレシピ開発

- ・お弁当製作を行うことにより、大量調理に関する知識と技術を身につけることができた。
- ・特産品を使ったお弁当を製作し販売することにより、ふるさと意識が強まった。
- ・お弁当の献立やカフェの内容を考えることにより、企画力の向上につながった。
- ・直接、お客様や地域の方々に言葉をかけていただいたことで、大きな達成感を感じることができた。
- ・グループ活動やお弁当・焼き菓子販売、接客をすることで生徒のプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力が向上した。
- ・特産品を使ったお弁当を提供することで、地域の方々と交流することができ、地域貢献につながった。
- ・来年度に向けて、大量調理や接客に関する知識と技術を習得することができた。

(3) 食改善レシピ考案

- ・高齢者向けの食改善レシピの考案を行うことで、課題発見・解決能力、企画力の向上につながった。
- ・インターネットでのレシピ検索などにより、情報収集力が身についた。

(4) 食育活動

- ・おもちゃを製作することにより、食育に関する課題発見・解決力、表現力が身についた。
- ・コロナ禍のため、人数を制限しての訪問だったが、実際に園児たちと交流させていただき、コミュニケーション能力を身に付ける良い機会となった。
- ・子どもと接する機会が減少してきている中、直接ふれあうことにより、幼児に対する理解を深めることができた。

(5) 各種コンテストへの応募

- ・佐用もち大豆料理コンテスト 4名入賞
- ・第24回あけてニッコリ！！わくわくお弁当コンテスト
- ・第52回全国高校生料理コンクール

5 課題

(1) 特産品を使った商品開発

- ・販売会の際に、佐用の特産品などについてのアンケート調査を行い、商品開発に活かしたい。
- ・生徒が開発した商品を、定期的に商品化し販売できるようにしたい。

(2) 特産品・開発商品を使ったレシピ開発

- ・特産品を使った子ども向けのメニューを開発していきたい。
- ・今年度はコロナ禍のため、子育て世帯との交流が難しかったので、活動が制限される中でも生徒が主体的に地域に出向き活動ができるよう支援を行い、より地域との連携を深めていく。

(3) 食改善レシピ考案

- ・次年度に向けて、試作・試食・改善を行い、食改善レシピを完成させていく。
- ・食改善レシピ本の発行に向けて、生徒が主体的に計画を立て、実施できるよう支援を行って

いく。

(4) 食育活動

- ・コロナ禍に対応した食育おもちゃを考える。
- ・活動が制限される中で生徒が主体的に行える交流の方法を考えていく。

(5) 各種コンテストへの応募

- ・コロナ感染防止に配慮しながら、調理実習を行い、調理に関する知識と技術の向上を目指す。

6 次年度に向けて

(1) 特産品を用いた商品開発

昨年度に引き続き、外部の佐用町の職員、地域の栄養士、トマトやもち大豆の生産者、食品会社の方々と協働で行う。

(2) 特産品や開発商品を使ったレシピを考案し、オリジナル料理の提供

「高校生カフェ」「高校生レストラン」でオリジナル料理を提供し、地域の方々とより広く深く交流を重ねていく。また、佐用町社会福祉協議会との協働で、地域の特産品や農業科学科の農産物を用いた献立の開発を行い、「給食サービスボランティア」で提供する。また、特産品を使った子ども向けのメニューを考案する。

(3) 特産品や開発商品を使ったレシピ本の作成

特産品や開発商品の利用方法や調理法の研究を行う。

(4) 多世代向けの食育活動

地域の小学生や高齢者に向けた食育教室の開催を行う。

次年度、これらのことを実施することにより生徒のふるさと意識をより深め、課題発見・解決力、企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、情報発信力、調理技術を身につけ、「主体的・対話的で深い学び」につながる体験活動・探究活動に取り組んでいく。そして、学んだことを地域へ還元し、地域の課題解決につなげていく。

【佐用で暮らす人を守る～健康寿命の延伸～】

1 テーマ設定の理由

佐用町は、老年人口率 40%（全国平均の 1.5 倍）であり、少子高齢化・人口減少など中山間地域における様々な課題を抱えている。高齢者が充実した暮らしのできる町づくりを目指し、「高校生訪問サービス」等の実習や探究活動を通して健康寿命延伸に向けた提言・実践を行い、その推進に取り組む。また、地域住民の生活状況等を分析・考察し、積極的に地域福祉に参画し活力ある町づくりに取り組む。

2 目標

- ・高齢者向けレシピの考案、体力作り啓発活動、食生活・食育指導など健康寿命を延ばすための取組を通して、地域福祉に貢献できる生徒を育成する。
- ・「高校生訪問サービス」等の取組を通して、生徒にボランティア精神・コミュニケーション能力等を身に付けさせ、地域福祉活動への積極的な参画をはかり、地域活性化を実現する。

【カリキュラムの構成】

健康寿命延伸におけるカリキュラムの構成と生徒が身に付ける力の概要図を次ページに示した。

【食に通じた佐用を支えるプロフェッショナル人材の育成】

～佐用で暮らす人を守る～

高齢者食生活調査・食改善レシピ開発

学年	付けたい力	科目	内容
3 年	【探究発展力】 ○企画力 ○コミュニケーション能力 ○実践力 ○情報発信力 ○プレゼンテーション能力 ○ボランティア精神	ヒューマンサービス	○食改善レシピのまとめ ○「高校生訪問サービス」実施 →食改善レシピ、生活改善体操など ○モデル地区（佐用町）の研究発表 ○佐用町・隣接県への情報発信
		課題研究	○2 年生に美作市スポーツ医療専門学校での学習を伝授

2 年	【探究実践力】 ○調査・分析力 ○課題発見・解決力 ○情報発信力 ○企画力	ヒューマンサービス	○モデル地区（佐用町）の実態調査 ○隣接県（岡山県、鳥取県）の類似地区の実態調査 →モデル地区（佐用町）と比較 ○「高校生訪問サービス」に向けた計画 →生活改善指導内容を考案 ○「給食サービスボランティア」実施 →高齢者向け献立
		生活と福祉	○福祉の基礎学習 ○認知症サポーターの資格取得 ○高齢者の生活と食に関する講演会（役場職員） ○3 年生から美作市スポーツ医療専門学校での学習を学ぶ ○美作市スポーツ医療専門学校による特別授業 →生活改善体操の考案、佐用チャンネルで発信
		生活産業基礎	○インターンシップ実施 →地域の実態に合わせた職業の把握
		課題研究	○グラミンカによる特別授業 →地域活性化の取り組みを学ぶ
		フードデザイン	○食改善レシピの考案 →高齢者向け献立、特産品使用

1 年	【探究基礎力】 ○知識力 ○プレゼンテーション能力 ○表現力 ○ふるさと意識	生活産業基礎	○消費者ニーズ・商品企画に関する学習 ○職業についての調べ学習・発表
		総合的な探究の時間	○佐用町に関する講演会（役場職員） ○佐用町についての調べ学習・発表 ○モデル地区（佐用町）の実態調査計画

3 実施内容

(1) 専門的知識・技術の習得

●目的

上級学校や地域から講義をとおしてより専門的な知識を習得し、生徒の深い学びにつなげる。
また、「給食サービスボランティア」や「高校生訪問サービス」を実践していくにあたって生徒の主体性を促す。

●生徒に身に付けさせたい資質・能力

基礎的知識・技術、調査・分析力、課題発見・解決力

①佐用町の高齢者について知る

日 時 令和3年6月23日（水）5、6限目

場 所 本校保育大教室

対 象 ヒューマンサービス（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

佐用町役場の高年介護課から講師を招き、佐用町の高齢者の現状について講義を実施した。活動にあたって現状を知ること、地域に寄り添った活動に取り組めるようになることを目的とした。また、地域包括支援センターの役割やケアマネージャーや保健師などの専門職の仕事内容を聞くことで、職業に関する考えも深めた。講義内容は以下の通りである。

①佐用町の高齢者の現状や健康寿命の延伸に向けた取組について

②給食サービスボランティアのお弁当献立を考えるポイント

③いきいき百歳体操体験



佐用町の現状について



いきいき百歳体操体験

○生徒の感想

- ・1年生の時から佐用町の高齢化率について学んできたつもりでしたが、全然知らないことばかりで、水根という小さな佐用の集落が佐用町で最も高齢化率が高く、人口4名の高齢化率なんと100%でした。知っているようで知らないことが多く勉強になりました。
- ・高齢者の方々にちょっとでも喜んでもらえるような取組を今後もやっていきたいなどこの講義を聞いて改めて思いました。
- ・平均寿命、健康寿命が近いと自立して生活できる期間も長くなることを知って、改めて三本柱にある健康寿命を延ばすことの大切さを知ることができた。

②3年生特別講義

日 時 令和3年7月15日(木) 1限目
場 所 本校保育大教室
対 象 課題研究(介護)(家政科 第3学年 介護コース選択者5名)
生活と福祉(家政科 第2学年 36名)

内 容

○実施概要

今年度も美作市スポーツ医療看護専門学校で校外学習を実施する予定を立て、校外学習の内容を昨年度よりも深めるために、3年生から昨年度の校外学習で学んだ知識を2年生に教える特別講義を実施した。実際に体験した3年生から生の声を聞くことによって、2年生がより興味関心を持って校外学習に臨むことをねらいとした。また、3年生のコミュニケーション能力の向上や責任感、知識の定着も目的とした。特別講義に向けて講義のパワーポイントやプリントを作成し、人に教える立場を経験することで、学びなおしの機会となった。

③校外学習

日 時 第1回 令和3年 7月16日(金)
第2回 令和3年12月 9日(木)
第3回 令和3年 3月17日(木)

場 所 美作市スポーツ医療看護専門学校

対 象 生活と福祉(家政科 第2学年 36名)

内 容

○実施概要

3回にわたって協働先である美作市スポーツ医療看護専門学校に訪問し、講習会を実施した。介護福祉の専門的な知識と実技について学び、福祉分野についての知見を広げ地域の求める人材育成を目指す。実施内容は下記の通りである。

第1回：地域協働事業活動「健康寿命の延伸」「介護福祉」についての講義と実技

第2回：専門学校の設備を使用した介護実習

第3回：家庭看護の観点からの介護講義と実技



ポスターセッション



レクリエーション



視覚障害体験と補助方法



注射体験



ベッドメイキング体験



介護体験

○生徒の感想

- ・人と会話をする中で相づちなどのコミュニケーションをとることはとても大切なんだなと思いました。
- ・寝たきりの方が同じ姿勢で動かずにいると褥瘡（床ずれ）が起きてしまうという事にとっても驚き、どれだけ動けることが健康につながるという事を実技の練習を通して学べて、とても福祉の勉強になりました。
- ・介護で大切なことは、自分でできることは自分でさせてできないことをお手伝いすることで本人の能力の維持と向上につながり、何でもしてあげるとは逆に負担になってしまうことを知って驚きました。

④認知症サポーター養成講座受講

日 時 令和3年11月24日（水）5、6限目

場 所 本校保育大教室

対 象 生活と福祉（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

佐用町役場の高年介護課に協力依頼し、本校で2年生を対象に認知症サポーター養成講座を開催していただいた。認知症サポーターの資格を得ることはもちろん、症状の知識を得ることで、地域の実践活動におけるコミュニケーション能力の向上も目的とした。認知症サポーターの証としてオレンジリングを取得した。



講座の様子



実演による説明



オレンジリング

(2) 高校生訪問サービスの実施

●目的

生徒が直接高齢者宅を訪問し地域住民と関わることで、コミュニケーション能力を向上させ、

課題発見・解決能力やふるさと貢献意識を身につけ、主体的・対話的な学びにつなげる。また、生活改善に向けての提言を行うことで、地域住民の健康寿命の延伸に貢献する。

●生徒に身に付けさせたい資質・能力

企画力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、ボランティア精神

①実施

日 時 第1回 A班 令和3年 9月24日(金) 10:55～12:45
B班 令和3年 9月27日(月) 13:30～15:20
第2回 A班 令和3年11月19日(金) 10:55～12:45
B班 令和3年11月15日(月) 13:30～15:20
第3回 A班 令和4年 1月14日(金) 10:55～12:45
B班 令和4年 1月17日(月) 13:30～15:20

場 所 佐用町内の高齢者世帯

対 象 ヒューマンサービス(家政科 第2学年 36名)

内 容

○実施概要

佐用町内の10世帯の高齢者宅に依頼し、各回A、B班に分かれて2日間実施する。各班5世帯ずつ、生徒2名で訪問する。訪問前と訪問後には生徒のアンケートを実施し、意識変化の確認を行う。同じ世帯に同じ生徒が訪問することが難しいため、訪問後は生徒間で訪問サービスの振り返りと引き継ぎを行い、継続的な交流を意識できるようにする。

○実施計画

実施時期	内容
9月	訪問サービスの意義、仮説を立てる 訪問サービスの内容を考え、準備に取り組む 第1回訪問サービス実施(事前事後アンケート) 訪問サービス振り返り、引き継ぎ
10月	訪問サービスの準備
11月	第2回訪問サービス実施(事前事後アンケート) 訪問サービスの振り返り、引き継ぎ
12月	訪問サービスの準備
1月	第3回訪問サービス実施(事前事後アンケート) 訪問サービスの振り返り お礼の手紙書き

○協力先

佐用町社会福祉協議会

○注意点

マスク・消毒・フェイスシールドの徹底や、三密に配慮した感染対策を行う。

②仮説

対 象 ヒューマンサービス（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

訪問サービス実施前に佐用町で訪問サービスを行うことの意義を考え、仮説を立てるグループワークに取り組んだ。仮説を立てることで活動の目的や目標を明確にするとともに課題解決力を身に付ける。生徒が立てた仮説は以下の通りである。

- ・高齢者の生活について学習できる。
- ・コミュニケーションをとることで楽しみが増え、お互いが元気になる。
- ・普段の生活の悩みなどを聞いて高齢者の方の気持ちが楽になる、笑顔が増える。
- ・地域全体の活性化。

③準備と実施

対 象 ヒューマンサービス（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

訪問サービスでどのような交流を行うか仮説にそって内容を検討した。昨年度に当該学年が作成した生活実態調査アンケートも活用し、高齢者の方の生活や趣味にも寄り添った内容になるよう各グループでレクリエーションやプレゼントの準備に取り組んだ。実施した内容と訪問の様子は以下の通りである。

実施回	内容
第1回 (9月)	アンケートで日常や食生活、防災などについて聞き取り調査を行い、高齢者の方の生活実態を知る。また、自作したポケットティッシュケースと農業科学科の卵をプレゼントした。
第2回 (11月)	1回目の訪問を参考に、各グループで実態に合った内容を考えてレクリエーションを実施した。食生活に関するクイズを考えて一緒にしたり、趣味である俳句を教えていただいたりした。
第3回 (1月)	生活改善に向けての提案として、健康体操を実践した。訪問後も実践できるよう健康体操の説明書と手作りのカレンダーをプレゼントした。また、活動の振り返りとして訪問サービスの感想をアンケート形式で聞いた。



第1回 生活実態調査



第2回 レクリエーション



第3回 健康体操



交流の様子



健康体操説明書①



健康体操説明書②

④地域や生徒の反応

○高校生訪問サービス 訪問宅最終アンケート結果

Q 1、日程はどうでしたか。 よかった 6 2 他の日程がよかった 他の日程がよかった理由 ・ 季節が温かい時が良い。 ・ 10月ぐらいは米の収穫とかぶる。 ・ 夏は忙しい。	Q 2、回数はどうでしたか。 よかった 4 4 違う回数のほうがよかった 違う回数のほうがよかった理由 ・ 少ない。 ・ 1回でも多いほうが嬉しい。 ・ もっとたくさん来てほしかった。
Q 3、高校生の対応はどうでしたか。 よかった 8 0 努力が必要 よかった理由 ・ 子供と話している感じでよかった。 ・ 筆談してもらえた。 ・ 上手に話をしてくれたから。 ・ 悪く思うことはなかった。 ・ 気軽に話せた。 ・ 笑顔がいい。	Q 4、機会があればまた交流してみたいですか。 はい 7 1 わからない はいと答えた理由 ・ 畑や花を一緒に見たいから。 ・ みんなと話したいから。 ・ 話などをしていると楽しい。 ・ 色々と教えてほしいし教えてあげたい。 ・ 同じぐらいの年齢の人が少なくなった。 ・ 優しい対応をしてもらえた。
その他 楽しかった、全部よかった、勉強になった、またあるといいと思う、笑顔になれた、来てくれるのがうれしかった、同じ年代の人が減ったので交流ができて楽しかった、若返った気持ちになった、訪問してもらえてありがたかった、ありがとうございます	

(3) 給食サービスボランティアを通じた人とのふれあい

●目的

佐用町社会福祉協議会と協働で給食ボランティアに携わることにより、生徒が地元の方々や高齢者とコミュニケーションを図り、地域の貢献に携わる。また、上級学校で大量調理について学び、地域で献立作成から調理までの実践活動を行うことで調理技術の向上を目指す。

●生徒に身に付けさせたい資質・能力

課題発見・解決力、ボランティア精神、調理技術

①知識・技術の習得

日 時 令和3年10月6日（水）

場 所 日本調理製菓専門学校

対 象 フードデザイン（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

日本調理製菓専門学校との協働による大量調理の校外学習を実施した。給食サービスボランティアに向けて大量調理の技術を習得することを目的に行った。献立ごとにグループに分かれて本格的な機械も使用して調理を行い、約40食のお弁当を製作した。また、高齢者に好まれる献立や衛生管理についても講義をしていただいた。以下は研修の内容と、研修風景である。

①講義（大量調理の注意点、衛生管理、実習手順説明）

②調理実習（天ぷら、ひじきの煮物、鶏の照り焼き、ブロッコリー、味付け卵、酢の物）

③試食、片付け、まとめ



実習の様子①



実習の様子②



お弁当

○生徒の感想

- ・給食ボランティアを行ったことがないので、今回の講義でとても勉強になりました。給食や病院ではきゅうりもゆでて消毒すると聞いて驚きました。
- ・衛生面には特に気を遣い、生ものを使わない、熱湯消毒をするなど普段はしないことをたくさんしました。私はすでに給食ボランティアを行いましたが、ここまでのことはしなかったのが新しい発見でした。

②献立作成

対 象 フードデザイン（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

担当回を決め、グループに分かれて献立の作成を行った。以下の条件を提示し、タブレットなど情報機器も活用しながら献立を考案した。献立は実施日の一か月前までに管理栄養士の方にチェックしていただき、社会福祉協議会とやりとりを行いながら決定した。

条件	配置図						
①右の配置図で献立を考えること（<u>生ものNG</u>） ・ご飯（上に何かを振りかける程度で考える） ・主菜（メイン料理、肉か魚を使う） ・副菜（煮物、炒め物など） ・副々菜（あえ物など） ・果物（切ってそのまま入れられるもの） ②旬の食材を取り入れる（実施日に合わせる） ③農業科学科の野菜を取り入れる ④見た目のいりどりに注目して献立を考える	<table border="1"> <tr> <td>主菜</td><td>副々菜</td></tr> <tr> <td>果物</td><td>副菜</td></tr> <tr> <td colspan="2">ご飯</td></tr> </table>	主菜	副々菜	果物	副菜	ご飯	
主菜	副々菜						
果物	副菜						
ご飯							

③お品書き作成

対 象 課題研究（情報）（家政科 第2学年 情報コース選択者7名）

内 容

○実施概要

昨年度までは社会福祉協議会に準備していただいたお品書きに手書きのメッセージを添えていたが、今年度は生徒がお品書きのデザインを一から行いデジタルで作成した。手書きのメッセージやイラストを添えることは変えず、季節に合ったデザインを心がけさせるようにした。（右図）



④はがき作成

対 象 ヒューマンサービス（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

これまではお弁当を届けるだけという一方のサービス提供にとどまっていたが、人とのふれあいにつながるような双方向での実施を考え、お弁当にはがきを添えて、感想などを記入して返信していただく取組を実施した。はがきには、手書きのメッセージやイラストを添えて温かみあるものになるよう工夫した。（右図）

⑤調理

対 象 ヒューマンサービス（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

佐用町社会福祉協議会と協働で調理指導をしていただきながらお弁当製作を行った。完成したお弁当にお品書きをつけ、はがきを添えて各方面に配達していただいた。

実施日		献立	食数
第1回	令和3年 6月22日(火)	ゆかりご飯、鮭のホイル焼き、ソーセージとパプリカの炒め物、いんげんのごま和え、オレンジ	69食
第2回	令和3年 9月21日(火)	しらすご飯、豚肉と茄子のボン酢炒め、ポテトサラダ、ほうれん草のおひたし、梨、ぶどう	64食
第3回	令和3年10月12日(火)	菜めしご飯、むね肉のカレーピカタ、さつまいもの甘煮、ブロッコリーのマリネ、りんご	62食
第4回	令和3年11月16日(火)	さつまいもご飯、白身魚の梅マヨ焼き、玉ねぎと切り干し大根の煮物、パプリカのきんぴら、みかん	65食



調理の様子



第4回実施献立



完成したお弁当

⑥地域や生徒の反応

○返信はがき

返信があったはがきは、担当生徒に感想を伝えたり、次回の献立の参考にしたりするために当該クラスで教室掲示を行った。返信数は以下の通りである。

第1回：39通 第2回：31通 第3回：30通 第4回：31通

(4) ルーブリック評価作成

●目的

「指導と評価の一体化」を実現するためにルーブリック評価を活用し、ポートフォリオやレポートを活用した評価の在り方を研究する。

○実施内容

ヒューマンサービス（2年）でグループ活動やレポートに加え、「高校生訪問サービス」と「給食サービスボランティア」の取組について生徒がルーブリック評価を作成し、毎時間授業について自己評価を行った。以下は作成した評価規準である。

「給食サービスボランティア」

観点	献立決め	調理	はがき・お品書き作成
レベル 5	レベル4に加え、盛り付けや調理法にオリジナルのある献立ができた。	レベル4に加え、味付け、見た目、時間などに余裕をもって調理ができた。	文字やイラストを丁寧に書き、周りの手本となるはがきを書くことができた。
レベル 4	レベル3に加え、季節や地産地消を考えた献立を立てることができた。	レベル3に加え、作業をグループで協力して進めることができた。	文字を丁寧に書き、自分で考えてイラストも記入した。
レベル 3	栄養バランス、調理法、彩りに偏りなく考えることができた。	役割分担を行い、調理法も丁寧にし、味、盛り付けは計画通りの弁当ができた。	文字やイラストを丁寧に書いた。
レベル 2	栄養バランスは考えられているが調理法、彩りに偏りがある。	調理手順を把握し、時間内に終わったが、味付けや見た目が悪くなった。	文字を書き、周りの人の作品を参考にイラストも書いた。
レベル 1	栄養バランスや調理法、彩りが偏っている。	調理手順が決まっておらず時間内に終わらせられなかった。	文字だけ書いた。

「高校生訪問サービス」

観点	準備・計画	交流・実施	反省・引き継ぎ
レベル 5	自分のアイデアを出し、周りに指示を出しながら動く事ができた。	レベル4に加え、積極的に自分たちで考えて行動ができた。臨機応変に対応できた。	レベル4に加え、訪問先の特徴を相手に理解してもらい、充実した引き継ぎを行った。
レベル 4	自分のアイデアを出し、自ら率先して動く事ができた。	レベル3に加え、相手のことを考えて会話ができた。決めていた内容がスムーズに進んだ。	レベル3に加え、具体的な改善策を挙げ、訪問話し合いができた。訪問先の特徴が伝えられた。
レベル 3	必要な準備を考えて自分から動く事ができた。	スムーズに会話をし、コミュニケーションが取れた。笑顔を心掛け、会話が弾んだ。	反省点について改善策を上げることができた。訪問先の話ができた。
レベル 2	人に言われてから行動した。	挨拶はできたが、うまく話せない。自分で考えて行動できない。	反省点はあるが、改善策がわからない。内容が相手に伝えられない。
レベル 1	自分から行動できない。	表情がかたく、うまく話せない。計画していたことができていない。	反省・改善点がわからない。内容を相手に伝えられない。

4 成果

(1) 専門的知識・技術の習得

- ・外部講師による講義は毎回新鮮さを感じることができ、生徒にとっても強く印象に残る学習となった。
- ・様々な視点から福祉や高齢者の知識を得ることで、家族や地域の支えになっていきたいというボランティア精神も芽生えた。

(2) 高校生訪問サービスの実施

- ・仮説を立てて目的を明確にして活動に取り組むことで、活動の成果や課題が明確になった。
- ・訪問サービス先では、予定通りにいかないことも多く、その場で対処できる臨機応変さや場を繋いでいくコミュニケーション能力が身についた。
- ・地域の方と直接触れ合い、感謝の言葉をかけられることで地域交流の意義や大切さを改めて実感することができ、活動に自信を持つことができた。

(3) 給食サービスボランティアを通じた人とのふれあい

- ・様々な科目で連携を取りながら一つの活動に取り組むことができ、横断的なカリキュラム・マネジメントとなった。
- ・あらかじめ準備されたものではなく、生徒自身が献立の作成から調理までを行うことでこれまで以上に大きな達成感を味わうことができた。
- ・はがきを添えることで地域と双方向のやりとりを行うことができ、地域の反応を知ることで、生徒の取組に対する思いや地域への愛着が深まった。

(4) ルーブリック評価作成

- ・評価表を生徒が作成することによって、改めて学習への取り組みを見直すことができた。
- ・毎時間自己評価を行うことで、自分の成長記録を付けることができた。

5 課題

(1) 専門的知識・技術の習得

- ・様々な活動や講習会、複数科目での活動実施により、ファイリングが煩雑になっているため、外部講師の講習会で学習を終わらず、校内での振り返りや学習の定着を図る必要がある。

(2) 高校生訪問サービスの実施

- ・活動回数を増やすため、学校周辺の住民にも協力依頼をし、活動範囲を再検討する。
- ・高齢者の方と訪問だけではなく、学校の地域活動にも参加していただく機会を設ける。

(3) 給食サービスボランティアを通じた人とのふれあい

- ・献立は目新しいものではなく、見た目だけで味が想像できる高齢者の方が親しみを持てるものを考える必要がある。

(4) ルーブリック評価作成

- ・深く考えずに評価を行っている生徒もいるため、振り返りの時間を十分に確保し、教員間でも評価項目を確認する必要がある。

6 次年度に向けて

(1) 専門的知識・技術の習得

- ・学年間連携

専門家による指導を継続することはもちろん、下級生と一緒に活動を行うことで、学びなおしや知識の定着を図り、より深い学びにつなげていく。また、活動の継承や横断的なカリキュラム・マネジメントを行う。

(2) 高校生訪問サービスの実施

- ・交流方法の検討

当初の計画での訪問が困難になっているが、活動を継続していく。高齢者宅を訪問するだけでなく、往復はがきやリモート活用も計画し、交流回数を増やせるよう検討を行う。

(3) 給食サービスボランティアを通じた人とのふれあい

- ・地域に寄り添った活動

給食サービスボランティアは来年度も数回予定している。返信はがきの意見を取り入れ、高齢者の方に寄り添った献立計画を立てる。

(4) ルーブリック評価作成

- ・評価会の開催

教員間でルーブリックの評価会を開催することで、生徒の評価基準を確定させる。

(5) その他

- ・食や生活改善の仕掛けづくり

訪問サービスでの調査統計結果を生かし、データに基づく高齢者の食生活改善の指針を作成する。食改善レシピも作成して地域に配布することで、食を通じた健康寿命の延伸活動につなげる。また、佐用チャンネルやインターネットで健康体操を配信し、幅広い情報発信を行う。

- ・佐用町、隣接県への情報発信

県境という立地を生かして、他県で特産品、少子高齢化、防災状況などの調査を行う。積極的な交流の場として情報の共有と発信を行うことで、課題発見力や解決力の向上を目指す。

【佐用の水害から学ぶ～災害に強い町づくり～】

1 テーマ設定の理由

本校が所在する佐用町は、平成21年台風9号の豪雨被災の教訓を生かし、地域を安心安全で充実した暮らしができる町に進化させることが課題として挙げられている。本校でもこの課題を認識し、町と協働で活性化・貢献活動に取り組んでいきたいと考えたため、「災害に強い町づくり」をテーマとした。

2 目標

- ・地域と上級学校と連携して災害・被災時の課題を理解する。
- ・災害時に備え、栄養バランスを考慮した災害食、保存食の開発を行うなど、「食」を中心とした安全・安心で災害に強い町づくりを自治体等に提言し、貢献できる人材を目指す。

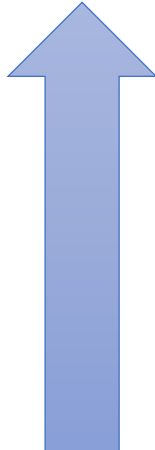
【カリキュラムの構成】

災害に強い町づくりにおけるカリキュラムの構成と生徒が身に付ける力の概要図を次ページに示した。

【食に通じた佐用を支えるプロフェッショナル人材の育成】

～佐用町の水害から学ぶ～

災害保存食非常食開発・支援者育成、災害レジリエンス、安心安全な町づくり

学年	付けたい力	科目	内容
3年 発展	・表現力 ・アイデア力 ・ボランティア精神 ・プレゼンテーション ・コミュニケーション 	フードデザイン 課題研究	・地域で防災学習指導 →減災リュック制作指導 →防災学習授業（様々な年代）
		フードデザイン ヒューマンサービス	・防災リーフレット作成・配布 →災害食の提案 →保存食の開発
		フードデザイン	・防災訓練指導、避難指導 →学年間指導（3年生が2年生に伝授）
2年 実践	・情報発信力 ・課題解決力 ・企画力 ・プレゼンテーション ・コミュニケーション 	フードデザイン	・保存食開発 →企業コラボ →みかしほ学園訪問実習（缶詰）
		フードデザイン ヒューマンサービス 課題研究	・防災訓練企画、避難指導 →地域の避難訓練について調査（役場） →ハザードマップ確認（役場） →地域住民の参加計画 →保存食配布 →学校に減災 week の実施依頼 →オリジナルハザードマップ作成 →幼児・高齢者向けの防災学習計画
		課題研究	・家政科通信を全校生徒に配布 →学んでいることや防災プチ情報を発信
1年 基礎	・基礎的知識、技術 ・課題発見力 ・ふるさと意識	総合的な探究の時間	・佐用学、防災学習 →役場による佐用学特別授業 →グループ発表で情報共有
		生活産業基礎	・商品開発プロセス学習 →佐用町に必要な商品・サービスのアイデア捻出 →佐用町に求められている人材把握
		フードデザイン	・災害食学習、バッククッキング実習 →いずみ会、役場による講習会 →災害食調べ学習

3 実施内容

(1) 災害食・保存食について知識習得

●目的

上級学校や地域の方との交流を通じて、より専門的な知識を習得し生徒の深い学びにつなげる。また、合同防災訓練に向けて知識や技術を習得することで、実践活動において生徒の主体性を促す。

●生徒に身に付けさせたい資質・能力

基礎知識・技術、ふるさと意識、課題発見・解決力、コミュニケーション能力

①校外学習

日 時 令和3年8月26日（金）

場 所 日本調理製菓専門学校

対 象 フードデザイン（家政科 第2学年 36名）

内 容

○実施概要

日本調理製菓専門学校との協働による災害食・保存食研修会を実施した。災害時に活用できる知識と保存食の技術について学ぶだけではなく、災害に関する事業と横断的なつながりを持たせることを目的とし、缶詰や真空調理の商品開発につなげる。以下は研修の内容と、研修風景である。

- ①災害食・保存食講義、実習手順説明
- ②調理実習（トマトチキンカレー、 α 米を使った焼き鳥丼、ミルクライス）
- ③缶詰体験
- ④試食、片付け
- ⑤まとめ



缶詰体験の様子



缶詰にした状態



調理メニュー

○生徒の感想

- ・被災した時のことをすごく考えられている調理法が多く、特にミルクライスはすごく考えられているメニューだと思いました。
- ・トマトチキンカレーの缶詰では、ただ缶に作ったものを詰めてふたをすれば良いというものではなく、pH値をはかり下がっていることを確認してからでない缶に入れてはいけないというとても専門的な知識まで教えていただき、多く学ばせていただきました。
- ・皿や油を使わないで簡単にできるんだと思いました。

②災害食学習

日 時 令和3年11月18日（木）2・3限目
場 所 本校第一食物室
対 象 フードデザイン（家政科 第1学年 25名）
内 容

○実施概要

佐用町の栄養士、いずみ会の皆様からの災害食学習であるパッククッキング講習会で防災を通じた食育活動を実施した。知識・技術の習得だけでなく、地域の方との交流も目的とした。以下は実施の流れと授業風景である。

- ✓パッククッキングとは（「防災月間」VTR視聴、調理工程の説明）
- ✓交流
 - ・梅干しごはん、肉じゃが、さば缶と白菜の煮物、ポテトサラダ作り
 - ・チラシを使った紙皿の作成（試食時に使用）
 - ・α化米の説明
- ✓試食



実習の様子



紙皿づくりの様子



試食の様子

○生徒の感想

- ・最初は、非常食だから、「冷たい・固い」という勝手なイメージがありました。でも実際に4品作ってみると意外と簡単にあまり時間がかからずにそしておいしく作ることができてびっくりしました。
- ・私たちが普段食べているような食べ物の作り方を知っているだけで、もしもの時に困らずに少しは安心できるのかなと思った。
- ・これが災害の時に食べられると思うとすごく安心した気持ちになりました。

(2)減災week

●目的

学校全体で防災学習に取り組み、防災意識を高め、他学科・他教科との連携などカリキュラム・マネジメント体制の構築を行う。

○実施概要

「減災week」を1週間～2週間設定し、その期間、各教科で防災・減災に関する内容を取り入れた授業を1時間程度行う。以下の計画を立てた。

実施時期	内容
9 月	各教科に授業内容のアンケート調査
1 1 月	減災w e e k 設定、各教科の授業で実施
1 2 月	防災訓練実施

2 学期中間考査後の 1 1 月 1 日（月）～1 1 月 1 2 日（金）の 2 週間を減災w e e k とした。授業前と授業後には生徒にアンケートを実施し、生徒の変容を確認した。また、授業担当教員にもアンケートを実施し、この取組の今後の在り方を調査した。

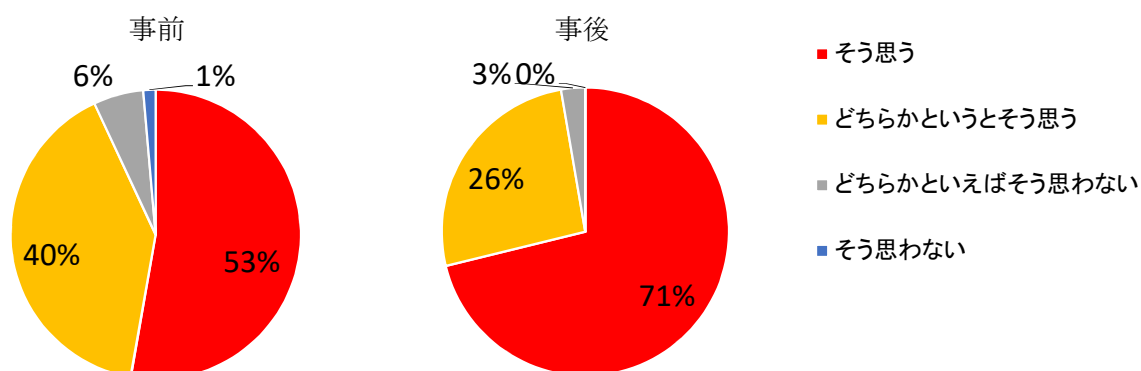
教科	科目	学年	内容
家庭	家庭基礎	1 年	災害時の備えについて
農業	農業と環境	1 年	農業と災害の関係
保健体育	保健	1 年	応急手当について
美術	美術	2 年	防災ピクトグラム
英語	英語表現	2 年	防災対策について
社会	地理 A	3 年	ハザードマップ

○生徒の感想

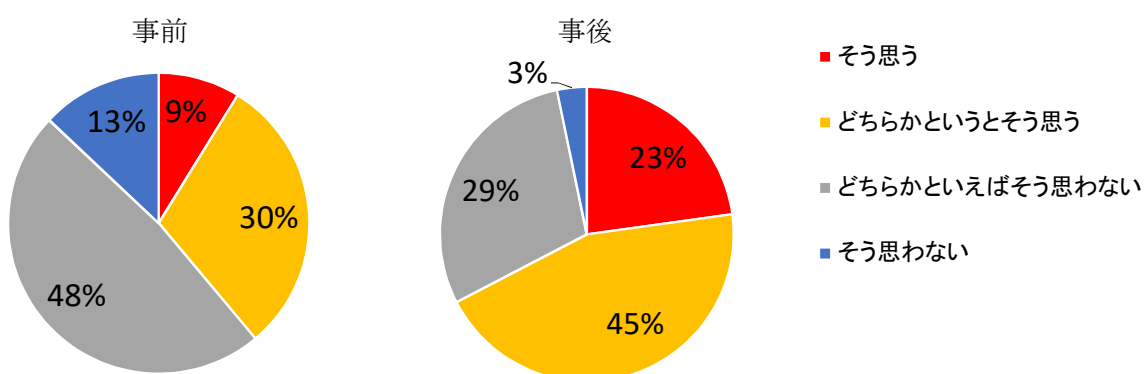
- ・いつか絶対起こるものだから真剣に防災と向き合っていないといけないと思った。
- ・テレビとかでも時々防災についてのことをやっているけど毎回忘れていることがあるので、気を付けたいなと思いました。
- ・佐用町でも災害がいつ起こるかわからないので普段学校でやっている避難訓練などはまじめに取り組もうと思った。
- ・近くのある田んぼが水害を抑えていることに驚いた。
- ・いろいろな知らないマーク、ピクトグラムを知れてよかった。
- ・ケガに対応した手当てをし、一つの命を無駄にしない行動をしたいと思った。
- ・防災グッズを置いていたほうがいいとは知っていたけど実際なにを入れるとか考えたことがなかったので参考になりました。

○アンケート結果（生徒）

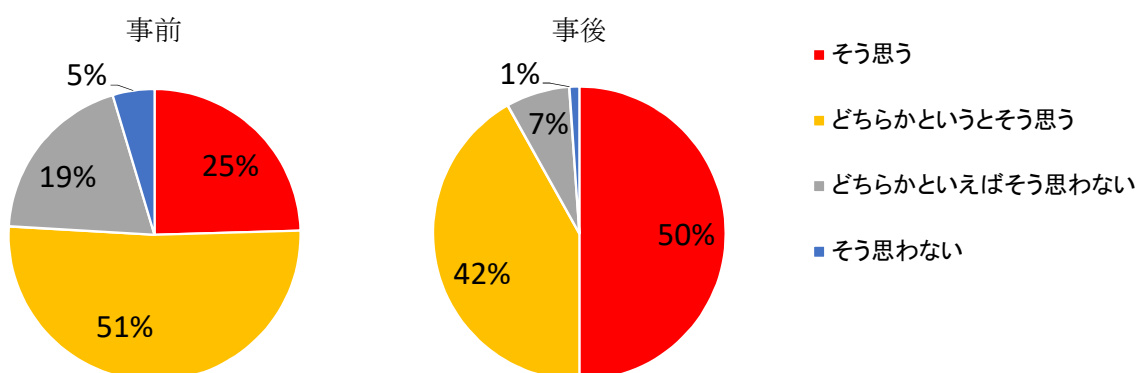
①私たちは日ごろから災害を意識して生活したほうがよい。



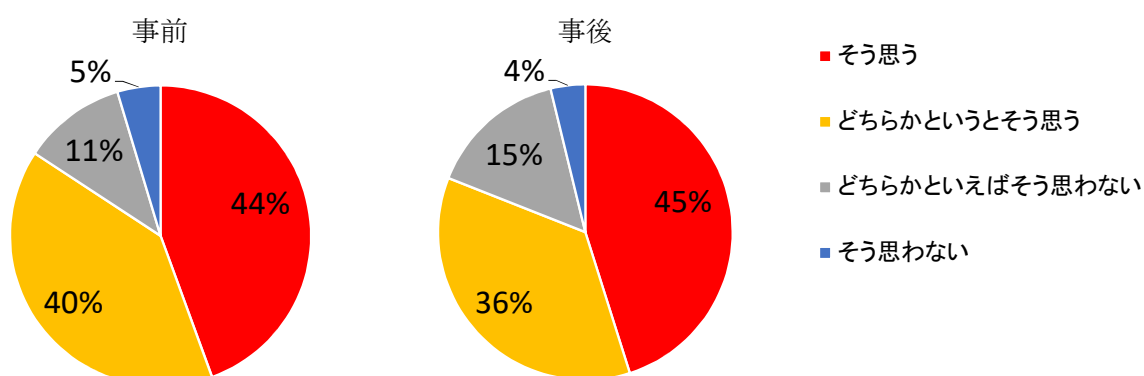
②私は災害や防災、減災について様々な知識を持っている。



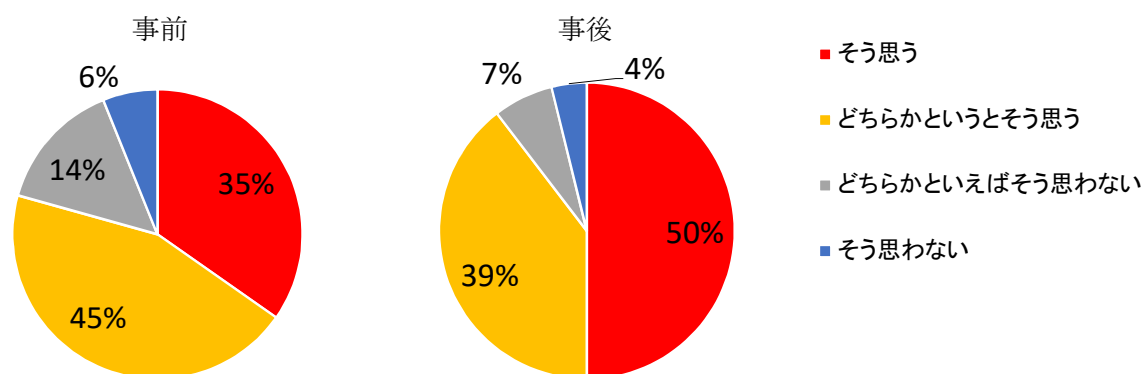
③災害や防災、減災について積極的に知りたいと思う。



④実際に災害が起こった時、どう行動すればいいか不安がある。



⑤災害が起こった時、高校生として地域にできることがしたい。



○アンケート結果（教員）

- ・生徒の様子や感想を読んで、日ごろから防災に対する意識を持たせることが大切だと改めてわかった。自分自身も日ごろから意識を持ち、授業に取り入れるようにしていきたい。

- ・起震車体験など、実際に自信の震度を体験できるような機会があると、より防災の意識も高まるのではないかと思います。

(3) 多世代向け防災学習

●目的

地域の保育園や子育て支援施設、高齢者との協働で防災学習を行い、日常からの防災意識を高め、災害時のスムーズな行動への意識づけを行う。生徒には主体的に動く力と「共助」の意識を持たせる。

●生徒に身に付けさせたい資質・能力

情報発信力、課題発見・解決力、企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、ふるさと意識

①保育園児向け防災教室

日 時 令和3年11月10日（水）10:00～11:30

場 所 佐用町立佐用保育園

対 象 課題研究（保育）（家政科 第3学年 保育コース選択者3名）

内 容

○実施概要

地域の保育園の園児（5歳児）に向けて災害をテーマとした防災教室を企画した。生徒自身が、園児に楽しみながら災害について考えてもらうという目標を立てて準備に取り組んだ。

実施時期	内容
9月	調べ学習、内容計画
10月	グッズ準備
11月	リハーサル、本番

○製作物

担架・・・支柱とタオルで製作した。ぬいぐるみを人間役にして、人命救助の体験をすることで、防災に対する意識をもってもらえるようにした。（図1）

キャタピラ・・・からだを低くして逃げるための練習として、準備した。体験では子どもたちが怪我をしないように生徒が声をかけ、安全面にも配慮した。（図2）

替え歌・・・きらきら星のメロディーで避難するときに気を付けてほしいことを歌詞にし、園児たちが読みやすいように、大きめの字で歌詞カードを作った。

防災かるた・・・一つ一つ文章を考えて、絵や文字も手書きで製作した。



図1 担架



図2 キャタピラ



当日の様子

○生徒の感想

- ・防災教室が終わると子どもたちが「楽しかった」と言ってくれ嬉しかったです。
- ・この取り組みが子供たちの生活に少しでも役立っていると嬉しいです。

②佐用小学校との減災学習

○実施計画

実施時期	内容
6 月	外部講師による講習会（子供の減災教育）
1 0 月	交流に向けた準備
1 1 月	佐用小学校交流会（減災ワークショップ）
1 2 月	合同防災訓練、体験学習（段ボールベッド）

(a) 子供の減災教育

日 時 第1回目 令和3年6月 7日（月）2限目

第2回目 令和3年6月28日（月）2限目

場 所 本校保育大教室

対 象 課題研究（福祉）（家政科 第2学年 福祉コース選択者10名）

講 師 ママの働き方応援隊 小西 玲奈 氏

内 容

○実施概要

小学生向けの減災教育の企画・実施に向けて外部講師を招き、専門的な知識を身に付けることで、生徒の主体的・対話的な深い学びにつなげることを目的とした。講義は以下の内容で2回にわたって実施した。

第1回	・キャンディーレイを用いた減災ワークショップ 宿題 実際に子供に減災ワークショップを行う際の導入部分とまとめの部分を考え、模擬授業をグループで発表する
	・グループワーク（内容の検討） ・パワーポイントを用いて、減災ワークショップのスライドづくり ・発表練習、リハーサル
第2回	・グループ発表（模擬授業） ・まとめ



ワークショップ



キャンディーレイ



グループ発表

○生徒の感想

- ・小学生もだと思うのですが、私たち高校生もあまり災害について考えることは少なく、そのきっかけ作りがとても大切だなと思いました。

(b)防災出前授業と備蓄食ワークショップ

日 時 令和3年11月26日（金）10：15～11：15

場 所 佐用町立佐用小学校

対 象 課題研究（福祉）（家政科 第2学年 福祉コース選択者10名）

内 容

○実施概要

佐用小学校1年生（40名）の児童を対象とし、ワークショップを行った。6月に実施した子供の減災教育の学びを活かし、生徒自らが内容を企画し、計画を立てて準備に取り組んだ。また、12月に行われる合同防災訓練に向けた事前交流も目的とし、作ったキャンディーレイは避難時に身に付けてもらうことにした。実施した内容は以下の通りである。

○準備物

高 校：PC、講義スライド、原稿、袋、飴、テープ、リボン、名札

小学校：大型モニター、はさみ、マジックペン、長机、

○ワークショップ

①防災出前授業（減災とはなんだろう？）

②備蓄食ワークショップ（キャンディーレイを作ってみよう）

③防災訓練の説明



講義の様子



キャンディーレイづくり



交流の様子

(c)佐用合同防災訓練、体験学習

日 時 令和3年12月10日（金）

場 所 本校グラウンド、雨天練習場

対 象 課題研究（福祉）（家政科 第2学年 福祉コース選択者3名）

内 容

○実施概要

本校で実施した佐用合同防災訓練に佐用小学校1年生も参加していただき、減災学習を通じた交流のまとめを行った。当日は、小学生にキャンディーレイと防災頭巾を身に付けてもら

い、小学校の玄関前に事前に集合し、高校生が誘導し、高校のグラウンドに避難した。訓練後は、雨天練習場に移動し、段ボールベッドづくりと体験を行い、体験学習終了後には防災グッズとして作成した自分の名前や保護者の連絡先を書いておける緊急持ち出し用連絡先マグネットをプレゼントした。



避難訓練の様子



段ボールベッド体験



マグネット

○生徒の感想

- ・小さい子は、初めてのことに興味津々でまとめたりするのが大変でした。でもみんなきちんと話を聞いてくれて良かったです。一緒に避難したりして貴重な体験ができました。
- ・始めはすごく不安な気持ちでいっぱいだったけど、無事に終わることができて良かったです。遅くまでの居残りや今日までの準備を頑張ってきて良かったです。

(d) 避難訓練を通じた地域の高齢者との交流

日 時 令和3年12月10日（金）
場 所 本校グラウンド、会議室
対 象 課題研究（福祉）（家政科 第2学年 福祉コース選択者3名）
参加者 佐用町長尾地区住民10名
内 容

○実施概要

生徒が地域と共に災害について学ぶことを目標として掲げ、本校で実施した佐用合同防災訓練に参加していただき、避難訓練と体験学習を行った。地域住民の方には、本校同窓会館に事前に集合していただき、避難放送の合図で高校生が誘導して本校グラウンドに避難した。訓練後は会議室に移動し、災害時に役立つグッズ作り体験としてキッチンペーパーを使ったマスクづくりとチラシを使った紙皿づくりの体験学習を行った。



避難訓練の様子



体験の様子



紙皿、マスク

○生徒の感想

- ・最初はうまくコミュニケーションが取れるか、ちゃんと説明ができるかなど不安なことがたくさんあったけど、どの方もとても優しくてすごく話しやすい方たちばかりでした。防災訓練の後、紙皿とマスクづくりをする時、進度に大きな差があり、リハーサル通りだとうまくいかない所がありましたが、予定を変えて臨機応変に対応できたのでよかったです。
- ・皆さん苦戦しながらも楽しそうに作って下さっていてとてもうれしかったです。また、マスクづくりの時には、作り終わった方が実際につけて下さっていて、その姿が今回一番印象に残っています。自分たちが計画して作ったものがこうして他の方の役に立つものになるととてもうれしかったです。
- ・本番になってやってみると思っていたのとは違って、思い通りに進めることができませんでした。事前準備で自分が体験者の立場になったりすればよかったと思いました。

(4) 佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～企画

●目的

毎年、本校のみで行っている防災訓練を、地域を巻き込んだ取組に変えて企画運営を行う。佐用町との協働事業として拡大させて実施することで、地域と共に災害について学び地域全体の防災意識の向上を目指すことで、「災害に強い町づくり」につなげる。

また、生徒自らが計画から進行を行うことで、企画運営力を身につけ、地域住民と関わることでコミュニケーション能力を向上させ、主体的・対話的な学びにつなげる。

●生徒に身に付けさせたい資質・能力

情報発信力、課題発見・解決力、企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、ふるさと意識

○実施計画

実施時期	内容
1 学期	外部講師による災害講義、防災訓練に関する調べ学習
9 月	第一回企画会議、体験学習の立案
1 0 月	第二回企画会議、役割分担、関係各所依頼
1 1 月	体験学習準備、災害マニュアルブック作成、佐用小学校事前交流
1 2 月	リハーサル、佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～実施

○協力先

佐用町役場、佐用小学校、近隣住民、佐用消防署、ドローン減災士協会、兵庫県立大学

①外部講師による災害講義

(a) 佐用町について知る

日 時 令和3年5月13日（木）4限目
場 所 本校保育大教室
対 象 総合的な探求の時間（家政科 第1学年 27名）
講 師 佐用町 企画防災課 松本 和也 氏

内 容

○実施概要

昨年同様、新入生が佐用町の取組や現状について基礎知識を得るために、外部講師による講義を実施した。平成21年に佐用町で発生した水害についても教えていただき、生徒の防災意識の向上を目的とした。

(b) 佐用町の災害について学ぶ

日 時 令和3年5月31日（月）3限目

場 所 本校保育大教室

対 象 課題研究（福祉）（家政科 第2学年 福祉コース選択者10名）

講 師 ドローン減災士協会 久保 正彦 氏

内 容

○実施概要

佐用合同防災訓練の企画者である課題研究（福祉）の生徒を対象に、改めて佐用町の水害について考え、学びを深めるため、当時の写真や映像、復興までの道のりについて講義を実施した。

(c) 減災ワークショップ（別記参照）

(d) 防災ワークショップ

日 時 第1回 令和3年10月 8日（金）5、6限目

第2回 令和3年10月15日（金）5、6限目

場 所 本校保育大教室

対 象 課題研究（家政科 第2学年 36名）

講 師 兵庫県立大学 木村 玲欧 氏

兵庫県立大学生

(e) 内 容

○実施概要

企画生徒だけではなく、2年生全員の防災意識を高めるため、兵庫県立大学による防災ワークショップを実施した。災害時の食の重要性や水問題について学び、大学生の方が考えてくださった「みんなで遊んでたすカルテット」や大学生の方を交えたワークショップで災害について楽しみながら学びを深めた。



講義の様子



たすカルテットの様子



ワークショップの様子

○生徒の感想

- ・私たちが普段食べている物、飲んでいる物も非常食になること、またその期間を初めて知った食材もありました。
- ・体験談を見て、普段備蓄しているもので大丈夫だと思っていた人が実際に災害にあって全然足りてなかったと思っていることが多いと思いました。

②企画会議

日 時 ①令和3年10月 4日（月） 5、6限目

②令和3年10月27日（水） 5、6限目

場 所 ①本校第一被服室

②本校保育大教室

対 象 課題研究（福祉）（家政科 第2学年 福祉コース選択者10名）

参加者 佐用町役場（企画防災課）、ドローン減災士協会、佐用高校関係者

内 容

○実施概要

防災訓練の準備を進めるにあたって、佐用町役場やドローン減災士協会にも参加していただき、企画会議を開催した。第1回目は防災訓練の進め方について、第2回目は防災訓練の役割分担について話し合いを行った。実施内容について違う視点からのアドバイスを多くいただくことで、生徒自身の防災訓練に対する視野を広げることを目的とした。また、実際に防災訓練に協力していただく方と直接関わることで、生徒の企画に対する責任感の向上も目指した。



○生徒の感想

- ・自分では考えていなかったこともまとめられて、この防災訓練を想像することができました。
- ・一つ一つの授業、授業外でも何か役に立つようなところを考えたりしていきたいです。当日に準備不足にならないよう準備万端で協力してやっていきたいと思いました。
- ・自分たちが考えた案ができるか不安だったけど、消防署の方や役場の方と協力して防災訓練を行いたいと思いました。

③佐用小学校事前交流（別記）

④体験学習準備

(a)パッククッキング試作調理

パッククッキングの体験学習に向けて複数の献立の試作を行い、完成品の評価をすることで当日の体験献立を決定した。（図1）肉じゃが、炊き込みご飯、ミネストローネ、蒸しパンを試作し、調理の手軽さや味、満足度の観点から当日の体験献立は炊き込みご飯に決定した。

(b)災害食講義に向けて

家政科生徒が実施する災害食講義に向けて、生徒が自ら講義の流れやスライド、原稿を考え

た。内容については外部講師による災害講義で得た知識を基に検討した。講義時間は約15分と設定し、何回も読み合わせを行うことで、内容の再考や時間調整を行った。(図2)

(c) 地域との体験学習に向けて

体験時間は約30分とし、佐用小学校、地域住民の方の体験学習内容の検討を行い、当日の説明プリント、原稿などを作成した。また、佐用町役場にご協力いただき、段ボールベッドの組み立て練習を行った。(図3、図4)

(d) ドローン放送練習

ドローン減災士協会にご協力いただき、生徒のドローンによる避難誘導放送の練習を本校グラウンドにて行った。放送原稿は生徒が考え、読むスピードや発音などにも気を配って練習した。(図5)

(e) リハーサル

防災訓練前に各体験場所で担当に分かれてリハーサルを行った。事前に担当班長を決めておくことで生徒により強い責任感を持たせた。



図1 パッククッキング試作



図2 講義練習



図3 紙皿づくり



図4 段ボールベッド組み立て



図5 放送練習

⑤災害マニュアルブック作成(別添1)

佐用町の危険な場所や、家政科で学んだ備蓄食やパッククッキングなどの知識を多くの人に知ってもらいたいという思いを込めて作成した。(右図)

佐用町の気づきマップでは、実際に高校周辺を探索し、危険個所を探して地図を作成した。パッククッキングレシピ集は試作で調理を行った4品を記載した。



⑥佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～実施

日 時 令和3年12月10日（金）2～4限目
場 所 本校グラウンド、各体験学習実施場所
参加者 佐用高校生徒職員（570名）、佐用町企画防災課（4名）、佐用小学校1年生・職員（44名）、地域住民長尾地区（10名）、ドローン減災士協会（5名）、兵庫県立大学木村教授ゼミ生（11名）
視察：小野市おの防災リーダー（9名）、上郡高校（2名）

内 容

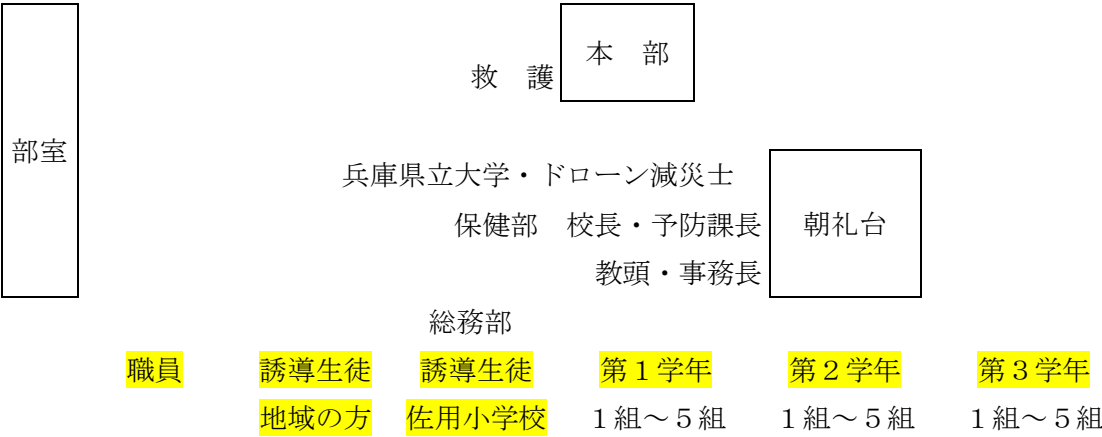
○実施概要

時間	内容	場所
8:55～ 9:40	LHR（テスト返しなど） ※2年家政科、普通科一部男子生徒は準備にあたる （クッキング準備、近隣住民の誘導、小学生の誘導）	各HR教室
9:50～ 9:55	担任から説明	各HR教室
9:55～10:00	校内放送で緊急地震速報を流し、シェイクアウト訓練を行う	グラウンド
10:00～10:10	スピーカードローンで上空から誘導し、グラウンドに出る	
10:10～10:15	講評（消防署職員）	
10:15～10:20	総括（校長）	
10:20～10:30	ドローンを用いた物資輸送のデモンストレーションの見学	
10:30～10:35	ドローン減災士の紹介とまとめ	
10:45～12:05	各学年に分かれて体験学習を行う	各実施場所
12:15～12:25	アンケートなどの記入	各HR教室

- ・山崎断層を震源とした大規模な地震が発生。校舎の一部が倒壊し避難経路が制限された。
- ・放送設備は、使用可能である。

○避難集合隊形

小学校側





シェイクアウト訓練



避難の様子



物資輸送ドローン

○体験学習

実施学年・科等	実施内容	実施場所	協力団体・担当教員等
1年農業科学科・普通科 (122名)	けむり体験、応急手当、簡易担架作り、消火体験	グラウンド 第一多目的教室	佐用消防署 1学年の先生
1年家政科 (26名)	2年の体験学習見学、補助スタッフ	前庭、各HR教室	岡、琴川
2年農業科学科・普通科 (146名)	2年家政科によるパック調理体験、災害食講義	前庭、各HR教室	多々良、中田 2学年の先生
2年家政科 (36名)	体験学習スタッフ	各実施場所	小寺
3年全学科 (170名)	防災ワークショップ	体育館	兵庫県立大学 3学年の先生
佐用小学校1年 (40名)	避難所生活体験（段ボールベッド）	雨天練習場	佐用町役場 高橋
近隣住民の方 (5～10名)	避難生活に便利なグッズ作り（マスク、紙皿）	会議室	小寺 生徒会の先生

【1年農業科学科・普通科】

10:35～10:45 各実施個所に移動

時間	1組（37名）	3組（25名）	4組（24名）	5組（36名）
10:45～11:00	簡易担架作り	応急手当	消火体験	けむり体験
11:05～11:20	けむり体験	簡易担架作り	応急手当	消火体験
11:25～11:40	消火体験	けむり体験	簡易担架作り	応急手当
11:45～12:00	応急手当	消火体験	けむり体験	簡易担架作り

12:05～12:15 体験終了後スリッパを拭き、教室に戻る

12:15～12:25 教室にてアンケート記入

（準備物）担架用の竹（10）、ブルーシート、パーテーション(5)、その他は消防署が準備



簡易担架作り



消火体験



応急手当

【2年農業科学科・普通科】

10:35～10:45 スリッパを拭き、教室に戻る

1組（39名）・3組（39名）	4組（33名）・5組（35名）
10:45～10:50 パック調理の説明	10:45～11:00 災害食講義
10:50～11:00 袋詰め体験	11:00～11:05 パック調理の説明
11:00～11:15 紙皿づくり	11:05～11:15 袋詰め体験
11:15～11:20 前庭に移動	11:15～11:30 紙皿づくり
11:20～11:30 パック調理の見学	11:30～11:35 前庭に移動
11:30～11:50 教室に戻り黙食	11:35～11:45 パック調理の見学
11:50～12:05 災害食講義とまとめの挨拶	11:45～12:05 教室に戻り黙食とまとめの挨拶

12:15～12:25 教室にてアンケート記入

（前庭準備物）テント（2）、長机（8）、カセットコンロ（8）、鍋（8）、タイマー（8）、消毒液（2）
（教室準備物）タブレット（4）、パワーポイント原稿、紙皿説明用紙（150）、A4古紙（150）、
ポリ袋（150）、材料、バット・ボウル、消毒液（4）、スプーン（150）、見本品（4）



講義の様子①



講義の様子②



パッククッキング会場



パッククッキング見学



紙皿づくり



試食

【3年全クラス】1組(33名)、2組(34名)、3組(27名)、4組(38名)、5組(38名)

10:35～10:45 全クラス体育館に移動し、グループごとに着席する

10:45～10:50 体験学習の流れを説明

10:50～11:10 佐用町水害の映像、役場の方のお話

11:10～12:00 ゲーム(たすカルテット)実施(右図)

12:00～12:05 講評

12:05～12:15 HR教室へ移動

12:15～12:25 教室にてアンケート記入

(準備物) プロジェクター、イス(170)、長机(36)、その他は県立大学が準備



【佐用小学校】(40名) ※小学生の持ち物: キャンディレイ、防災頭巾

10:35～10:45 雨天練習場へ移動

10:45～11:15 1、2年家政科による段ボールベッドの説明と体験

(準備物) 説明原稿、段ボールベッド(2)、毛布、消毒液(2)、プレゼント(40)

【地域住民の方】(10名)

10:35～10:45 会議室へ移動

10:45～11:15 1、2年家政科による避難生活に便利なグッズ作りの講義

(準備物) 見本品、説明原稿とスライド、モニター、説明用紙(10)、長机、イス、アルファ化米
A4古紙(10)、キッチンペーパー(10)、タイ(10)、セロハンテープ、消毒液(1)

○生徒の感想

- ・災害が起こった時にドローンを使うことを初めて知った。
- ・今日の防災訓練、体験学習は消防士の方々が分かりやすく説明してくださり、自分にとってとても有意義なものになりました。今後自分の身の周りで災害が起きても落ち着いて適切な判断をすることを心がけていきたいです。
- ・今日教えてもらったことをもし災害が起こった時に活かして自分が生き残れるように、そしてけがをしている人がいたら助けたいです。
- ・災害の時は非常食しか食べられないと思っていたが日頃食べているものが災害時の時に作れる事が分かり興味を持った。
- ・紙皿の作り方とか防災の時に役立つご飯を食べたりマニュアルをもらったりと色々な事を家政科の人たちに学ばせていただいたことを感謝したいと思う。
- ・パッククッキングで作ったご飯がおいしかった。簡単な紙皿の作り方を知れてよかった。
- ・防災マップを見て災害への意識が高くなったのではないかと思います。
- ・今日の防災訓練で日頃から気を付けることを忘れかけていたので、学びなおすことができ、良かったです。
- ・ハザードマップを見て、駅から高校まで危険なところがあったより多くて驚いた。
- ・ポリ袋でご飯を炊けることにびっくりした。

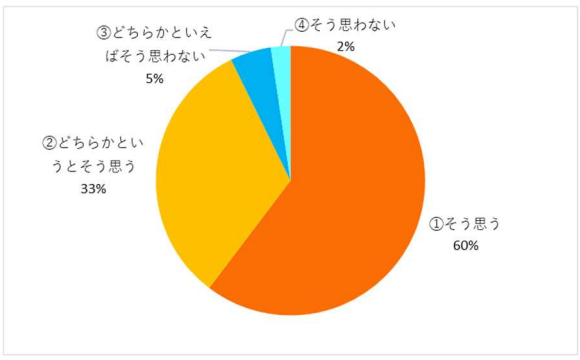
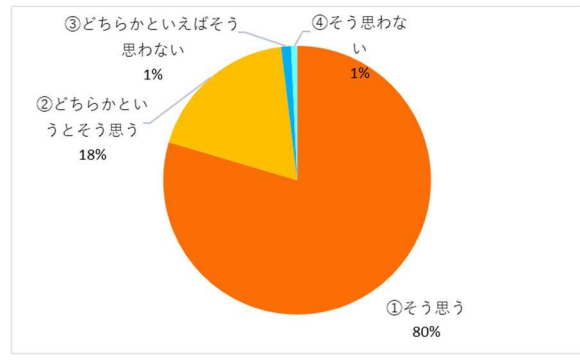
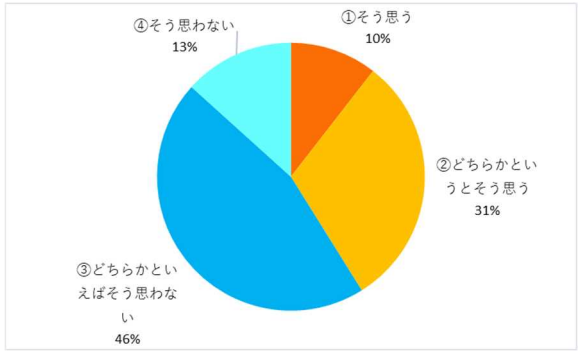
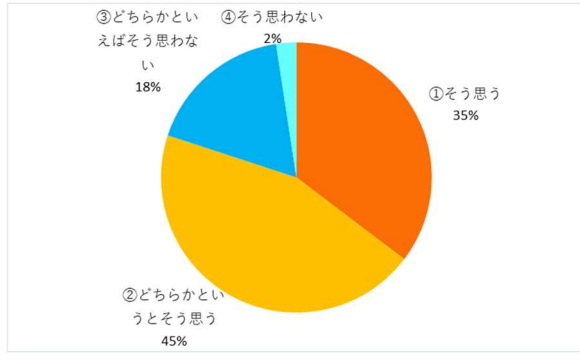
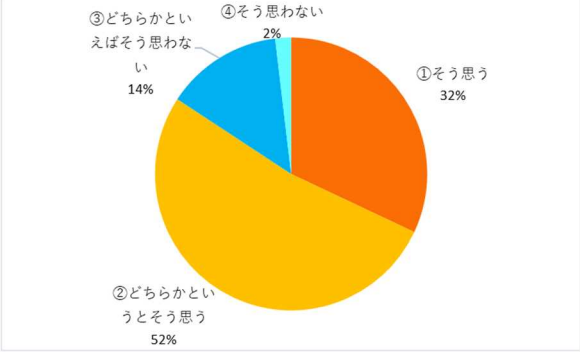
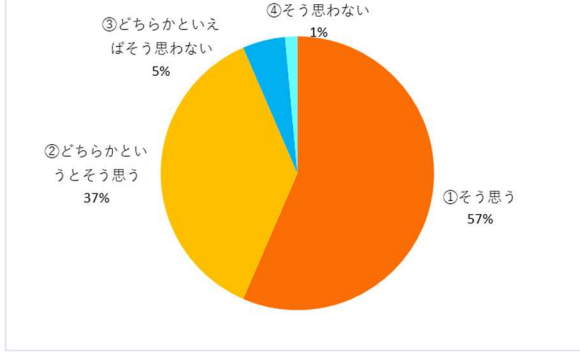
○地域住民の感想

- ・普段から気をつけておかないといけないと思いました。
- ・生徒さんが親切で説明もわかりやすかった。
- ・来年以降もぜひ一緒に訓練をしていきたい。

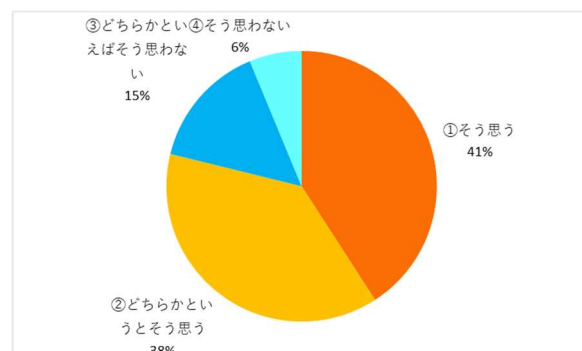
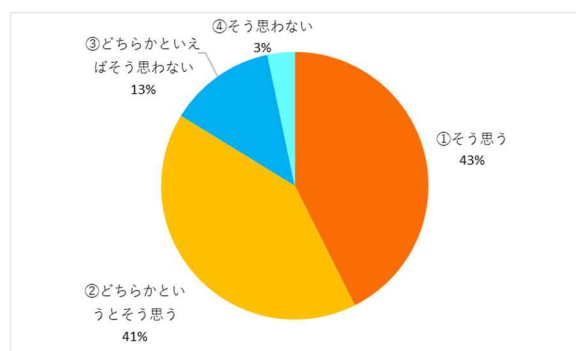
○アンケート結果

実施日：令和3年12月10日（金）

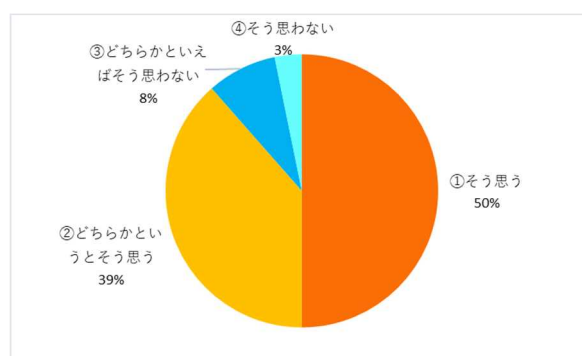
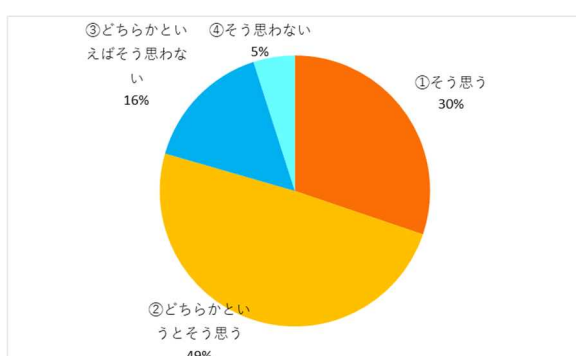
対 象：全学年家政科生徒以外 426名

訓練実施前	訓練実施後																				
Q 1. 私たちは日頃から災害を意識して生活した方がよい。																					
 <table border="1"> <caption>Q1 訓練実施前</caption> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①そう思う</td> <td>60%</td> </tr> <tr> <td>②どちらかというと思う</td> <td>33%</td> </tr> <tr> <td>③どちらかといえばそう思わない</td> <td>5%</td> </tr> <tr> <td>④そう思わない</td> <td>2%</td> </tr> </tbody> </table>	回答	割合	①そう思う	60%	②どちらかというと思う	33%	③どちらかといえばそう思わない	5%	④そう思わない	2%	 <table border="1"> <caption>Q1 訓練実施後</caption> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①そう思う</td> <td>80%</td> </tr> <tr> <td>②どちらかというと思う</td> <td>18%</td> </tr> <tr> <td>③どちらかといえばそう思わない</td> <td>1%</td> </tr> <tr> <td>④そう思わない</td> <td>1%</td> </tr> </tbody> </table>	回答	割合	①そう思う	80%	②どちらかというと思う	18%	③どちらかといえばそう思わない	1%	④そう思わない	1%
回答	割合																				
①そう思う	60%																				
②どちらかというと思う	33%																				
③どちらかといえばそう思わない	5%																				
④そう思わない	2%																				
回答	割合																				
①そう思う	80%																				
②どちらかというと思う	18%																				
③どちらかといえばそう思わない	1%																				
④そう思わない	1%																				
Q 2. 私は災害や防災、減災について様々な知識を持っている。																					
 <table border="1"> <caption>Q2 訓練実施前</caption> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①そう思う</td> <td>10%</td> </tr> <tr> <td>②どちらかというと思う</td> <td>31%</td> </tr> <tr> <td>③どちらかといえばそう思わない</td> <td>46%</td> </tr> <tr> <td>④そう思わない</td> <td>13%</td> </tr> </tbody> </table>	回答	割合	①そう思う	10%	②どちらかというと思う	31%	③どちらかといえばそう思わない	46%	④そう思わない	13%	 <table border="1"> <caption>Q2 訓練実施後</caption> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①そう思う</td> <td>35%</td> </tr> <tr> <td>②どちらかというと思う</td> <td>45%</td> </tr> <tr> <td>③どちらかといえばそう思わない</td> <td>18%</td> </tr> <tr> <td>④そう思わない</td> <td>2%</td> </tr> </tbody> </table>	回答	割合	①そう思う	35%	②どちらかというと思う	45%	③どちらかといえばそう思わない	18%	④そう思わない	2%
回答	割合																				
①そう思う	10%																				
②どちらかというと思う	31%																				
③どちらかといえばそう思わない	46%																				
④そう思わない	13%																				
回答	割合																				
①そう思う	35%																				
②どちらかというと思う	45%																				
③どちらかといえばそう思わない	18%																				
④そう思わない	2%																				
Q 3. 災害や防災、減災について積極的に知りたいと思う。																					
 <table border="1"> <caption>Q3 訓練実施前</caption> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①そう思う</td> <td>32%</td> </tr> <tr> <td>②どちらかというと思う</td> <td>52%</td> </tr> <tr> <td>③どちらかといえばそう思わない</td> <td>14%</td> </tr> <tr> <td>④そう思わない</td> <td>2%</td> </tr> </tbody> </table>	回答	割合	①そう思う	32%	②どちらかというと思う	52%	③どちらかといえばそう思わない	14%	④そう思わない	2%	 <table border="1"> <caption>Q3 訓練実施後</caption> <thead> <tr> <th>回答</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①そう思う</td> <td>57%</td> </tr> <tr> <td>②どちらかというと思う</td> <td>37%</td> </tr> <tr> <td>③どちらかといえばそう思わない</td> <td>5%</td> </tr> <tr> <td>④そう思わない</td> <td>1%</td> </tr> </tbody> </table>	回答	割合	①そう思う	57%	②どちらかというと思う	37%	③どちらかといえばそう思わない	5%	④そう思わない	1%
回答	割合																				
①そう思う	32%																				
②どちらかというと思う	52%																				
③どちらかといえばそう思わない	14%																				
④そう思わない	2%																				
回答	割合																				
①そう思う	57%																				
②どちらかというと思う	37%																				
③どちらかといえばそう思わない	5%																				
④そう思わない	1%																				

Q 4. 実際に災害が起こった時どう行動すればいいか不安がある。



Q 5. 災害が起こった時、佐用高校生として地域にできることがしたい。



・アンケート考察

「日頃から災害を意識して生活したほうがよい」という質問には、防災訓練後、98%の人が「そう思う」と回答し、学校全体の防災への意識が高まった。

「災害について様々な知識を持っている」という質問には、事前ではそう思っている人が41%と少なかったが、事後では80%と2倍に増えており、この防災訓練を通して知識が身についた。

「災害が起こった時、地域にできることがしたい」という質問では、事前と比べて「そう思う」、「どちらかとそう思う」と回答した人が79%から89%に増え、中でも積極的に「そう思う」と回答した人が30%から50%に増えたことで、地域に根差した体験の大切さを改めて実感した。

4 成果

(1) 災害食・保存食について知識習得

- ・缶詰体験など校外学習ならではの本格的な機械を用いた専門的な知識を身に付けることができ、生徒の深い学びにつながると共に、活動の視野が広がった。
- ・習得した知識・技術を商品開発や佐用合同防災訓練などの地域での実践活動に生かし、地域貢献活動に還元することができた。
- ・知識・技術の習得だけでなく、地域住民の方や、多世代の方との触れ合いによって生徒のふるさと意識やコミュニケーション能力が向上した。

(2)減災w e e k

- ・アンケート結果では、「災害が起こった時どう行動すればいいか不安がある」以外の項目で、そう思う、どちらかというと思うと回答する人が増加し、生徒の意識に変化が見られた。
- ・他教科に授業の実施を依頼することで、生徒だけでなく、学校全体の防災意識が向上した。

(3)多世代向け防災学習

- ・生徒自身が内容を企画することで、身に付けさせたい資質・能力であった「情報発信力」、「課題発見・解決力」、「企画力」、「プレゼンテーション能力」、「コミュニケーション能力」が大きく向上した。
- ・学校外での活動や多世代との交流が生徒の刺激となり、良いものをつくり上げたいという向上心や、成功させるために練習を何度も行うなど責任感の向上が見られた。
- ・準備してきたことを楽しんでもらいたいというボランティア精神の向上も見られた。
- ・コロナ禍で地域交流の中止や制限がある中、協力先にはイベントが実施できることを大変喜んでいただくことができた。

(4)佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～

- ・計画を進めていくうちに徐々にイメージが明確になっていき、積極的に発言をしたり、アイデアを出したりする生徒が増えた。企画から実施までの過程で主体性が芽生え、主体的な取組を行うことができた。
- ・外部の方々に来校いただいた合同会議では、それぞれの協働先からの協力を得ることで活発な意見交換ができ、生徒の発想を引き出すことができた。また、あえて教員主導の会議にせず外部講師に任せることで、生徒はコミュニケーション能力や企画運営力を大幅に向上させることができた。
- ・地域と協働で企画することで、地域社会とのつながりの重要性を生徒自身が実感することができた。
- ・地域と合同で防災訓練を行うことで、地域全体の防災意識が向上した。
- ・取組の発表を行い、周囲から評価していただくことで、自信につながった。

5 課題

(1)災害食・保存食について知識習得

- ・災害食を通じた食育活動が学科内のみで留まっている。
- ・単発の研修、講習会で終わらずに、年間を通じた指導計画を立てる。

(2)減災w e e k

- ・全教科の実施ができなかった。別期間であれば実施できたという教科もあったので、実施期間を2回に増やすなど、見直しを行う。
- ・防災訓練の事前アンケート結果が、減災w e e kの事前アンケート結果に戻っており、意識の定着が見られなかった。日ごろから防災に関するあらゆる視点からの学習で意識の定着を図る必要がある。

(3) 多世代向け防災学習

- ・防災教室は実施できたが、食育活動は実施できなかった。コロナ禍による食事での大きな制限を受ける中での食育の在り方について考える必要がある。

(4) 佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～

- ・地域住民の方には当日参加していただくだけではなく、企画の段階から意見をいただき、地域が求める「災害に強い町づくり」に取り組む。
- ・1学年と3学年は、それぞれ佐用消防署と兵庫県立大学に任せる形になってしまった。何らかの形で家政科の生徒が関わることで、訓練全体を生徒が掌握できるように企画する。

6 次年度に向けて

「地域と学ぶ佐用高校」をスローガンに掲げ、学校、地域全体の防災意識の定着を図るため、これまでの活動を継続し、テーマである「災害に強い町づくり」に取り組む。また課題をふまえた新たな取組として以下の点を考える。

・災害を通じた食育活動

災害のマニュアルブックを参考にし、農業科学科、普通科でのパッククッキングによる災害食の調理実習を実施する。また、地域の福祉施設と協働で地元食材を用いたクッキング講習会を企画し、幅広い視野で食育活動に取り組む。

・保存食、非常食開発

商品開発の事業と横断的な取組として、保存食や非常食の開発をし、各イベントや防災訓練で販売活動を行い、佐用町の防災意識を高める。

・減災対策の仕掛けづくり

これまでに培ってきた災害についての知識や技術をもとに、新たな「防災マニュアルブック」や地域の「ハザードマップ」を作成し、全校生徒や地域住民に配布する。

はじめに

佐用町は、2009年8月9日に水害が起こり、大きな被害を受けました。

私たち佐用高校家政科では、2年生課題研究の福祉班が中心となって、水害を教訓に「災害に強いまちづくり」を目標に地域でできることを考えて活動しています。

このマニュアルブックは、災害時に「どこを」通って避難するのか、「何を」持って避難するのか、「何を」備蓄しておくのかを多くの人に知ってもらいたいという思いから作成しました。

これを読んで減災に興味を持っていただき、普段の生活の中で参考にいただけると嬉しいです。

- 災害に備えて・・・
- ① 町の「備え」を高める
 - ② 町の「減災」を目指す
 - ③ 町の「ちから」を蓄える

1

目次

- ③ 佐用町の気づきマップ
- ④ 佐用駅から学校周辺の危険な場所
- ⑦ 備蓄用品一覧
- ⑧ ローリングストック法とは
- ⑨ パッククッキング レシピ集



2

駅から学校周辺の気づきマップ



2

危険な場所を知ろう！



①山本牛乳店前の交差点

信号がなく、車と人が接触する恐れがある。



②佐用川の横の道路

道が狭く、車と人が接触する恐れがある。

4

ローリングストック法とは

「日常的に食べて買い足す」を繰り返して災害時の食に備える方法



5

パッククッキング レシピ集



ポリ袋に材料を入れて湯煎で火を通す調理法です。
災害時に、ライフラインが使えなくなってもガスコンロ・鍋・水・ポリ袋があればできます。

- ・たくさんの種類がある
- ・誰でも簡単に作れる
- ・いつでも温かくおいしく食べれる
- ・栄養が取れる

9

炊き込みご飯



野菜やひじきで災害時に不足しがちなミネラルが取れます。
味付けは焼鳥缶のみなので簡単です！

材料(1人分)

米…50g 水…60g
ひじき(乾燥)…2g にんじん…10g
焼鳥の缶詰…1缶

作り方

- ①ポリ袋に米と水を入れる。
- ②にんじんを千切りにする。
- ③①にひじき、にんじん、焼鳥の缶詰をよく混ぜ、袋を結ぶ。
- ④沸騰したら、袋を入れる。やや火を弱めて沸騰を保ち、20分で火を止め、そのまま10分蒸らす。

11

肉じゃが



野菜を取ることでビタミン、ミネラル、食物繊維などの栄養素が取れ、便秘・口内炎になりにくくなります。

材料(1人分)

じゃがいも…40g にんじん…15g
玉ねぎ…40g
焼鳥の缶詰…1/2缶
すき焼きのたれ…大1

作り方

- ①玉ねぎは薄切り、じゃがいもは1口大、にんじんは小さめの乱切りにする。
- ②ポリ袋に材料を入れ、空気を抜いて袋の口を結び、すき焼きのたれがなじむように軽くもむ。
- ③沸騰したら、袋を入れる。やや火を弱めて沸騰を保ち、20分で火を止め、そのまま10分蒸らす。

12

【広報活動】

1 目的

活動内容の情報発信や、活動発表などの広報活動を行うことで、幅広い方々に事業の認知をしていただく。また、校外の広報活動では、生徒が広報先の反応や宣伝の効果を直接確認することができ、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上を図るとともに、活動のモチベーションにもつながる。そして、研究した成果を生徒がまとめて発表することで、活動の振り返りによる深い学びと、より主体的な学びにつなげることを目的とした。

実施内容

(1) 外部講師による指導

① 専門的知識・技術の習得

日 時 令和3年4月～12月（計8回）
場 所 本校パソコン教室
対 象 課題研究（情報）（家政科 第2学年 情報コース選択者6名）
講 師 一般社団法人 地域再生研究所 代表理事 尾鼻 弘光 氏
内 容

○実施概要

生徒のタブレット・パソコンの操作技術やプレゼンテーション能力の向上を目的とし、外部講師による講習会を合計8回実施した。検定やコンテストに挑戦することで技術が向上し、今年度は文書デザインコンテストで審査員特別賞を受賞することができた。（別添）

また、知識・技術だけではなく、地域協働の活動を情報発信することの大切さを教えていただき、生徒の広報活動への意欲が増進した。

来年度の幅広い地域交流に向けて、Zoomを用いたオンラインでの交流会の練習も実施し、ネット環境における交流の注意点を考察した。



授業風景①



授業風景②



オンライン交流練習

(2) 取材

① サンテレビひょうご発信

日 時 令和3年 5月28日（金）
場 所 本校第一食物室
参加生徒 家庭クラブ役員（家政科 第3学年 4名）

内 容

○実施概要

本校が商品開発し、昨年度西播磨フードセレクションにて金賞を受賞した「夢茜トマトジャム」の取材を受けた。(右図)

取材当日は夢茜トマトジャムを使った「夢茜ジャムマフィン」も試食していただいた。取材内容は「サンテレビひょうご発信」でテレビ放送された。



(3) 広報即売会

① 姫音祭

日 時 令和3年10月28日(日)

場 所 イーグレ姫路

参加生徒 課題研究(食物)(家政科 第2学年 食物コース選択者12名)

内 容 (商品開発参照)

(4) 高校生カフェ2021 in 平福

日 時 令和3年11月13日(土)

場 所 お休み処 瓜生原

参加生徒 課題研究(食物)(家政科 第3学年 食物コース選択者15名)

内 容 (商品開発参照)

(5) 販売活動

実施計画

行事名	日時	場所
マックスバリュ佐用店 マルシェ	令和3年11月6日(土)	マックスバリュ佐用店
上月収穫祭	令和3年11月14日(日)	ふれあいの里上月
三日月収穫祭	令和3年11月21日(日)	味わいの里三日月
龍北工房定期販売	通年	龍北工房
ふれあいの里上月定期販売	通年	ふれあいの里上月

参加生徒 家政科全生徒(1年25名、2年36名、3年34名)

内 容

○実施概要

家庭クラブ活動の一環として、本校で開発した特産品を使った焼き菓子の販売活動を行った。特産品のPR活動を目的とし、生徒が当番制で焼き菓子製作とラッピングを行い、各イベントに参加して販売している。地域の方に「頑張って」「おいしかった」などと声をかけていただき、生徒の自信につながっている。



当番実習



販売の様子①



販売の様子②

(6) 令和3年度第45回兵庫県高等学校総合文化祭文化部合同発表会

日 時 令和3年11月20日(土)

場 所 神戸ハーバーランドスペースシアター

参加生徒 課題研究(被服)(家政科 第3学年 被服コース選択者11名)
家政科2年生4名

内 容

○実施概要

兵庫県高等学校総合文化祭に参加し、地域協働や家政科の活動に加えて、佐用町の伝統産業である皆田和紙のPR活動をメインとして作品の展示、販売、舞台での発表を行った。本校の活動を広く知っていただくとともに、兵庫県下の各地域の生徒と交流を図ることを目的とした。また、互いに刺激し合い、意見交換を行うことで、生徒のより主体的で深い学びにつながる活動を推進し、生徒自身の新たな課題を見つける機会とした。内容は以下の通りである。

展示	地域協働や家政科の活動をまとめたパネルを展示した。また、皆田和紙を用いた衣装やおもちゃコンクールに出品した作品展示も行った。
販売	皆田和紙を用いたアロマワックスバー、コースター、キーホルダーを販売した。
舞台	兵庫県立西脇高等学校と合同ファッションショーを行い、ドレスや皆田和紙を使った衣装を発表した。



学びの展示



作品販売



ファッションショー

(7) 発表会

① 令和3年度「ひょうご安全の日西播磨地域のつどい」

日 時 令和4年2月14日(水)

場 所 本校会議室
 参加生徒 課題研究（福祉）（家政科 第2学年 福祉コース選択者5名）
 内 容

○実施概要

過去の災害の経験と教訓を継承し、将来の災害への備えの充実と、西播磨地域における防災意識の高揚を図るために「ひょうご安全の日西播磨地域のつどい」が開催され、本校は高校生防災サミットに参加する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため中止となってしまった。代替として、発表動画をweb配信することになり、動画の撮影会日を設け、「佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～」の企画・運営について発表を行った。（右図）



②地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）

令和3年度 研究成果発表会
 日 時 令和4年2月5日（日）
 場 所 さよう文化情報センター
 参加生徒 家政科生徒（第1学年25名、第2学年36名、第3学年2名）
 内 容

○実施概要

生徒が研究した成果を3本柱ごとにパワーポイントにまとめて発表した。発表はYouTubeでも配信し、令和3年度の実践や事業内容の幅広い情報発信を行った。発表によって活動の振り返りやまとめを行い、より主体的な学びを目指すとともに、各委員の方々から専門的な視点で助言をいただくことを目的とした。以下は当日の流れと内容である。

時間	内容
9:00～ 9:10	受付
9:10～ 9:30	開会行事
9:30～10:45	代表者による研究成果発表会 ・佐用町について、学校紹介 ・「商品開発」 ・「健康寿命の延伸」 ・「災害に強い町づくり」 ・3年目に向けて 質疑応答 講評 ・兵庫教育大学 永田 智子 先生 ・島根大学 作野 広和 先生
10:45～10:50	閉会行事



研究発表



質疑応答

【講評】

○兵庫教育大学 永田 智子 先生

- ・家庭科は、生活をより良くしようとする実践的な態度を育てることが目標。
- ・自分の家庭生活だけでなく、地域の生活をより良くしようとする実践的な取組をされて、態度が育っていることに感激。
- ・3本柱の「特産品を活用する」「佐用で暮らす人々の健康を守る」「佐用を水害から守る」の中で、たくさんの取組があり、1つ1つが素晴らしい。
- ・大学生が行っても、なかなかできない実践をしていた。自分達には地域をより良くしようとする態度・実践力があると大いに自信を持って欲しい。
- ・発表も理路整然としていた。何を目的にして、どんなプロセスでやったのか、どんな成果があったか、アンケートもしたと発表にあって、力も十分についていると思った。
- ・昨年度の発表で、実践したことに囚われずに評価に基づいて改善して欲しいと伝えた。今年は言ったことができていた。やったことに囚われずに、振り返りなどの評価を行っていて良かった。
- ・充分に取り組めていないことや、成果があったか分からないことにも課題意識を持って次年度に取り組もうとしていて良い。
- ・商品開発や訪問、イベントをやり遂げたなど、自己満足で終わることが多いが、そこから次に至っていて素晴らしい。
- ・それぞれの活動や3本柱は、課題解決のための行動目標の要素。
- ・最後から2枚目のスライドに、3年目に向けて地域に還元していきたいとあった。最終目標は、1番難しいが地域貢献や活性化。どうしたら地域は活性化したと言えるかを最初に考えないと評価はできない。地域が活性化している姿のイメージに向けて、計画を再度練り直して欲しい。
- ・高校生の皆さんはすでに考えていることを来年度1年かけて取組めば上手くいく。

○島根大学 作野 広和 先生

- ・様々な学校に行っているが佐用が1番、取組・生徒の学び・発表が素晴らしい。

成果

- ・プレゼンテーションについて、伝えることを意識して練習できていた。パワーポイントも文字が大きく、写真も分かりやすい。情報化の時代で大切なことなので、それだけでも十分な学びができている。
- ・昨年度の学びを活かして、今年度の学習は深化・パワーアップしている。
- ・生徒の主体性が垣間見え、非常に楽しそうに学習し、充実している。他の学校では、やらされている印象を受ける学校も少なくない。
- ・地域課題を具体的に解決している
- ・地域の大人が参画している。高校生が関わって大人を巻き込むことで、地域の人達が積極的に、本気になっている。

今後の課題

- ・3つの分野とも活性化が必要だと言っていたが「活性化」とは何か。活性化することが所与の

命題なのか、考えて欲しい。課題解決をすることが目的。

- ・例えば5年後・10年後の佐用町があるべき姿を考えて、その姿に向けて自分たちが何をすべきか。健康寿命の延伸の発表の最後で「高齢者の方の笑顔があつて良かったが、地域全体の活性化に繋がらなかった」とまとめているのは、素晴らしい。しかし私は高齢者の笑顔があれば十分だと思う。高齢者の笑顔が佐用町全域に繋がって、皆さんがいなくても高齢者が笑顔になるようにするにはどうすればよいのかを考えていただきたい。
- ・評価軸に皆さんが実践したことで佐用町がどのように変化したかを入れるべき。
高校としてどう進化するかを高校生の皆さんも考えて欲しい。文部省の事業は3年間でやっているが、次の3年～4年はどうするか、学んでいる皆さんがデザインするといい。
- ・今の3年が「実践」だとしたら、次は「参画」で、地域そのものに入っていく。防災や高齢者対策だけではなく、あらゆる所に入ることを繰り返していくと佐用高校生が地域の役割を担って、佐用高校がなくてはならない存在になる。
- ・いい例だと思ったのは合同防災訓練。防災訓練は佐用高校がやると意識付けされると、地域から佐用高校はなくてはならないものになる。
- ・来年度の展望で「提言をする」と言っていたが、提言という言葉は無責任な感じなので、地域があるべき姿に持っていく「仕掛けづくり」をしようと言った方がよい。
- ・生徒がやるのではなくて、大人が主役になり表舞台に立って、生徒が縁の下の力持ちで支えるとともに良い。

【生徒の感想】

- ・今日の発表会で前に立って発表するのはとても緊張しました。それでもしっかりと練習してきた成果を発揮できて良かったです。島根大学の先生にも佐用高校が一番すばらしい活動をしていると言ってもらい、とても嬉しかったです。地域の活性化とは何か、どんなことをしたら活性化になるのかを改めて考えていきたいと思いました。
- ・今までなんとなくやってきたことが大切なことだったと気づきました。約1年間、商品開発に参加して活動して大変なことも多くてしんどかったけど、やりきって良かったし達成感を感じることができました。

③令和3年度 75回生 課題研究発表会

日 時 令和4年2月14日（月）

場 所 本校保育大教室

参加生徒 家政科生徒（第1学年25名、第2学年36名）

内 容

○実施概要

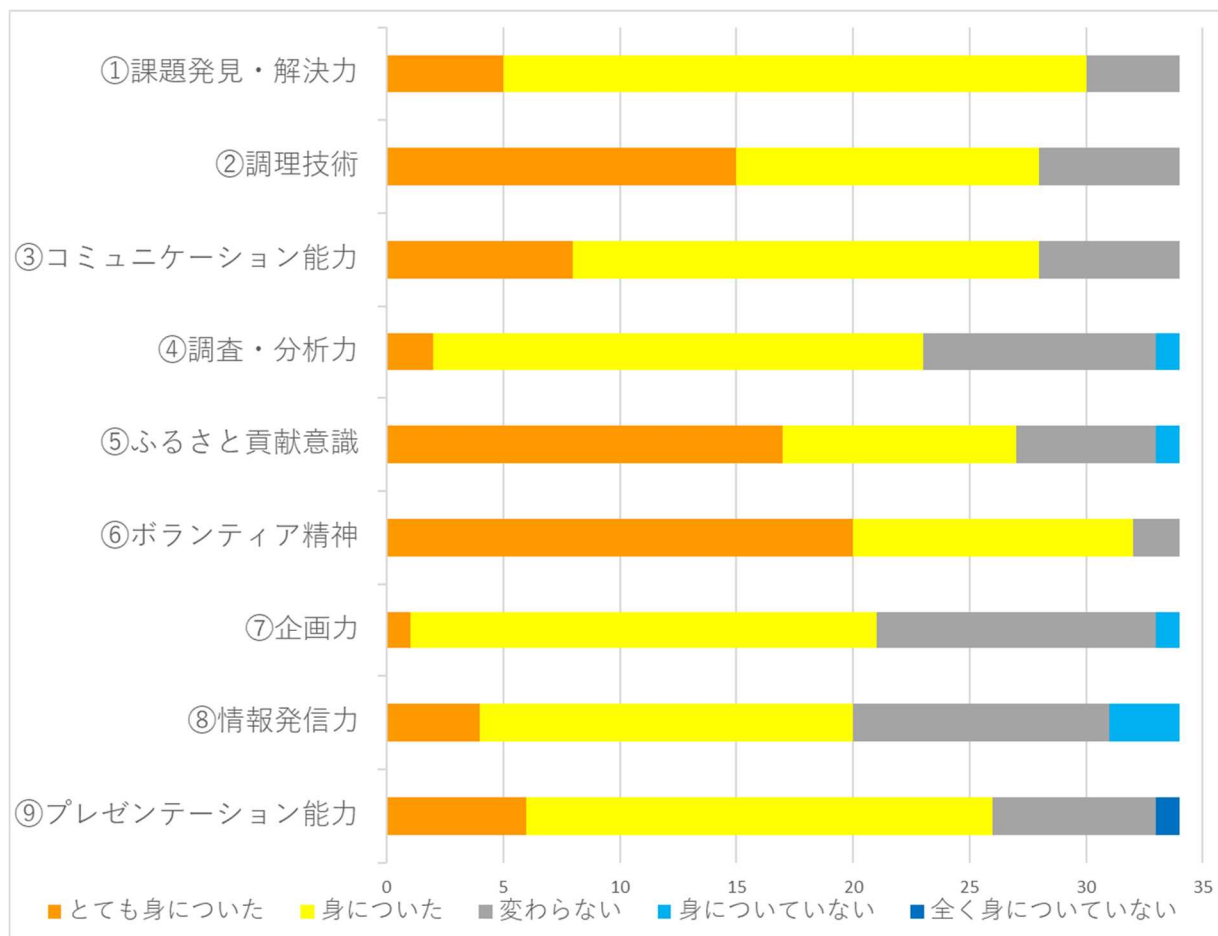
75回生（2年生）の課題研究発表会を校内で実施した。発表を行うことで自分たちの活動の振り返りを行う機会とした。

今年度は、協働活動にご協力いただいた方々を来賓に迎え、評価と講評を行っていただいた。また、活動の継承を目的とし、1年生は別室でZoom配信を視聴し、来年度の活動への意識付けを行った。

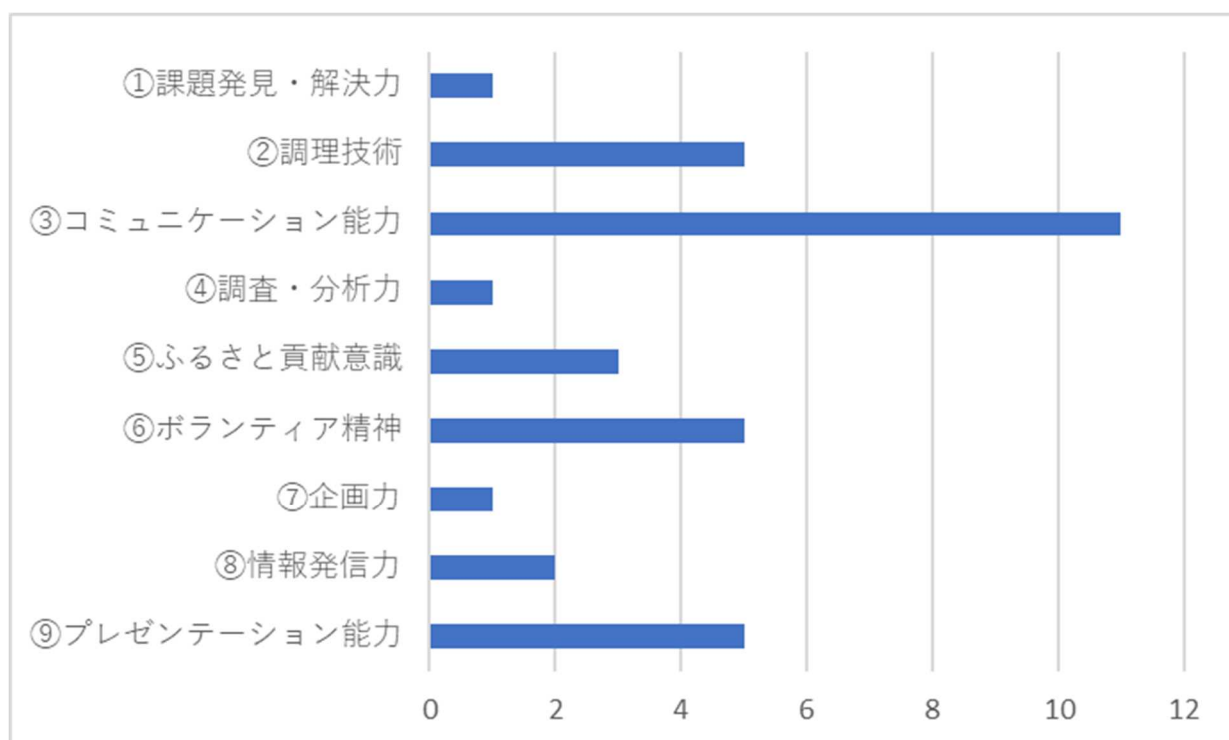
ウ 実施効果とその評価

地域との協働事業全体を通して、年度末に生徒に自己評価アンケートを行った。

【自分に身についた・向上したと思う力】



【最も身についた・向上したと思う力】



【最も身についたと思う理由】

① 自分で課題を見つけて解決方法を考える力（課題発見・解決力）

- ・活動を進める中で成功させるためには課題があり、それを自分らしく解決していくことができた。

② 調理実習や焼き菓子製作など調理の技術（調理技術）

- ・今まで作れなかったものが作れるようになり、新しいレシピも学んだから。
- ・授業で調理について学び、講習会でさらに専門的に教えてもらえたから。
- ・レシピを見ても作り方がわからなかったが、何度も作ることで一人でも作ることができるようになったから。調理実習も手際よく時短でできるようになった。

③ グループワークや外部講師、地域の方々との交流がスムーズにできる（コミュニケーション能力）

- ・今までの自分は決まっている話を聞きそれに答えるだけだったが、話を広げられるようになった。
- ・今までは人の意見に流されたり自分の意見は言わなかったりしていたけど、しっかりと言うことができるようになった。
- ・子どもから高齢者まで多くの人と話す機会があったから。また、グループワークでみんなの意見に耳を傾けることができた。
- ・自分にはコミュニケーション力が全くないと思っていたが、活動を通して身につけていると思った。
- ・商品開発には大切な能力で、相手に上手に伝えられないと先に進まないと学んだから。

④ 地域の現状や取り組んでいることに関して調査を行い、課題などを見つけ出す力（調査・分析力）

- ・訪問サービスの中で住民の意見を聞き、問題点や自分たちに何ができるかを考えられたから。

⑤ 自分が地域にできることで地域と交流や貢献がしたいと思う気持ち（ふるさと貢献意識）

- ・訪問サービスや給食サービスで地域の方が元気になってくださり、さらに直接の交流を増やしたいと思ったから。
- ・地域の高齢者とたくさん交流して、ありがたい言葉や笑顔をもらいうれしかった。高齢者を大切にしたいし、貢献したいと思う。

⑥ 困っている人や地域の課題解決のために役に立ちたいと思う（ボランティア精神）

- ・給食サービスや訪問サービスで自分ができることをして誰かの役に立つことのやりがいを感じ、自分でも役に立ちたいと思うようになったから。
- ・以前から地域に役には立ちたいと思っていたけど、この活動でさらに地域交流を深めたいと思ったし、もっと地域を巻き込んだ活動をしてみたいと思うから。
- ・地域の方と交流する中で普段関わらない人たちに会えて、話す楽しさを感じボランティアにも興味がわいてきたから。

⑦ 地域と協働で活動する時に自分で計画を立てられる力（企画力）

- ・合同防災訓練を一から考えることができたから。

⑧ 自分が行った活動を地域の内外に知ってもらうように発信ができる力（情報発信力）

- ・課題研究の情報班として家政科に活動を知ってもらうために資料を作ったり、外部講師の先生に詳しく教えていただいたりしたから。

⑨ 自分が行った活動を周囲に知ってもらうために説明できる力（プレゼンテーション能力）

- ・開発商品を販売する際にトマトや佐用高校の良さを丁寧で簡潔に伝えることができた。また、発表資料のスライドや説明を分かりやすくできたと思う。
- ・マイクを使って人前やカメラの前で発表する機会が多く、練習や回数を重ねていくうちに楽しくなって苦手意識がなくなった。

(2) 生徒が主体的な学びをするための指導方法の工夫

ア 仮説

本研究は「食」を中心に①特産物による商品開発②健康寿命の延伸③安全・安心なまちづくりの三本柱をたて、それぞれについて、生徒が課題を発見し、PDCAサイクルを展開していくことにより、課題を解決できる資質・能力を身につけることを目標としている。このような課題発見・解決能力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能をベースに主体的な態度で取り組み、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力が必要になってくる。とりわけ、生徒がどれだけ課題に対して「わがこと」として主体的に取り組めるかが大きな鍵を握っている。そこで本研究では、生徒が行うPDCAサイクルに対して、教員が次のような指導法を行うことにより、生徒が課題解決に向けて、積極的に取り組み、主体的な態度を育成できると仮説をたてた。

生徒の活動	P（計画）	→	D（実行）	→	C（評価）	→	A（改善）
教員の指導	「待つ」		「見守る」		「褒める」		「期待する」

① P（計画）・・・「待つ」

それぞれの取り組みについては、生徒達を中心に地域の方と一緒に、計画・実行・運営についての事前会議を何度も開催していく。その計画立案段階から、生徒達が主体的に取り組めるように、できるだけ教員からの指導助言は控え、自由な発想で取組を計画させていく雰囲気をつくる。教員はややもすると、すでに自分の中に計画や到達点を決めてしまい、そのレールに生徒達を乗せ、上手に取り組ませようとする。そのため助言をしてしまい、生徒達を従わせようとしてしまう。そのことが生徒達の主体性を失い、やらされた感を抱かせることになっていく。生徒達は、自分たちが中心となって考え出したことに対しては、積極的に、責任を持って取り組む傾向がみられ、その中で主体性が育まれていく。そこで、教員には、生徒の自発的な考えを「待つ」姿勢が必要である。しかし、会議の中で、話し合いが進展していかない場合もある。そのため、事前に会議に参加していただく地域の方に、取組の趣旨や目標を十分説明、理解していただき、地域の方々から方向性のヒントやアドバイスを会議の中で出していただくよう打ち合わせをする等の仕掛けを考える。

② D（実行）・・・「見守る」

実際に現場に出て生徒が取組を実践していく場において、教員は原則、危険なことが予想されない限りは、生徒達の取組にその場では指導助言はしない。教員は側について、「見守る」姿勢を通す。失敗をするかもしれないがそれは失敗として経験をさせる。活動に対して生徒達に責任感を持たせ、生徒自身が「自分がやらねば誰がやる」という主体性を持たせる。

③ C（評価）・・・「褒める」

取組ごとに自己評価し、うまくいった点、うまくいかなかった点など整理し、結果を正しく把握させる。特に、うまくいかなかった点についてはその原因の分析を、生徒達に十分に話し合わせる。そして、生徒達の取組結果や姿勢に対して、良いところを探し、必ず「褒める」。褒められたことにより自己肯定感を抱き、自信となり、主体性の育成につながる。

④ A（改善）・・・「期待する」

評価をもとに次回に向けての改善点を話し合わせる。改善策に行き詰まった時は、改善策を考えるための方向性を与え、あくまでも自分たちで考えさせる。次回は生徒達がよりよい活動をしてくれることを信じて「期待する」。その期待感が生徒に伝わり、一層の主体性を引き出すことにつながる。

イ 活動実績

生徒の主体的な取組と外部講師等の活用

令和3年度 2年生「課題研究（食物）」指導過程

時期	内容	生徒の主体的な取組	教員の指導（動き）
4月			関係機関との打ち合わせ
5月	商品開発講義 講師：今年度参加外部講師 第1回商品開発会議 第2回商品開発会議	商品開発に関する基礎知識の習得 開発に向けての話し合いとワークショップ 開発商品の探究活動 レシピ考案 試作調理（1回目）	商品開発会議年間計画作成 外部講師との打ち合わせ 外部講師との打ち合わせ
6月	第3回商品開発会議	試作調理（2回目） レシピの改善	試作品試食会準備 外部講師との打ち合わせ
7月			課題と2学期以降の計画
8月		パッケージの考案 ※夏季休業課題	
9月	第4回商品開発会議	試作調理（3回目） 試作調理（4回目） レシピの再改善	試作品試食会準備 外部講師との打ち合わせ
10月	第5回商品開発会議 第6回商品開発会議	試作調理（5回目） レシピの完成 ラベル決定 イベントに向けての準備 チラシやポップの作成	「姫音祭」実行委員会会議参加 外部講師との打ち合わせ
11月	第7回商品開発会議 「姫音祭」にて開発商品広報即売会 場所：イーグレ姫路 対象：イベント参加者	イベントに向けての準備 販売商品にラベルを貼る イベント参加で広報活動	外部講師との打ち合わせ イベント生徒引率
12月	第8回商品開発会議	一年間の振り返り	外部講師との打ち合わせ
1月		課題研究発表会に向けての準備	glaminka SAYO との打ち合わせ
2月	課題研究発表会	研究内容の発表 商品開発の振り返り	
3月	「高校生レストラン 2021」 場所：glaminka SAYO 対象：施設利用者	開発商品（トマトソース）を使ってピザ作り体験提供	イベント生徒引率

令和3年度 2年生「ヒューマンサービス」指導過程

時期	内容	生徒の主体的な取組	教員の指導（動き）
4月			給食サービス打ち合わせ 各方面へ講義依頼
5月	第1回給食サービス準備 ループブック評価作成	お弁当献立とお品書きの作成 ループブック評価表を考える	社会福祉協議会との連携 生徒と一緒にループブック表を作成
6月	第1回給食サービス 「佐用町の現状」講義 講師：佐用町高年介護課職員	お弁当調理（69食） アンケートはがき作成 佐用町の取組について知識習得	
7月	第2回給食サービス準備	お弁当献立とお品書きの作成	
8月			社会福祉協議会への協力 依頼（訪問サービス）
9月	第1回訪問サービス準備 第2回給食サービス 第3回給食サービス準備 第1回高校生訪問サービス	アンケート、プレゼント作成 お弁当調理（64食） アンケートはがき作成 お弁当献立とお品書きの作成 高齢者世帯訪問、生活実態調査と交流	高齢者世帯への承諾確認 高齢者世帯生徒引率
10月	第2回訪問サービス準備 第3回給食サービス 第4回給食サービス準備	振り返りと引継ぎ、レクリエーション検討・準備 お弁当調理（62食） アンケートはがき作成 お弁当献立とお品書きの作成	
11月	第4回給食サービス 第2回高校生訪問サービス	お弁当調理（65食） アンケートはがき作成 高齢者世帯訪問、 レクリエーション交流	高齢者世帯生徒引率
12月	第3回訪問サービス準備	振り返りと引継ぎ、フレイル体操考案、カレンダー作成	
1月	第3回高校生訪問サービス	高齢者世帯訪問、 フレイル改善体操提供、活動アンケート調査	高齢者世帯生徒引率 給食サービス：次年度の日程調整
2月	お礼状書き まとめ	高齢者に向けてお礼の手紙作成 一年間の振り返りとアンケート	振り返りアンケート作成
3月		次年度に向けての計画	

令和3年度 2年生「課題研究（福祉）」指導過程

時期	内容	生徒の主体的な取組	教員の指導（動き）
4月			各方面へ講師依頼
5月	合同防災訓練企画開始 「佐用町の災害について」 講師：ドローン協会 久保様	防災訓練実施内容の計画 災害・防災について知識習得	
6月	「減災ワークショップ」 講師：働き方応援隊 小西様	減災について知識習得 ワークショップ模擬授業	佐用町、関係機関との打ち合わせ
7月		防災訓練実施内容の詳細計画	関係各所との実施内容確認
8月			
9月			
10月	第1回訓練合同会議 「防災講義とワークショップ」 講師：兵庫県立大学 木村玲欧教授 兵庫県立大学学生 第2回訓練合同会議	防災訓練内容案提示 関係機関との意見交換 防災についての知識習得 大学生とのワークショップ 防災訓練細案の意見交換	佐用消防署協力依頼 兵庫県立大学、佐用町との内容確認 佐用小学校との打ち合わせ
11月	防災訓練準備 「防災出前授業と備蓄食ワークショップ」 対象：佐用小学校1年生	パッククッキング試作調理、災害食講義スライド作成、「災害マニュアルブック」作成、ドローン放送原稿作成、各体験リハーサル 小学生に向けての防災講義とキャンディーレイ作成指導	佐用町関係機関との細案打ち合わせ イベント生徒引率
12月	「佐用合同防災訓練～KIZUNA大作戦～」実施	各部署でリーダーになり訓練の運営指揮 ・本校2年生対象：災害食講義とパッククッキング指導 ・佐用小学校1年生対象：段ボールベッド体験 ・近隣住民対象：災害時小物制作ワークショップ	防災訓練リーダー生徒のバックアップ
1月	「西播磨地区のつどい」参加 ※コロナにより動画撮影に変更	研究内容の発表 課題研究発表会に向けての準備	動画撮影準備
2月	課題研究発表会	研究内容の発表 合同防災訓練振り返り	関係機関への発表会参加依頼
3月		次年度に向けての引継ぎ資料作成	

ウ 実施効果とその評価

(1) 高校生訪問サービス 生徒の事前事後アンケート

事前アンケートでは低評価な部分でも、事後アンケートでは高評価に転じている生徒が多く、訪問サービスに対する生徒の自己肯定感の向上効果が見られる。

【事業実施前後に行った生徒アンケートにおける多くの回答例】

【高校生訪問サービス 事前アンケート】	
	自信がある 普通 不安である
・計画は十分にできている	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・訪問先でのコミュニケーション	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・積極的に対応し、臨機応変に行動できるか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

【高校生訪問サービス 事後アンケート】	
【本時の評価】	できた 普通 できなかった
・計画していたことができたか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・積極的に、自分からコミュニケーションがとれたか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・臨機応変な対応ができたか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・「傾聴」の姿勢で、交流できたか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・今回の目標は、達成できたか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

【高校生訪問サービス 事前アンケート】	
	自信がある 普通 不安である
・計画は十分にできている	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・訪問先でのコミュニケーション	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・積極的に対応し、臨機応変に行動できるか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

【高校生訪問サービス 事後アンケート】	
【本時の評価】	できた 普通 できなかった
・計画していたことができたか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・積極的に、自分からコミュニケーションがとれたか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・臨機応変な対応ができたか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・「傾聴」の姿勢で、交流できたか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
・今回の目標は、達成できたか	5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

(2) 高校生訪問サービスを終えた生徒の感想

実施前の事前指導中や準備中は、初対面や初めての経験に対する不安があり実施後もうまくいかなかったことに対する反省がある。しかし、実施を振り返ると肯定的な感情が多く次回には前向きな発想へとつながっていることがわかる。

【青線（事前の不安等） 赤線（事後の肯定感等）】

1回目の訪問では、高齢者の方と初対面になるので、とても緊張しました。名前と年齢しか知らなかったので、訪問した時に耳が少し遠いことを初めて知り、声があまり届かず、上手くコミュニケーションをとることが出来ませんでした。でも、言葉が伝わって質問に答えて下さっている時、とても楽しそうに話して貰えたので私も嬉しかったです。2回目と3回目の訪問では、1回目のアンケートを元に訪問の計画を立てました。前回、声が伝わりずらか、たので2回目からは筆談にし、足の悪い方た、たので座っていても出来る、ひとつの言葉から話を連想していく連想ゲームを行いました。私は2回目の訪問には行っていないが、3回目の訪問の際に楽しかったと言って下さっていたので、とても嬉しかったです。実施前は不安でしたが、高齢者の方が給食サービスボランティアの時のおしながきや、私たちが今まで筆談に使った紙など全部保管してくれていたり、訪問を楽しみにして貰えていた事などを知って、私もとても嬉しく、お互いに元気になることが出来て良かったです。この活動を通して学んだことを活かすことが出来るように、これからも色々な活動をしていきたいです。

(3) 給食サービスボランティア 返信ハガキ

手書きの部分をつけることで、利用者の方に温かみを届ける工夫をしている。回を重ねるごとにメッセージ欄へのコメントが増えた。

こんにちは。佐用高校家政科です。
よろしければアンケートに答えて
いただき、お弁当の感想などを
教えてください。ご協力をお願いします。

1. 味付けはどうでしたか？

【濃い・ちょうどよい・薄い】

2. 量は多かったですか？

【多い・ちょうどよい・少ない】

3. 今回のお弁当で一番おいしかったものを
教えてください。

【魚のホイル焼き】

4. メッセージがあればお願いします。

今日は誰の弁当か？毎回
楽しみにしています。勉強が
あつのに、おいしい弁当ありがとう。
いっか グラタンをお願いします。

アンケートはポストへ投函してください。

こんにちは。佐用高校家政科です。
よろしければアンケートに答えていただき、
お弁当の感想などを教えてください。
ご協力をお願いします。

1. 味付けはどうでしたか？

【濃い・ちょうどよい・薄い】

2. 今回のお弁当で一番おいしかった
おかずを教えてください。

【ポテトサラダ、豚肉もよかった】

3. 今後入れて欲しい料理や
メッセージがあればお願いします。

高校家政科には、取り組んでくれて
地域に根づいてとていいと思います。
メニューでは、肉じゃがや、生姜焼きが好物
です。魚も思うけど、豚肉が一番おいしい
全体としても美味しく食べてもらいたい。

アンケートはポストへ投函してください。

副食を多くしてほしいけど無理かな？

こんにちは。佐用高校家政科で
す。よろしければアンケートに答えて
いただき、お弁当の感想などを
教えてください。
ご協力をお願いします。

1. 味付けはどうでしたか？

【濃い・ちょうどよい・薄い】

2. 今回のお弁当で一番おいしかった
おかずを教えてください。

【お魚と、切り干し大根の煮物です】

3. 今後入れて欲しい料理や
メッセージがあればお願いします。

何時も楽しみにしています。
お魚は、お刺身も好きです。なりのとろろ
好きになりまして、本当に
何時もありがとうございます。
大変ご苦労様。がんばって下さり、本当に
ありがとうございます。

アンケートはポストへ投函してください。

11/16 お弁当

こんにちは。佐用高校家政科です。
よろしければアンケートに答えていただき、
お弁当の感想などを教えてください。
ご協力をお願いします。

1. 味付けはどうでしたか？

【濃い・ちょうどよい・薄い】

2. 今回のお弁当で一番おいしかった
おかずを教えてください。

【パプリカのきんぴら。白身魚】

3. 今後入れて欲しい料理や
メッセージがあればお願いします。

農産物が佐用高校に多かった
年の卒業生です。佐用高校が
色々と頑張っていて、とても感謝
おおいかった。プロに取れない味です。

アンケートはポストへ投函してください。

11/16 お弁当

(4) 給食サービスボランティア 生徒の感想

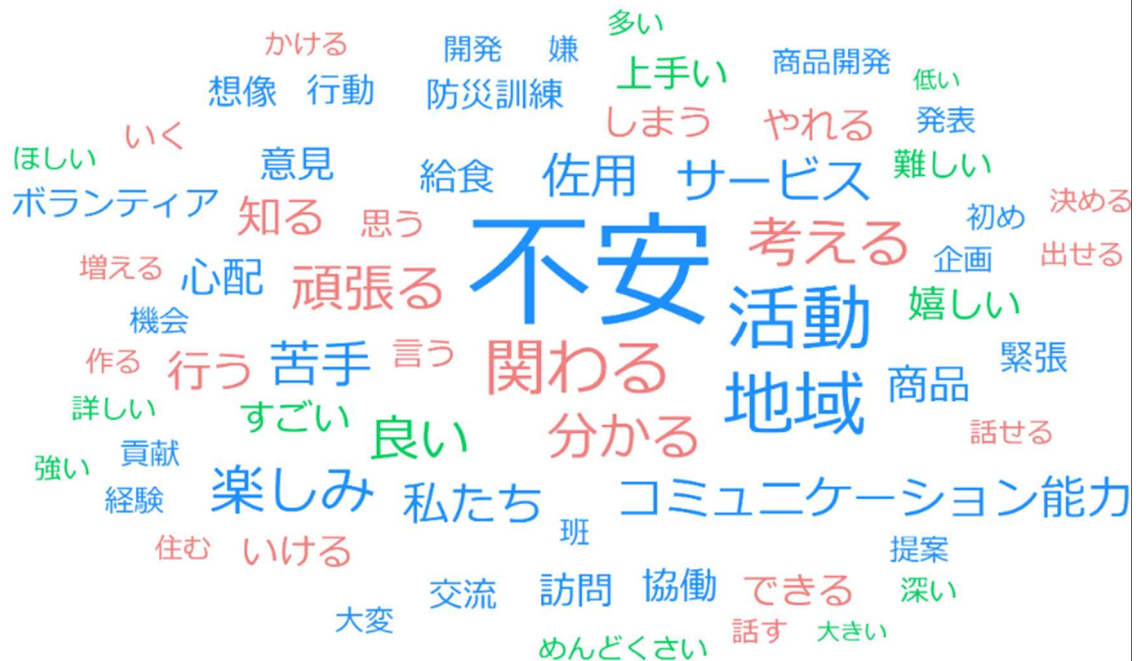
実施前の不安や献立作成の難しさなどを感じながらも、事業には前向きに取り組もうという姿勢が伺える。返信はがきにより次へのモチベーションを高める効果も見られる。

【青線（事前の不安等） 赤線（事後の肯定感等）】

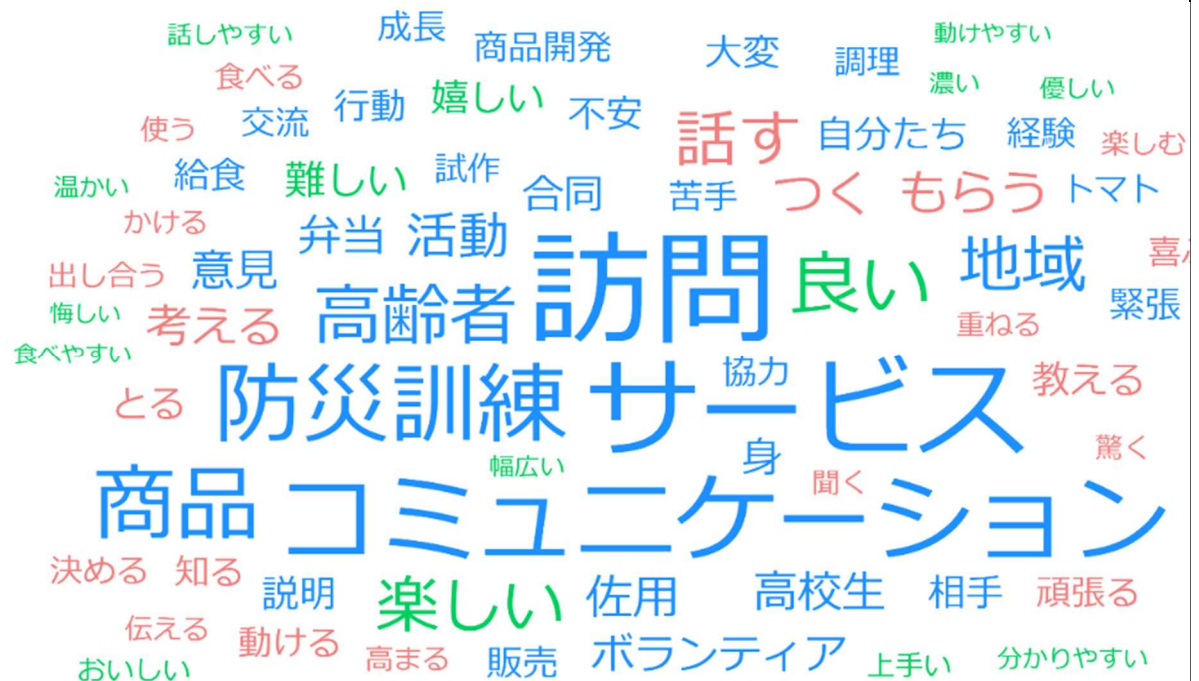
給食サービスボランティアでは、献立から自分達で決め、和食にするのか、洋食にするのかなど全体を等一させる所から始まり、全体の味を想象して、味のかたよりがいいのかや、高齢者の方が食べやすい様なお弁当にするには、どんな味、固さにすれば良いかなど、始めに考えていたよしも、も、とず、と考えるければならなく、とても難しかったです。ですが、お弁当のメニューのイラストや一言を書いていくうちに、どんどん、本番、お弁当の大量調理が楽しみななっていました。当日は、とにかく、時間内に終わらせられるか分からないくらいギリギリで、とにかく焦って必死でした。ですが終わって、自分達が作ったお弁当が運ばれていくのを見ると、このお弁当を食べて、少しでも佐用町の方々に喜んでもらえるとうれいなと思いました。その後のはがきでのアンケートの返事を読んでみると、〇〇がおいしかったといった物の中に、自分が担当した物があって、とてもうれしかったのを覚えています。また、自分が担当した物以外でも、ほめられている文章を見ると、とてもうれしかったです。また、自分達以外のグループが大量調理を行っている裏で、アンケートのはがきづくりをしましたが、全て手書きで書き、イラストも季節に合ったイラストを書きました。書いている時も、自分の時かたにたくさん返事がくれば良いなと思いながら書きました。全部を通して、とてもたくさんの返事が届いていて、本当に達成感を実感する事ができました。友達とも、毎回返事のはがきがクラスにはり出されるたびに見て、うれしいなあ、って話をたくさん話しました。始めは、難しくてしんどいなと思っていましたが、事が進んでいくと同時に、楽しさを覚え、思い返すと、とても良い体験ができて良かったです。

今年度の活動に対する生徒の感想を「AI テキストマイニング」によりデータ分析したところ、事前の心境から、事後の心境に大きな変化が見られ、多くの生徒が肯定的な意見や次年度への意気込みを示す言語を多数記述していることがわかる。

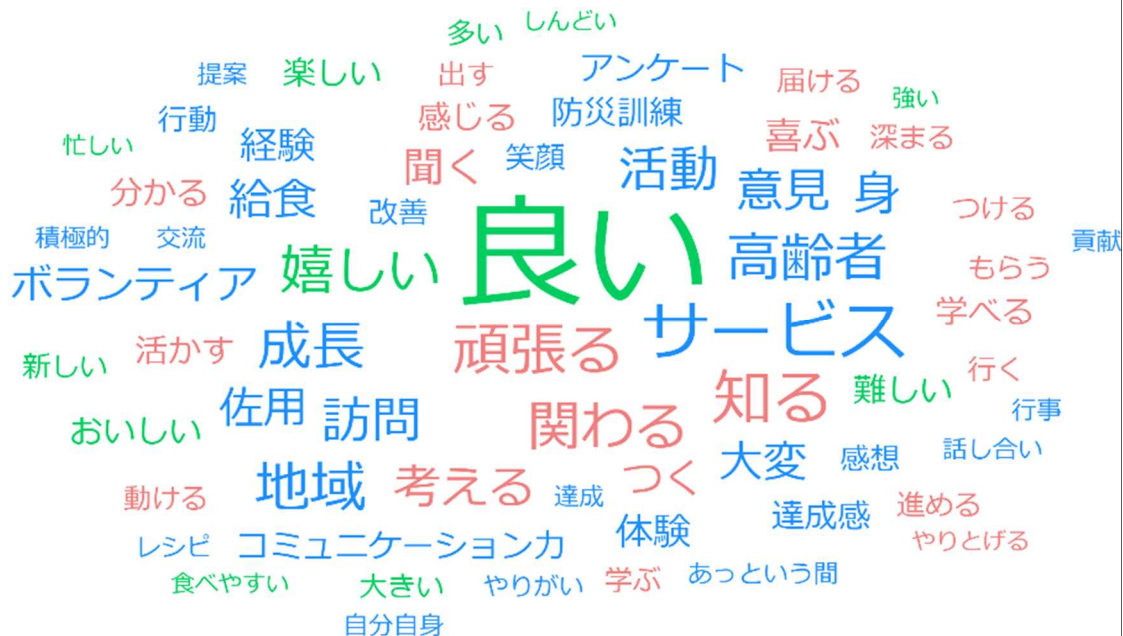
【質問1】 年度のはじめ、様々な地域協働活動を始めるときの心境はどうでしたか。



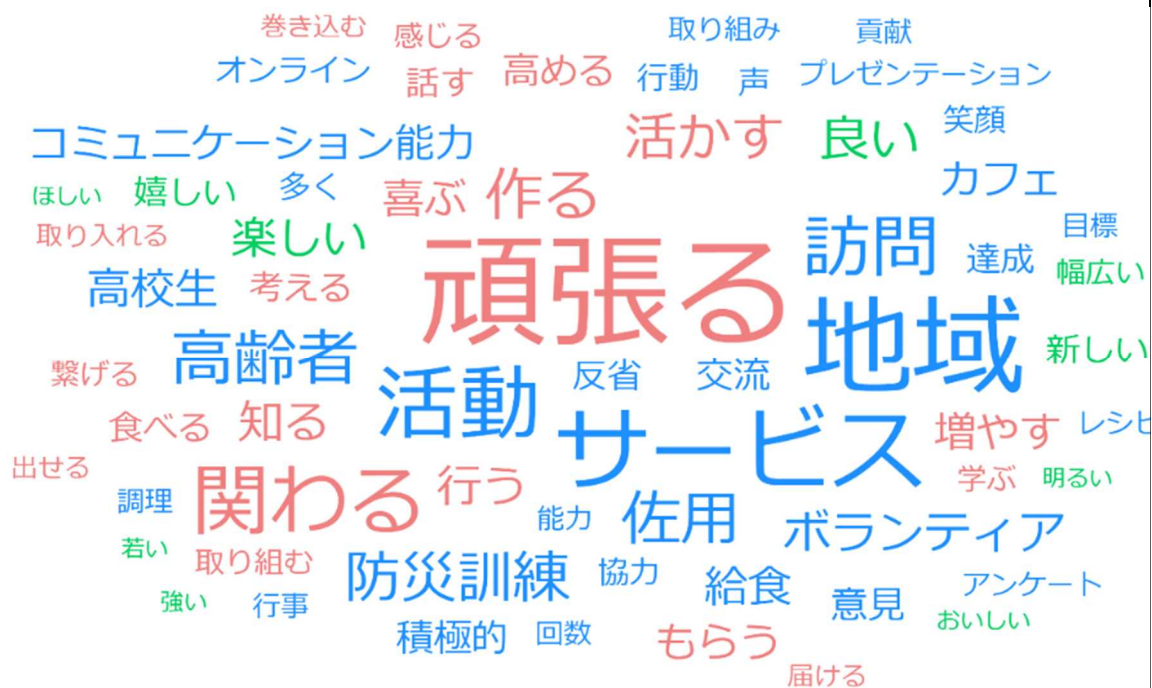
【質問2】自分が携わった地域協働活動の中で一番印象に残っている活動と、その理由を書き出してみよう。また、活動したことでの自分の変化を書き出してみよう。



【質問3】 年度のおわり、一年間地域協働活動を行ってきて、今どのような心境ですか。



【質問4】 来年度に、やってみたいことや頑張ってみたいこととその理由、今の意気込み（心境）を書き出してみよう。



出典：User Local、AI テキストマイニング、<https://textmining.userlocal.jp/> (2022.3.10)

(6) 外部講師からの評価

2年生「課題研究（食物）」においては、一年間通して外部講師との商品開発会議を行った。ここで協働していただいた外部講師に生徒にどのような力が身に付いたと感じたかのアンケートを実施した。

【アンケート内容】

一年間の活動を終えて、生徒に身についた・向上したと思う力を評価してください。

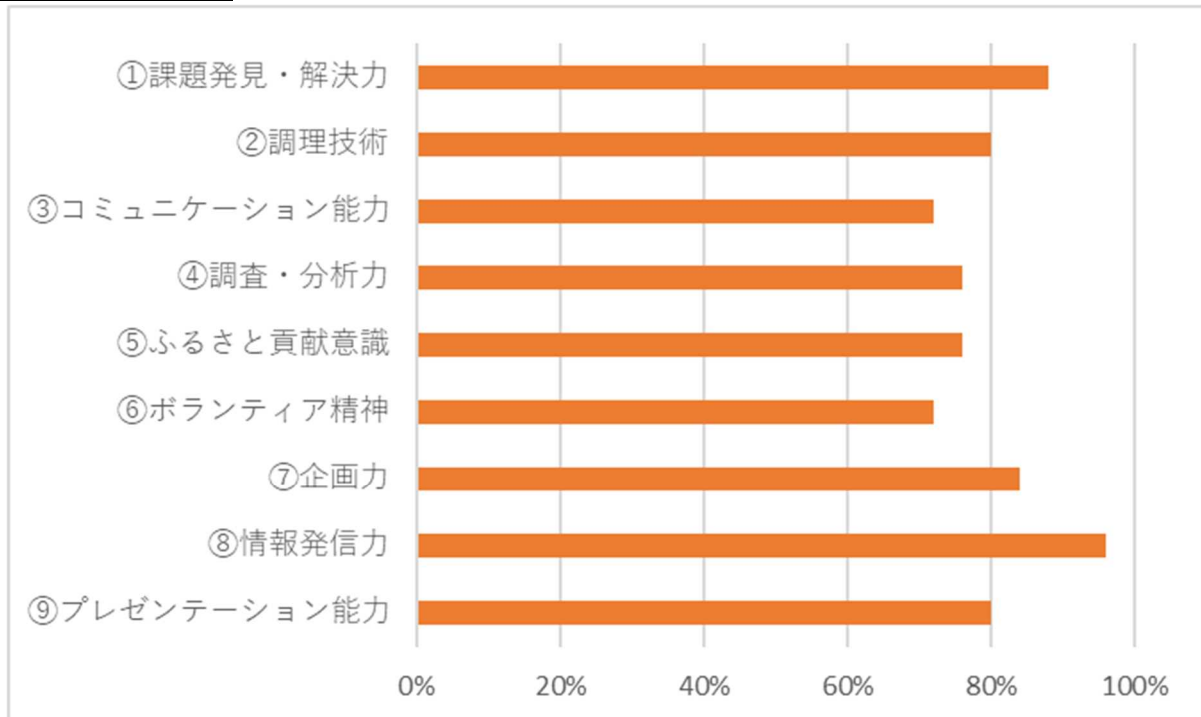
1 全く身につけていない 2 身につけていない 3 変わらない 4 身についた 5 とても身についた

- ① 自分で課題を見つけて解決方法を考える力（課題発見・解決力）
- ② 調理実習や焼き菓子製作など調理の技術（調理技術）
- ③ グループワークや外部講師、地域の方々との交流がスムーズにできる（コミュニケーション能力）
- ④ 地域の現状や取り組んでいることに関して調査を行い、課題などを見つけ出す力（調査・分析力）
- ⑤ 自分が地域にできることで地域と交流や貢献がしたいと思う気持ち（ふるさと貢献意識）
- ⑥ 困っている人や地域の課題解決のために役に立ちたいと思う（ボランティア精神）
- ⑦ 地域と協働で活動する時に自分で計画を立てられる力（企画力）
- ⑧ 自分が行った活動を地域の内外に知ってもらうように発信ができる力（情報発信力）
- ⑨ 自分が行った活動を周囲に知ってもらうために説明できる力（プレゼンテーション能力）

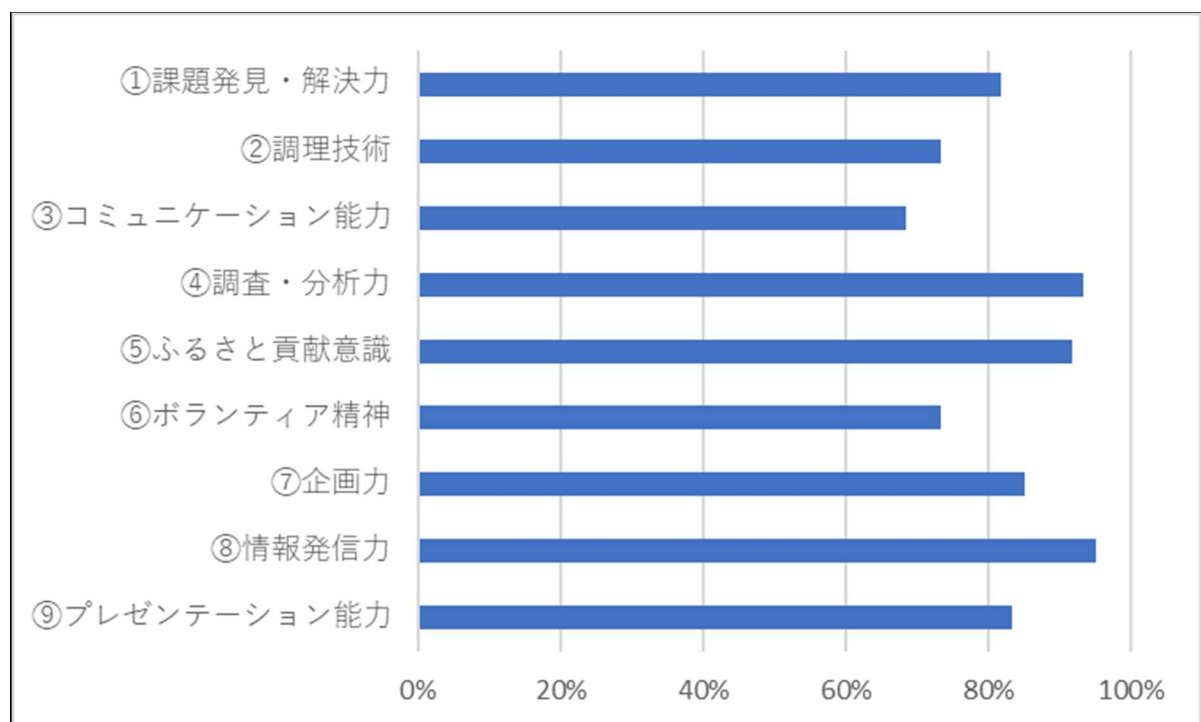
1 一年間生徒と協働をしていただいたの感想や生徒へのメッセージ
2 来年度に向けての提案や、こうしたらよいのでは、などの改善点

【身についた力に関する生徒の自己評価と外部講師による評価の比較】

外部講師による評価



生徒の自己評価 (参考)



検証と考察

- ・課題発見、解決力に高い評価を得たのは生徒の主体的な活動を重視してきた効果が出ている。
- ・生徒の自己評価より外部講師による評価の方が全体的な向上度評価が高いのは、外部講師の生徒に対する期待値があり、年度当初からの成長を評価していただいた。
- ・調査分析力とふるさと意識の項目では外部講師の評価の方が低いのは社会人からの目線だと、生徒の調査分析成果では不十分である。

【外部講師からのコメント】

地域協働支援員

- 1 佐用高校の皆さんには、この度の地域協働事業の取り組み以外にも、色々と佐用町や地域住民とのかかわりを持っていただいていることにお礼申し上げます。
地域協働活動においては、家政科生徒の皆さんの佐用町の特産品について理解をしようとする姿、それを活かした料理、商品開発に取り組む姿が真面目で真剣であることに感激しました。
姫音祭での接客体験、防災訓練での企画力、福祉のアンケート調査における高齢者とのコミュニケーション力等々、通常の授業では得られない社会経験ができたと思います。この自分らしさを出すという経験を生かして受験、就職活動において頑張ってください。
佐用町は、佐用高校の皆さんの頑張りをバックアップするとともに、生徒の皆さんと一緒に何かに取り組みたいと考えています。今後ともよろしくお願いします。
- 2 商品開発的な活動を実施した場合、購入者からのアンケートを入れて、その商品をリピーターとなって再度購入するかも調査してほしいと思いました。
コンソーシアム委員会での永田教授が言われていた他の学校の参考書となるよう、先生の活動、指導を活動のまとめに入れることは大切なことだと思いました。どんどんハードルが上がっているように感じますが、来年度もよろしくお願いします。

地域協働アドバイザー

- 1 生徒の皆さんは熱心に取り組む続け、良い商品を開発したと思います。
- 2 商品として店頭に並ぶための仕組みを学び、開発商品の販売価格を決める取組もあったら良いのではと思います。

佐用町 農林振興課職員

- 1 生徒に特産物を紹介するにあたり、改めて町の農業について調べるいい機会になりました。今までこういった経験はなかったので、色々学びがある貴重な体験でした。
- 2 夢茜だけでなく、夢茜に加え町の特産物を使用したものを開発していただければと思います。

特産品生産業者

- 1 商品開発の難しさ、楽しさを体験してもらえたと思います。将来に役立ててもらえれば幸いです。
- 2 授業の内容（講義、実習など）を更に充実させ、スケジュールに落とし込みできればと思います。

佐用町 栄養士

- 1 コロナ禍の影響で、皆さんの高校生活の大半が、多くの方々と自由にコミュニケーションを取ることが難しい時期だったと思います。そのような中でも、地域の人を巻き込んで活動できたことや、商品開発の過程で学んだことは、実社会に出てから十分生かせる経験になったと思います。
一つの事を仕上げていくのは大変なことです。これはどんな事にも通じます。皆さんと一緒に取組めた一年間は、私にとってもとても良い勉強になりました。ありがとうございました。
- 2 本年度の学びを生かせるような事を、計画して継続出来れば良いと思います。

(7)カリキュラム開発専門家からの評価（研究発表会講評、コンソーシアム委員会抜粋）

兵庫教育大学 永田 智子 教授

- ・家庭科は生活をより良くしようとする実践的な態度を育てることが目標であるが、自分の家庭生活だけでなく、地域の生活をより良くしようとする実践的な取組をされて、態度が育っていることに感激。
- ・自分達には地域をより良くしようとする態度・実践力があると大いに自信を持って欲しい。発表も理路整然としていて、何を目的にして、どんなプロセスでやったのか、どんな成果があったか、アンケートもしたと発表にあって、力も十分についていると思った。
- ・今年はやったことにだけではなく振り返りなどの評価を行っていて良かった。充分に取り組めていないことや、成果があったか分からないことにも課題意識を持って次年度に取り組もうとしていて良い。
- ・商品開発や訪問、イベントをやり遂げたなど、自己満足で終わることが多いが、そこから次に至っていて素晴らしい。
- ・生徒自身がルーブリック評価を作成していて、それによって主体的な学びになると思われる。カリキュラムを開発するにあたっては何をするのか、どんな活動をするのかというのが大事だが、高等学校の教育なので「資質能力」は、学習内容や活動によってどんな力をつけるのかが大事。
- ・資質能力を評価するためには、付けたい力を計るための資料を残すこと、分析することが大切。生徒たちの書いたアンケートやレポートが重要な根拠資料になる。何か活動する度に、学びの記録を残しておくことが大切。ポートフォリオを紙ではなくデジタルで蓄積しておくが良い。
- ・生徒の感想は面白い。感想がストーリー的でプロセスを含めて書かれている「ナラティブ」という手法で、やってきたこととその時感じたことを物語風に振り返っている。

島根大学 作野 広和 先生

- ・様々な学校に行っているが佐用が1番、取組・生徒の学び・発表が素晴らしい。プレゼンテーションについて、伝えることを意識して練習できていた。パワーポイントも文字が大きく、写真も分かりやすい。情報化の時代で大切なことなので、それだけでも十分な学びができている。
- ・昨年度の学びを活かして、今年度の学習は深化・パワーアップしている。生徒の主体性が見え、非常に楽しそうに学習し、充実している。他の学校ではやらされている印象を受ける学校も少なくない。
- ・地域課題を具体的に解決している地域の大人が参画している。高校生が関わって大人を巻き込むことで、地域の人達が積極的に、本気になっている。
- ・健康寿命の延伸の発表の最後で「高齢者の方の笑顔があつて良かったが、地域全体の活性化に繋がらなかった」とまとめているのは、素晴らしい。
- ・評価した点は多様な学校科目を設定したことと、普通科との連携の道筋をつけたこと、本来の組織体制（地域協働部や地域協働推進委員会）を設けたことは、学校をあげて取り組まれていることなので大変素晴らしいことだと思う。
- ・今後更に期待する点は評価。規準の書き方や逆算することは大事。どういう人材を育てるか、そのためにはどうあつてほしいかが規準になる。ルーブリックなどの評価の見える化により、指導と評価の一体化の今後研究が進めば、評価という観点が重要な論点になる。
- ・佐用高校は初年度からしっかりと資料を作っているところが高く評価できる。良い点はスパイラルな向上を意識されていること。指導要領にも書いてあるように、生徒が学年を上がるにつれてスパイラルに向上をする。それだけではなく、学校としても年度が経つにつれて成長している。
- ・生徒の声と地域の声を聞いていると、学校と地域が近づいていることは大きな成果。

(3) 指導に生かす評価の工夫～「指導と評価の一体化」に向けた取組～

ア 仮説

それぞれの事業の目標に合わせて作成した評価基準(ルーブリック)や客観的評価の仕組みを開発することで、到達目標を意識した成長を促すと共に、実践的で汎用性のある評価基準を確立する。

イ 活動実績

カリキュラム開発の専門家である大学教授等に指導を受け、それぞれの事業での効果的な評価基準を策定する。また、学校設定科目「ヒューマンサービス」に関する評価基準を作成し、その評価を次の指導に生かす PDCA サイクルを確立する。

ウ 実施効果とその評価

- (1) 探究活動を評価するルーブリック
- (2) 発表を評価するルーブリック
- (3) 技術の習得を図る can-do リストを作成
- (4) 評価法も含めた授業の進め方や、教科におけるアクティブラーニングについて教員研修を実施
- (5) カリキュラム開発専門家からアドバイスを受ける。
- (6) 生徒がポートフォリオ評価を行い、生徒の能力向上を自覚できるようにする。

令和4年度に「指導と評価の一体化」を目指して(1)～(6)の研究を実施予定である。

4 委員会等実施報告

(1) コンソーシアム委員会実施報告書

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第1回コンソーシアム委員会

1 日 時 令和3年5月21日(水) 14:00～15:30

2 場 所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

3 出席者

(1) コンソーシアム委員

庵途典章氏(佐用町長)

井上洋文氏(佐用町自治会連合会長)

西川典男氏(佐用町教育委員会教育課 教育推進室長)

田和久典氏(IDEC株式会社グリーンソリューション事業部長)

松田圭介氏(ナニワフード株式会社)

水野博氏(日本調理製菓専門学校 校長)

小山和也氏(美作市スポーツ医療看護専門学校 事務局事務部長)

久保正彦氏(一般社団法人 ドローン減災士協会 代表理事)

武田由哉氏(兵庫県立山崎高等学校 校長)

神田貴司氏(兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事)

永田智子氏(兵庫教育大学 教授)※リモート参加

作野広和氏(島根大学 教育学部教授)※リモート参加

(2) 佐用町 地域協働学習支援員 服部憲靖氏(佐用町企画防災課)

(3) 佐用高等学校 西坂美樹(校長)、上田貴哉(教頭)、岩崎由香子(教諭)、 小寺由夏(教諭)、岡祐依(教諭)、多々良里奈(教諭)、高橋智美(臨時講師)、 中田真佑(臨時実習助手)

4 次 第

(1) 資料確認・コンソーシアム委員会設置要綱説明・委嘱状交付

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長挨拶(佐用高校 西坂校長)

- ・本校はこれまでも専門学科として、地域との協働を行ってきたので、本事業の趣旨に向いていると判断。
- ・佐用町の課題を庵途町長にお聞きし、佐用町・作野先生・高校教育課と何度も会議を行ってきた結果、本事業のテーマ設定に行き着いた。
- ・家政科はこれまでに既存科目での協働はあったが、今後新しいカリキュラムで展開。

②-2 委員代表挨拶(佐用町 庵途町長)

- ・佐用町唯一の高校であり、地域の伝統校として地域を支えていく人材の育成に取り組んでいる。

- ・佐用町が現在取り組んでいる次世代農業での学びを、教育活動の中で実践中。
- ・本事業には高い評価と大きな期待をしている。
- ・教育活動の中で、地域の特産物を自分たちで育てて学んでいく。生徒自ら食生活を正し、健康な身体で伝授していく。地域で生産された物を消費し、生活そのものから健康づくりを。

(3) 出席者紹介

(4) 司会選出

(5) 議事

- ① 令和2年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」研究開発事業報告について
- ② 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」研究開発事業計画について
- ③ 意見交換

水野氏 (みかしほ)

- ・震災現場ではお弁当が山積みに残ってしまう現状もあることから、食べる側はただ食べるだけでなく、温かいもの、出来立てのもの、心のこもったものがよいのではないかな。
- ・ガスや水道が復旧した状態で作れるパッククッキングや、炊飯クッキングというご飯で栄養を保てるようなもの。
- ・ご飯を牛乳で炊くミルクライスにシーチキン缶やミックスベジタブルなどの生野菜を切ったりせずに、見た目も綺麗で栄養もある程度補えるもの。
- ・学生カフェでは料理と皿盛りのデザートの組み合わせの評価が良い。(生野菜と煮野菜、白ご飯でなく混ぜご飯、汁物はスープ系)

小山氏 (美作スポ)

- ・昨年度は1回(福祉中心)しかできなかったというのが大きな課題。
- ・健康寿命の延伸は心と体の両面が健康でなければならない。
- ・今年度は健康寿命の延伸中心で3回の授業を行いたい。
- ・テーマに沿って健康寿命の延伸させるためには様々な視点(介護・看護・福祉)から見て行いたい。

久保氏 (ドローン)

- ・家政科だけでなく、普通科もふるさと意識が上がれば良い。一緒に全校生徒で取り組んでもらいたい。
- ・ループリック評価はとても良い。
- ・防災は地域の高校生の取組が大きい。東日本大震災の際は日頃取組が大事だと感じた。合同防災訓練にドローンの活用をしていただきたい。

武田氏 (山崎高校)

- ・山崎には「山崎断層」があり、山崎は直下型地震の危険にさらされており集中豪雨の災害に遭いやすい大きな谷もある。本校も地元の自治会の皆さんと協力して防災・減災に取り組んでいる。

- ・毎年テーマを決めて11月に地域と防災訓練をしている。防災食についてや非常時にどんな物資があればいいのか、小さい子供たちを災害から救うためにはどうしたらいいのか、ハンドブックのようなものにまとめて自治会に配布したい。安全安心な町づくりをする際に連携をさせていただきたい。

神田氏（県教委）

- ・令和4年度の入学生から新学習要領が実施される。新学習指導要領というのは、資質能力という学習評価の見方をする。今まで知識・技能が大きくなっていたが、それ以外のところを見ていくことが大事。（ルーブリック評価など）
- ・主体的な深い学びは学校だけでなく、皆様方のご協力が大切。

田和氏（IDEC）

- ・特産品を使った商品開発で作ったトマトジャムがフードセレクションで金賞を受賞したという嬉しいニュースがあった。
- ・商品開発の中で生徒の皆さんと一緒にやらせて頂く中で、斬新な発想、高校生の視点で刺激になる部分がある。
- ・ただ作るだけではなくて、買っていただいておいしかったと言って満足してもらえるような商品化をして、喜びを感じてもらえたら。

井上氏（自治会）

- ・佐用町の弱みというのがあるが、逆転の発想で河川災害は強みになっていると思う。
- ・災害については「災害後」「災害と災害の間」のことについて考えていかなければならないのでは。
- ・自治会と地域と連携してもっともっと取り組んでほしい。昨年大変苦勞して取り組まれたようだが、地域にはあまり浸透していない。
- ・佐用高校のブランド化を目指して、卒業しても定着してくれることが一つの期待。
- ・佐用町内にある企業の中に定着して佐用町の発展につながるような取り組みを遠慮せずにやってもいいのではないかな。

庵途氏（町長）

- ・高校としての取組なので、色々期待することもあるが1年間これだけやるわけではないので、限度はあると思う。
- ・子どもの出生率も低く、クラス数も減っていて、高校もかなり定員割れをしている。
- ・少ない人数の中で教育を通じて地域のこれからを担う、これからを支えていく人材になってほしい。
- ・プロフェッショナルとして取組を通して考え方や意欲を持っていくことも必要だと思う。
- ・地域との連携等期待したい。
- ・いろんな形で活動に対して十分に関わっていただいた中で、職員も必要なことを勉強しながらぜひ協力させていただけたら。

④ 指導助言

永田氏（兵教大）

- ・生徒自身がルーブリック評価を作成しているということは、それによって主体的な学びになると思われる。
- ・ヒューマンサービスの年間指導計画について
 - 後半の資質能力と育てたい力を書く方がよい。
 - ヒューマンサービスならではの目標が薄く感じる。単なる主体性とコミュニケーションだけではないと思うので、もう少し深い記述が必要になってくると思う。
- ・3つの柱ごとに図式化しているのは分かりやすい。
 - カリキュラムを開発するにあたっては何をするのか、どんな活動をするのかというのが大事だが、高等学校の教育なので「資質能力」は、学習内容や活動によってどんな力をつけるのかというのが大事。それぞれ学年のところに付けた力を書いてあるが、それぞれの学年を通して最終的に付けた力は、「食に通じた佐用を支えるプロフェッショナル人材に必要な資質能力とは一体何なのか」ということを示したら。
- ・P.17 実施計画について、活動のみの記述で終わっている部分が散見される。活動を行うことによってどんな力をつけさせるかということも意識して授業・カリキュラムの実施をするとよいのでは。

作野氏（島根大）

- ・評価した点は多様な学校科目を設定したことと、普通科との連携の道筋をつけたこと、それから本来の組織体制（地域協働部や地域協働推進委員会）を設けたことは、学校をあげて取り組まれていることなので大変素晴らしいことだと思う。
- ・今後、更に期待する点は評価。規準の書き方は大変大事。逆算することは大変大事。どういう人材を育てるかそのためにはどうあってほしいかが規準になる。規準から実際に活動と照らし合わせて元ができることを検討していただきたい。
- ・カリキュラムマネジメントについてはとても大事。
 - 地域側が参画するためにどうしたらよいかというと、地域側の組織が受け入れできる体制を作らなければならない。
 - カリキュラムマネジメントのイメージに基づいて、家政の先生方だけでもワークショップして作り上げていくとよりカリキュラムマネジメントに繋がる。
- ・地域との協働においてのところについて
 - 地域との連携は学校が地域にアプローチするだけではダメで、地域側が受け入れ体制を作って待っているだけではダメで、両者を結びつける必要がある。コーディネーターやアドバイザーが必要。地域と共にある高校側がコンソーシアム、学校と共にある地域側のコンソーシアムのようなものが必要。実行の組織体制も受け入れておいて、個別にしていけるのではなくてトータルで受け入れ体制を整えておくと、学校側も負担が軽減される。だが、町が直営で運営していくのは難しいので、一般社団法人などの外郭組織を作って（中間支援組織）そこに対して町がお金を出す。今年度が終わったらどうするか、再来年度を目指して進んでいかなければ遅くなる。

深化した点と今後さらに期待する点

1. 深化した点

- 1) 多様な学校設定科目の設置
- 2) 普通科との連携
- 3) 校内の組織体制整備(地域協働部, 推進委員会)

2. 今後さらに期待する点

- 1) 評価: ルーブリック等の見える化
- 2) カリキュラムマネジメント(p.21)
- 3) 地域側の組織的受け入れ体制

井上会長のご意見に賛同します！

「強み」と「弱み」は裏表ですので
少し表現を変えて頂いた方がよい
と思います。
表頭の表現を変えるべきです。

例: 高齢化→弱みか？

令和３年度 兵庫県立佐用高等学校 第２回コンソーシアム委員会

１ 日 時 令和３年１０月２０日（水）１４：３０～１５：３０

２ 場 所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

３ 出席者

（１）コンソーシアム委員

庵途典章氏（佐用町長）

井上洋文氏（佐用町自治会連合会長）

西川典男氏（佐用町教育委員会教育課 教育推進室長）

田和久典氏（IDEC 株式会社グリーンソリューション事業部長）

松田圭介氏（ナニワフード株式会社）

水野博氏（日本調理製菓専門学校 校長）

久保正彦氏（一般社団法人 ドローン減災士協会 代表理事）

武田由哉氏（兵庫県立山崎高等学校 校長）

神田貴司氏（兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事）

永田智子氏（兵庫教育大学 教授）

作野広和氏（島根大学 教育学部教授）※リモート参加

（２）佐用町 地域協働学習支援員 服部憲靖氏（佐用町企画防災課）

（３）佐用高等学校 西坂美樹（校長）、上田貴哉（教頭）、岩崎由香子（教諭）、 小寺由夏（教諭）、岡祐依（教諭）、多々良里奈（教諭）、高橋智美（臨時講師）、 琴川加代子（臨時講師）、中田真佑（臨時実習助手）

４ 次 第

（１）資料確認

（２）開会

① 開会のことば

②－１ 校長（佐用高校 西坂校長）

- ・コロナ禍で、取組の３本柱の特産品を使った地域活性化・健康寿命の延伸・災害に強い町づくりの学びを止めないように工夫しながら実践をしてきた。
- ・感染拡大が収まりつつあるが先の読めない状況なので、それに負けないように今後も本事業を直実に一歩ずつ進めていきたい。

②－２ 委員代表挨拶（佐用町 庵途町長）

- ・佐用高校で取り組んでいただいている事業は、コロナによって計画通りには達成できなかったということだが、地域社会としても健康づくりなど非常に大切な課題が入っていると思う。生徒の皆さんに十分に関心を持って取り組んでいただくことが将来に繋がる。
- ・これから感染拡大しないかどうかは分からないが、３回目のワクチン接種計画も行っている。今現在計画している事業や、さらにこれまでの遅れを取り戻せるようにこれ以上の活動にも取り組んでいただければと思う。

(3) 出席者紹介

(4) 司会選出

(5) 議事

- ① 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」経過報告について
- ② 地域協働に関する生徒アンケートについて
- ③ 今後の事業展開について
- ④ 意見交換

水野氏 (みかしほ)

- ・ 1回目は災害時の食事ということで災害が起こった時にすぐに食べられる缶詰の依頼だった。ある程度災害が復旧してきた時に簡単な加熱調理で少し温かい味の濃いものを食べることが必要ではないかということで、アルミホイルにα米を包んで親子丼を作った。
- ・ 2回目の講習では高齢者向けの集団調理を行った。冷めて食べるという条件もある。集団調理では大釜を使う面白さがある。集団調理は衛生管理が一番なので、おいしい以上に衛生をとということで勉強していただいた。

武田氏 (山崎高校)

- ・ 山崎高校の生活総合科という家政科の学科があり、そこが中心になって地域と連携しながら防災活動あるいは災害時の非常食についてこれまで研究してきて、情報提供もさせていただいている。
- ・ コロナウイルスが感染拡大している中で、山崎高校でも12月に地域と連携した防災活動を計画しているが、どこまでできるか見えていない。特に山崎断層があり、近年地球温暖化との関連もあるかもしれないが、気象災害が山間部で発生している。いざというときに高校生が中心となり、地域防災に役立つことができるかもしれないと考えている。

神田氏 (県教委)

- ・ 令和4年度から新学習指導要領が実施される。新しい学習指導要領に変わっていく中で、キーワードとして指導と評価の一体化が出てくる。佐用高校からの報告で、3本柱の中にある身につけたい力という説明があったが、実際この内容をやってどうだったかというのも大事になっていく。
- ・ 身につけたい力が身につけていないのであれば、今度工夫をどうすればいいのかという、指導したものを評価して指導していくというPDCAサイクルを回す必要がある。

松田氏 (ナニワフード)

- ・ 今年は昨年の反省を踏まえて、早めに形にできるような流れを作り、商品化に対しての指導というのができたという自負している。
- ・ 時間がない中で、どういう言葉で伝えたらちゃんと伝わるかというのは考えながら喋っているが、指導する方が経験不足な部分もあるのでどこまでちゃんと伝わっているか定かではない。出来上がったものを見ていただいて、非常に美味しいものが出来上がっているのので、それを評価していただけたら、生徒たちも報われると思う。また来年最終年度に向かって、会議を重ねて、きちんとした製品が作れるように指導をしていく。

田和氏 (IDEC)

- ・ 3つの柱それぞれの活動の中で、体験をするカリキュラムが多く、この状況の中でこれだけの体験を生徒の皆さんが行うというのは非常に素晴らしい。
- ・ ナニワフードさんと一緒に、特産品を使った商品開発で担当させていただいている。レシピが完成して、11月の販売にむけてラストスパートという会議になっている。
- ・ 今までの取組の状況をずっと見ていると、非常に生徒の皆さんは真面目に一生懸命カリキュラムに取り組んでいる。私どもが話をして知識を身につけていただく以上に、自分たちで学んで何か考える姿勢がすごく感じられるカリキュラムだと感じている。

井上氏 (自治会)

- ・ 高校の卒業後地元貢献したいというアンケートは家政科が普通科よりも多いということだ。これは職場体験等をして、生きる力や働くことの意義や楽しみを実感できた生徒が多くいたのだと思う。
- ・ 現場でやることによって最初は不安があってもやっていくことによって自信がつくことをアンケートが表している。自治会としても色々な行事が年間あるが高校生などは地域に出てくるのが難しいと考えてきた。自治会としても生徒たちとこの地域の行事や伝統を一緒になって頑張っていけば、生徒も生きる力や楽しみを実感していただけるのではないかと感じた。

久保氏 (ドローン)

- ・ 食や防災を中心にいろんな面で調整役のような形で関わらせていただいている。生徒達と一緒に授業すること多いが、本当に一生懸命に吸収しようとしている。そして素直に指導者の方の言うことを聞いて素直に受け取るので、発展、向上、育成されているように感じる。
- ・ アンケートの結果を見ると居住地は町外の生徒が多い。その中で佐用町に魅力を感じ、特産物を知っている子が多い。これは普通科よりも家政科の方が多いのは、家政科で授業をしているからだと思う。
- ・ 地域貢献したいという意見もあった。残念なのは地元で働きたいというのが少ないこと。

庵途氏 (町長)

- ・ 生徒の考え方・意識がデータの形で出てきていて、佐用高校が地域と一体になって活動している学校であるという表れだと思い、嬉しい。
- ・ 家政科の学生の居住地で佐用町内が14%になっている。学区が広がって全体の生徒数が減少している中で、佐用高校に来てこんな勉強・生活をしたいという佐用高校の魅力を高めていくことが学校において大切だということを改めて感じている。

⑤ 指導助言

永田氏 (兵教大)

- ・ 学習指導要領が変わっていく中で指導と評価の一体化や何を指導したかも大切だが、どんな力が付いたのかということの評価していくことが大切になってくる。これまでは何を教えるか、何をさせるかということが重視されてきたが、どんな資質能力が育成できたかが求められる時代になってきた。

- ・3本柱の左側に付けたい力が学年ごとに書かれているが、資質能力を評価するためには、付けたい力を計るための資料を残すこと、分析することが大切になる。付けたい力が本当についたかどうかを計る1つとして、生徒たちの書いたアンケートやレポートが重要な根拠資料になる。学びの記録をきちんと残しておくことが大切
- ・今後、ギガスクールで1人1台端末を持つようになると、紙だけではなく写真・動画を証拠に残していくことができる。
- ・自由記述から付けたい力（調査分析力、課題発見解決力、情報発信力、企画力）を見ることは難しい。見たい力を書かせるような項目を設定したり、書いたもので判断したりするのでなければ、力が見られるような実践の計画を立てると良い。どういう姿を見ることができれば、力が付いたのか見えるということまで想像して、事前にどう証拠を残すのか計画しておく、どんな力が付いたのか取組の成果を見ることができる。
- ・自由に書かせたら、想定していた以外の力も付いているということも有り得る。例えば探究力しか考えていなかったが、心の成長や認定力が付いたなど、想定外の力が付いたことが他の資料から見ることができれば、付けたい力を変更していくこともできる。

作野氏（島根大）

- ・学校の先生方は忙しくて資料を作ることが難しいが、佐用高校は初年度からしっかりと資料を作っているところが高く評価できる。
- ・良い点はスパイラルな向上を意識されていること。指導要領にも書いてあるように、生徒が学年を上がるにつれてスパイラルに向上をする。学校としても年度が経つにつれて成長している。
- ・フードデザイン、ヒューマンサービスなどの多様な学校設定科目を作り、総合的な探究の時間などの行動的なカリキュラムを作っていることも高く評価できる。
- ・生徒の声と地域を聞いていると、学校と地域が近づいていることは大きな成果。一方で、今後更に期待できることとして、前回言ったループリックなどの評価の見える化により、指導と評価の一体化の今後研究が進めば、評価という観点が重要な論点になる。
- ・学校の先生方が他の教科、領域（カリキュラム）とどう関係しているのか。家政科ではやっているのかもしれないが、普通科と連携しなければいけない。学科が違うからではなく、高校としてカリキュラムを考えていただくと良い。
- ・学校に地域が参画するというステップ1。学校と地域が連携するというステップ2。おそらく佐用高校もステップ2である。目指すのは本当の意味での協働。地域側が学校に対して何を求めているのか、学校と一体になってやっていくことが大切。県立高校というのは難しさがある。佐用地域では佐用中学校などとは連携をしているかもしれないが、教育委員会できちんと考えていただかなければならない。地域と学校が同じ目標に向かって、地域と学校が相互補完できることが必要。お互いがお互いの学び場であり、地域から学校を見れば学校教育を受ける場、学校から地域を見ると社会教育の一端を担って人材の育成を行うという考え方がステップ4である。

評価できる点と今後さらに期待する点

1. 評価できる点

- 1) **スパイラル**な向上 1年→2年→3年
- 2) **多様な教科・領域**(学校設定科目)の組み込み
- 3) 地域と密着(連携・協働) 生徒の声・地域の声

2. 今後さらに期待する点

- 1) **指導と評価：ルーブリック**等の見える化(前回提示)
- 2) **カリキュラムマネジメント**(前回提示)
- 3) 「主体的」「対話的」な学び→「**深い学び**」の重要性

学習指導要領改訂の方向性

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

「社会に開かれた教育課程」の実現

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共（仮称）」の新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない※

どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成

知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び

※高校教育については、些末な事実的知識の暗記が大学入学者選抜で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革等を進める。

（文部科学省資料より転載）

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第3回コンソーシアム委員会

1 日 時 令和4年2月5日(土) 11:30～12:30

2 場 所 さよう情報文化センター 会議室

3 出席者

(1) コンソーシアム委員

庵途典章氏(佐用町長)

井上洋文氏(佐用町自治会連合会長)

西川典男氏(佐用町教育委員会教育課 教育推進室長)

田和久典氏(IDEC株式会社グリーンソリューション事業部長)

水野博氏(日本調理製菓専門学校 校長)

小山和也氏(美作市スポーツ医療看護専門学校 事務局事務部長)

久保正彦氏(一般社団法人 ドローン減災士協会 代表理事)

武田由哉氏(兵庫県立山崎高等学校 校長)

井上珠郁氏(兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事)

永田智子氏(兵庫教育大学 教授)

作野広和氏(島根大学 教育学部教授)※リモート参加

(2) 佐用町 地域協働学習支援員 服部憲靖氏(佐用町企画防災課)

(3) 佐用高等学校 西坂美樹(校長)、上田貴哉(教頭)、岩崎由香子(教諭)、 小寺由夏(教諭)、岡祐依(教諭)、多々良里奈(教諭)、小谷美香子(教諭)、 高橋智美(臨時講師)、中田真佑(臨時実習助手)

4 次 第

(1) 資料確認

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長(佐用高校 西坂校長)

- ・合同防災訓練は山崎高校の地域と連携した取組の資料を参考に、佐用高校バージョンで実施した。
- ・訪問サービスは、地域を特定した活動を考えていたが難しかったので直接個人にお願いして訪問した。
- ・昨年の発表の反省をして今年度は改革をしたが、佐用高校が最終的に目指しているところには、まだ到達できていない。

②-2 委員代表挨拶(佐用町 庵途町長)

- ・今後の高校のあり方をどう考えていくか、教育の立場だけではなく地域においても大きな課題。地域協働をきっかけにして、地域に出て地域を知り地域のために働く高い志を持った生徒を育てて欲しい。
- ・文科省の事業が地域を支えていく人材育成の方向性を示すと期待。三年間で終わるのではなく、佐用高校の教育の特色にして欲しい。

(3) 出席者紹介

(4) 司会選出

(5) 議事

① 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」経過報告について

② アンケート比較について

③ 令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」研究開発事業計画について

④ 意見交換

水野氏 (みかしほ)

- ・災害時に温かいものを食べられるように、缶詰とアルミホイルを使って調理した。ご飯を水ではなく牛乳を入れて炊くと、不足しがちなカルシウムやたんぱく質も摂れる。
- ・高齢者向けのお弁当では、高齢者に不足する栄養素も摂れる献立にした。弁当は中身だけでなく、衛生や安心安全の方が大切。噛む力の弱さや味付けも考えた献立にした。
- ・カフェでの実習では、プレートランチについて勉強してもらった。メニューは姫路レンコンを使ったハンバーグを中心に、女性に喜ばれる野菜を活かした献立。食事やデザートだけでなく、ポップや接客についても勉強して楽しんでもらえた。
- ・みかしほ学園でも永田先生がおっしゃっていた「力の評価」を利用して、自分なりの評価をイベントの事前事後に取って就職活動に利用している。

小山様 (美作スポ)

- ・健康寿命の延伸のテーマをもとに、介護・福祉・医療の分野で研修。在校生にはない、高校生ならではの様々な気づきや意見を聞けたので、フィードバックしたい。高校生がどんなことを考えているか学校内でも共有したい。
- ・本校では、在校生が美作市の学生消防隊として40名ほど参加している。災害時の避難所では、高齢者や基礎疾患を持っている方に対して、医療の知識を持った学生がケアをする。

武田様 (山崎高校)

- ・コロナの影響で地域と一緒に活動することが難しいが、毎年メインテーマを作り、防災に関して取り組んでいる。
- ・「地域の皆さんの安全安心」という防災の観点で、私たちは日本人なので日本人をイメージするが、宍粟市の中には外国人の方もたくさんいる。日本語が堪能ではない場合や、イスラムの方だと食べ物に困る。田舎だが、災害時に人種や民族を超えて考えるべき。

井上様 (県教委)

- (1)商品開発では「なぜ行うのか」や「こうなったらどうなるか」という過程が発表の中で見えにくい。
- (2)商品開発はKJ法で決まったとあったが、今後の発表では企業や地域がどう関わっているかが見えると面白い。例えば、福祉は教師が現場でどういう意味づけでやっているか見たい。過程が発表の中にあれば、段取りと結果が見える。文科省がこの事業のモデル

にと言っているので、他の学校でどうやったら生徒が変わるかが分かる発表が必要。

(3)キャリア教育の中では、生徒がどう変わったか指標を示すことが望まれる。

○今回の地域協働も「生徒がどのように変わっているか」が目に見え、「数字が変わっているか」を客観的に示すと取り組みやすい。

田和氏 (IDEC)

- ・SDGsの活動につながっている。高校生が勉強でやっていることが、地域貢献になっている。企業が必死になって取り組んでいる活動を高校生がやっていることに意義がある。
- ・商品開発ではトマトカレーとトマトソースを作って商品化した。課題は価格設定や材料選定などがある。毎年商品化できるかと考えながら行っている。来年は地域の特産品としてインターネットでバズる商品を作りたい。

井上氏 (自治会)

- ・訪問サービスについて喜ばれたという意見があった。
- ・高校生の皆さんがやっていただいたことに関して認識を新たにしなければならない。
- ・防災訓練に参加させていただいた。紙での皿作りやマスク作りを体験した。日頃からおさなりにしていることを高校生の皆さんが親身になって教えていただいた。
- ・防災は集落でも考えていかなければならない。企画から参加させていただいて、地域全体に訓練の参加を呼び掛けても良かった。とても勉強になった。

久保氏 (ドローン)

- ・ドローンが避難放送をする時に、高校生が自分達できちんと原稿を考えて放送していたことに驚いた。練習の時よりも、本番が一番良かった。
- ・650人の訓練だったが、佐用町内からもっと人を呼んでもいい訓練だと思う。
- ・江川地域づくり協議会でセンター長をしているが、佐用町内で2番目に高齢化率が高く、50.5%であり、地域づくりでキーになる人も高齢化してきている。
- ・佐用高校の同窓生からの反響も返ってきている。

⑤ 指導助言

永田氏 (兵教大)

- ・(1)家政科の先生方が尽力した姿が資料から見えてこない。モデル化して全国の高校で行う場合、他の学校の先生は何をすればこの状態ができるのかを知りたい。「こんな感じではないといけない」という努力や、「ここはやってはいけない」という生徒の活動だけではなく、それに至るまでの先生の支援や活動の肝の部分、情報を示して欲しい。
- ・(2)評価の話。例えば付きたい力」という表がある。今後は、各科目や活動内容によって、「この科目ではこんな力が付く」と細分化したら良い。
- ・生徒の感想は面白い。感想がストーリー的でプロセスを含めて書かれている「ナラティブ」という手法で、やってきたこととその時感じたことを物語風に振り返っている。全員分を集めて、付きたい力に即して分類すると上手く使える。
- ・最初に「こういう力を見る」という見方もあるが、事実から理論を作り出す「グラウンデッドアプローチ」という方法もある。この取組がこんな力を育てるという理論を作ることできる。自由記述は強力なツールなので、感想を随時取って分析することが大切。

作野氏（島根大）

- ・他校で生徒が主体的・意欲的に実践をやっているのはあまりなく、評価などの観点も十分意識されている。
- ・生徒の学びと育ちに繋がっている。評価事項を持って臨んでいる非常に良いPDCAサイクル。
- ・課題(1)「提言」はよく使われるが、現状から後退する表現。佐用高校はもっと上を目指し、地域の役割の一部を担うことが必要。佐用高校がないと困ると言われるほどに地域の一部を成すべき。
- ・課題(2)今年度はカリキュラムマネジメントについて、学科間の繋がりを意識できた。特に普通科は乖離しているので、学校全体で探究の時間や学校設定科目を備える。
 - 大人は古い価値観があるので変わりにくい。文科省の方針や大学でも「何を学ぶか」ではなく、「どう学ぶか」「何を目指して高等教育機関に進学するか」が問われる。専門学科では意識しやすいが、普通科は意識しないと学ぶ意味が薄まる。この授業をきっかけに切り込んで欲しい。
- ・「シンク・グローバリー アクト・ローカリー」の考え方。
 - ローカルな地域を学ぶには、日本全国だけでなく世界と直結して、世界が1つのシステムで連動していることも学ぶことが必要。佐用のような中山間地域では、身近な地域のことは学びやすいが、全世界と繋がっていることも学んで欲しい。
 - 大学の中や地域では、ジェンダーフリーやハラスメントの問題がマイナスに影響している。価値観の固定化、あるいは古い価値観でいると、ハラスメントをしたつもりでなくてもハラスメントになる。この学習が思考の柔軟性にどう切り込んでいくかが大切。生徒が大人たちを変えていくと、全体が良くなる。佐用においては佐用高校生なくしては、地域が成り立たないとなる。

講評

■成果

- ・2年間で十分な取り組み、成果、評価 →PDCAサイクルを確実に進めている
→生徒の「学び」と「育ち」に好影響

■課題

1) 「提言」について

「提言」=言いつ放し、聞きっぱなし

2) 「カリキュラム・マネジメント」について

教科との連携／学科間の連携（本年度は進歩あり）

佐用高校をどうするか
佐用町をどうするか
日本や世界をどうするか

↓
大人側の視野が問われる

2) Think Globally、Act Locallyについて

世界的視野に立つ：グローバル社会、ジェンダー、レジリエンス

(2) 運営指導委員会実施報告

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第1回運営指導委員会

1 日 時 令和3年8月5日(木) 14:00～15:30

2 場 所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

3 出席者

(1) 運営指導委員

浅野博之氏(佐用町教育長)

岸田恵津氏(兵庫教育大学 教授)

江見秀樹氏(佐用町企画防災課 課長)

田和久典氏(IDEC株式会社グリーンソリューション事業部長)

波部新氏(兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事)

(2) 地域協働学習支援員 服部憲靖氏(佐用町企画防災課)

地域協働アドバイザー 久保正彦氏

(3) 佐用高等学校 西坂美樹(校長)、上田貴哉(教頭)、岩崎由香子(教諭)、 小寺由夏(教諭)、岡祐依(教諭)、多々良里奈(教諭)、高橋智美(臨時講師)、 中田真佑(臨時実習助手)

4 次 第

(1) 資料確認

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長挨拶(佐用高校 西坂校長)

- ・本事業については、昨年度新型コロナ感染拡大でなかなかスタートを切れなかった。予定していた実践活動もかなりの中止や制限を受けたが、知恵を出しながら「with コロナ」新しい生活様式の中でもできる新しい取組を考えて実践してきた。2月6日には研究発表大会を佐用情報センターで実施して、皆様に来ていただき貴重なご意見をいただいた。
- ・新型コロナウイルスに負けないで本事業を着実に一歩ずつ進めていきたい。本日は昨年度の取組内容や実践などを振り返り、ご意見ご感想をいただき、これからの取組に活かしていきたい。

②-2 委員代表挨拶(佐用町教育委員会 浅野教育長)

- ・佐用高校家政科を中心に、地域に根ざした魅力ある学校作りを頑張っている。
- ・県では「高校教育あり方検討委員会」が進んでいる。学べる子は学びたいところに行けるようになっていると思うが、その反面で学校格差が出てきた。地元に残してほしいというのが西播磨各地の教育長の意見。
- ・佐用高校がさらに魅力ある高校になるように取り組んでいただいて、地元の子や他の市町からもたくさん来てくれることを願っている。

(3) 出席者紹介

(4) 司会選出

(5) 議事

- ① 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」研究開発事業計画について
- ② 事業進捗状況について
- ③ 意見交換

波部氏 (県教委)

- ・来年度から始まる新学習指導要領に向けて、今後新たにどういう教育が求められているのかということを各学校に説明している中で一番今意識しているのが、何ができるようになるか以前に、どうやって学んでいくかというプロセス。実施をした前と後のプロセスで、変わったということを生徒に実感させることが深い学びに繋がる。
- ・研究の核となるヒューマンサービスという学校設定科目の中で、気になったのが、地元に残りたいという生徒の数が去年も高くなかったというところ。外を見て自分の故郷のよさが分かると思うので、この科目の中で日本の中、世界の中の佐用の位置が分かって、生徒に意味を持って考えさせる機会を作り、私が住む地域がこんなにすごいということを感じると、もっと地域にいたいという思いも増えてくるのではないかな。

田和氏 (IDEC)

- ・今年は体験にプラスして、生徒自身がその進捗を評価するルーブリック評価を導入されているということで、やってみる前とやってみた後でどうだったのか評価できるという部分がすごくいいと思った。
- ・コンソーシアム委員会のメンバーにも会社として参画させていただいているが、参画する側のメンバーとしては体験する機会、学校の授業の中ではなかなかできないことを企業が参画することで体験できるという部分に焦点を当てていきたい。

浅野氏 (教育長)

- ・小中学校で学習したことが高校になって、さらに高度な体験や中身で取り組んでいただけるという連携をと思う。中高連携を今もさせていただいているが、小学校や中学校での取組もまた視野に入れて取り組んでいただけたらと思う。
- ・ヒューマンサービスも実際に体験をして、給食ボランティアでも感想がハガキで返ってきている。給食ボランティアをすることによって高齢者の方と心と心が繋がったというのは大事だと思う。心の繋がりがあってこそ佐用町に貢献しようという気が起きてくるのではないかなと思うので、連携を踏まえた取組をさせていただけたらと思う。

④ 指導助言

岸田先生 (兵教大)

- ・高校の専門学科のことをこの機会に勉強させていただいている。今回拝見させていただき、すごく充実してきている印象を持った。3つの研究テーマを立てていたが、それぞれが別々に縦に動いているのではなく、横断的になっている印象強く持った。おそらくヒューマンサービスの位置づけが良い。カリキュラムマネジメントが意識されていることもよく分かる。今後3年生で仕上げる資質能力というものに期待が持てる。

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第2回運営指導委員会

1 日 時 令和3年12月15日（水）14:00～15:30

2 場 所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

3 出席者

(1) 運営指導委員

浅野博之氏（佐用町教育長）

岸田恵津氏（兵庫教育大学 教授）※リモート参加

森田和樹氏（佐用町企画防災課 まちづくり企画室長）

田和久典氏（IDEC 株式会社グリーンソリューション事業部長）

井上珠郁氏（兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事）

(2) 地域協働学習支援員 服部憲靖氏（佐用町企画防災課）

地域協働アドバイザー 久保正彦氏

(3) 佐用高等学校 西坂美樹（校長）、上田貴哉（教頭）、岩崎由香子（教諭）、 小寺由夏（教諭）、岡祐依（教諭）、多々良里奈（教諭）、高橋智美（臨時講師）、 琴川加代子（臨時講師）、中田真佑（臨時実習助手）

4 次 第

(1) 資料確認

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長挨拶（佐用高校 西坂校長）

- ・昨年度と今年の4～5月は新型コロナウイルスで計画通り活動が進まず停滞したが、5月下旬からは少しずつ活動できるようになり、夏休み中も出来る範囲内で工夫して行った。
- ・計画の変更や縮小で予定していた通りにはできなかったとは言えないが、去年でできなかったことも8月以降で新たに組み組めた。

②-2 委員代表挨拶（佐用町教育委員会 浅野教育長）

- ・佐用町では感染が落ち着いて、高齢者を対象に敬老の日のイベントを開いた。久しぶりに会えたことで、町民の皆さんの嬉しそうな顔が見えた。
- ・佐用高校の家政科の皆さんの活躍を、新聞記事で見てよく頑張っていると思う。佐用町の魅力を発信していただいて感謝。

(3) 出席者紹介

(4) 議事

① 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業 （プロフェッショナル型）」経過報告について

② 地域協働に関する生徒アンケートについて

③ 今後の事業展開について

④ 意見交換

井上氏（県教委）

- ・研究自体が学校の新しいカリキュラム開発をすること。「見える化」されて他の学校でも活かせることが大事。文部科学省の研究は学校・地域で行った後が広がっていかないことが課題。
- ・佐用高校の取組に関しても、カリキュラム構成から生徒の変容が分かり、他の学校でも出来るような形を取らなければならない。
- ・自己肯定感の上がり方が具体的な数値で示されることも必要。アンケートやルーブリック評価も、教員側の評価が重要。生徒の変容を見ていくために、教員の評価を取ることも大事。
- ・防災訓練などの大きな取組は、学校全体でのカリキュラムマネジメントに、普通科の生徒や農業科学科の生徒との連携も関わってこることが必要。
- ・最後の年度である三年目を迎えるにあたり、色々な取組が「どんな力をつけるために行い、どうだったのか」が整理されて「見える化」した形で、全国の皆さんに発信してほしい。

田和氏（IDEC）

- ・去年とは違い、今年は想定していたカリキュラム通りに大体進行した。去年できなかった体験を数多くできたことに喜びを感じる。
- ・学ぶ中で机では分からないことが、体験だと実際にお客様やお年寄りと接して初めて分かる感情的な部分がある。

浅野氏（教育長）

- ・佐用町の資源を使った取組を通して、生徒たちが色々な力をつけている。
- ・体験を通してコミュニケーション力が身につく。コロナが収まり、体験できることは喜ばしい。
- ・単にお弁当を配布するだけではなく、はがきを通して心のつながりを求められたのは良い。触れ合えなくても心の繋がりが出来たという大切なことを学んだと思う。
- ・自分たちの取り組みがどう反応を得たか、評価されているか知ることによって次への意欲が高まり、課題も見えてくる。行ったことと評価は大事。アンケートなどで取り組んでいただきたい。
- ・佐用高校は地元の子が少ないのは少子化で仕方ないが、佐用の高校生が色々な場所で活躍してくれるとPRになる。佐用高校の取り組みを地域にもっと発信していただけたら。

⑤ 指導助言

岸田氏（兵教大）

- ・前回から格段の進歩・推進力が見えてとても興味深かった。大変な状況下でしっかりと取り組まれたことが分かった。
- ・今後の課題は、教員がアンケートやポートフォリオの分析をすることだと理解されている。
- ・カリキュラム開発は地域協働事業でもあり、食育でもある。
- ・フードデザインの学習指導要領に「食育と食育推進活動を扱いましょう」とある。食育の意義や食育を推進することの重要性を理解し、家庭や地域における食育推進活動のプロモーターになることも、「どんな力がついたか」に加えてもよい。
- ・食育を推進していく重要性のほかり方も課題になるが、ポートフォリオの分析から見えることを期待している。
- ・専門学科の生き残りをかけて、地域貢献は着眼点であり、重要なポイントである。佐用高校だから出来たのではなくて他の学校でも出来るために、ポイントが見えることが必要。

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第3回運営指導委員会

1 日 時 令和4年2月22日（木）16:00～17:00

2 場 所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

3 出席者

(1) 運営指導委員

浅野博之氏（佐用町教育長）

岸田恵津氏（兵庫教育大学 教授）※リモート参加

森田和樹氏（佐用町企画防災課 まちづくり企画室長）

田和久典氏（IDEC 株式会社グリーンソリューション事業部長）※リモート参加

神田貴司氏（兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事）

(2) 地域協働アドバイザー 久保正彦氏

(3) 佐用高等学校 西坂美樹（校長）、上田貴哉（教頭）、岩崎由香子（教諭）、 小寺由夏（教諭）、岡祐依（教諭）、多々良里奈（教諭）、高橋智美（臨時講師）、 琴川加代子（時間講師）、中田真佑（臨時実習助手）

4 次 第

(1) 資料確認

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長挨拶（佐用高校 西坂校長）

- ・今年コンソーシアム委員の皆様にご協力いただき、ヒューマンサービスでの高齢者訪問、合同防災訓練、商品開発など充実した活動ができた。
- ・生徒につけたい力を明確化して、「提言」という言葉に留まらずに、佐用高校が役割を担って活動すること。カリキュラムマネジメントでは家政科に留まらず、農業科学科・普通科でも地域との協働活動が派生すること。などの永田先生や作野先生からのご指摘・ご指導への取り組みも進めている。
- ・来年度に向けてより一層充実した取り組みになるように努める。

②-2 委員代表挨拶（佐用町教育委員会 浅野教育長）

- ・佐用町では1月からコロナの感染が増えて、2月には小学校閉鎖や保育園のクラス閉鎖をして、クラスターは起きずに落ち着いてきている。
- ・2月5日の発表会では、色々な制限がある中で生徒さんが頑張って出来ることをしたと聞いた。新たな取組や今までの活動を更に広げて進化したことを聞けて、嬉しかった。
- ・最終年度の来年は意見を頂きながら更にパワーアップしたい。

(3) 出席者紹介

(4) 議事

- ① 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」経過報告について

② 令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」研究開発事業計画について

③ 意見交換

神田氏 (県教委)

- ・今年度コンソーシアム委員の協力もあり、たくさんのことに取組んでいただき感謝。
- ・「指導と評価の一体化」という言葉もあるが、この事業はカリキュラム開発が目的。目標に向かってカリキュラムを作成する。前回のコンソーシアム委員会で作野先生や永田先生から目指す力について話があった。3本柱の「〇〇力」がついているか評価して欲しい。
- ・評価には定性的と定量的の2つがある。感覚ではなく客観的な評価をして欲しい。
- ・力について最終年度で評価して、できていないところはできるように修正して欲しい。
- ・PDCA サイクルを回しながら佐用高校にとって更に良いものを次年度で行って欲しい。
- ・3年で終わりではない。発表会で作野先生からもあったように、地域への還元が発展して、地域の中で当たり前佐用高校が行う形がベスト。この活動が佐用高校にとってより良いものとなり、さらに地域の活性化に繋がられることを願う。

田和氏 (IDEC)

- ・商品開発したものをイベントで販売して、生徒の力もついたと思う。
- ・その先をどうするか考えると、地域の宿泊施設と連携して開発した商品を使った料理をお客さんに食べてもらう体験ができると良い。開発したものを買っていていただいて嬉しい、それを使った料理を食べてもらって更に嬉しいという体験ができると、モチベーションも上がる。
- ・様々なことへのモチベーションにも繋がり、生徒の力も更に増幅されるのでは。

浅野氏 (教育長)

- ・教育は人づくり。活動を通して地域を支える人材を育成していくのが狙い。
- ・地域に何が必要か、どんな課題をどう解決していくか、見通しを持って行うことが大事。
- ・取組を通して、積極的発言・企画力向上・コミュニケーション能力向上などの社会を切り拓く力をつけて欲しい。
- ・達成感や「私は役に立っている」という気持ちを生徒に持たせることが、持続力になり次のやる気に繋がると思うので、その評価も続けて欲しい。
- ・西播磨管内では不登校傾向の子供が増加しつつある。コミュニケーション能力があれば、子供たちを救えると思う。
- ・防災の教育は佐用にいるからできるのではなく、どこに行っても防災の意識が持てるような人間にならなければならない。
- ・旅行先などの知らない土地で孤立するのは怖い。その時に自分の命を守る行動が出来るようになると、定着に繋がっていくと思う。防災の意識を教育で高めながら身につければ良い。
- ・活性化だけではなく、佐用高校全体で3本柱の雰囲気浸透して欲しい。

④ 指導助言

岸田氏 (兵教大)

- ・生徒については色々と力がついていることが分かったが、教員の関わりを合わせて示すと良い。
- 今後の他の所への一般化・発信という点では有用な情報。

5 令和3年度の成果と課題

①具体的成果

- 「佐用もち大豆コンテスト」で4名入賞
- 「全国高等学校家庭科技術検定」にて食物調理・被服製作(洋服)・被服製作(和服)・において1級取得で三冠王取得者増加
- 「色彩検定」受験者と取得者の増加
- 「文書デザイン検定」にて受験者と取得者の増加
- 「文書デザインコンテスト」にて1,480作品の中から審査員特別賞の受賞

②生徒の意識の変容 ※ 図1グラフ参照

生徒の意識調査を目的としてアンケートを実施した。家政科生徒の地域に対する意識の高さから本事業の成果として捉えることができる。

- ・佐用町内在住は、普通科生徒が一番多く約4割、次いで農業科学科で約3割、家政科が一番少なく15割である。家政科は本事業対象の2学年と1学年に限ると1割以下。

→ 地域と協働するにあたってはまず、佐用町について学ぶことが必要である。

- ・地域交流や貢献がしたいか、という質問では普通科が約6割、農業科学科が約8割なのに対して家政科は9割が肯定的である。

→ 本事業により従来よりも専門的な学びと地域との協働事業に深みがあることにより、意識が高い。

③考察と今後の課題

- ・教科や学年、学科を越えてのカリキュラム・マネジメント

→ 令和3年度は1学年が全体で地域活動を実践した。また、農業科学科は地域の活性化につなげる独自の「ビジネスコンテスト」を実施している。家政科の地域協働活動とのリンクを考え、学年や学科間交流のある事業を計画する。

- ・新型コロナウイルスの影響による新しい生活様式の中での地域交流、貢献活動の在り方

→ 「高校生訪問サービス」や「給食サービス」は地域の方々にとってかけがえのない交流事業であることが実証された。しかし、未だに新型コロナウイルスの影響はあることから、実際の訪問や交流のみならず、リモートでのコミュニケーションツールを確立することで、機会を増やす。

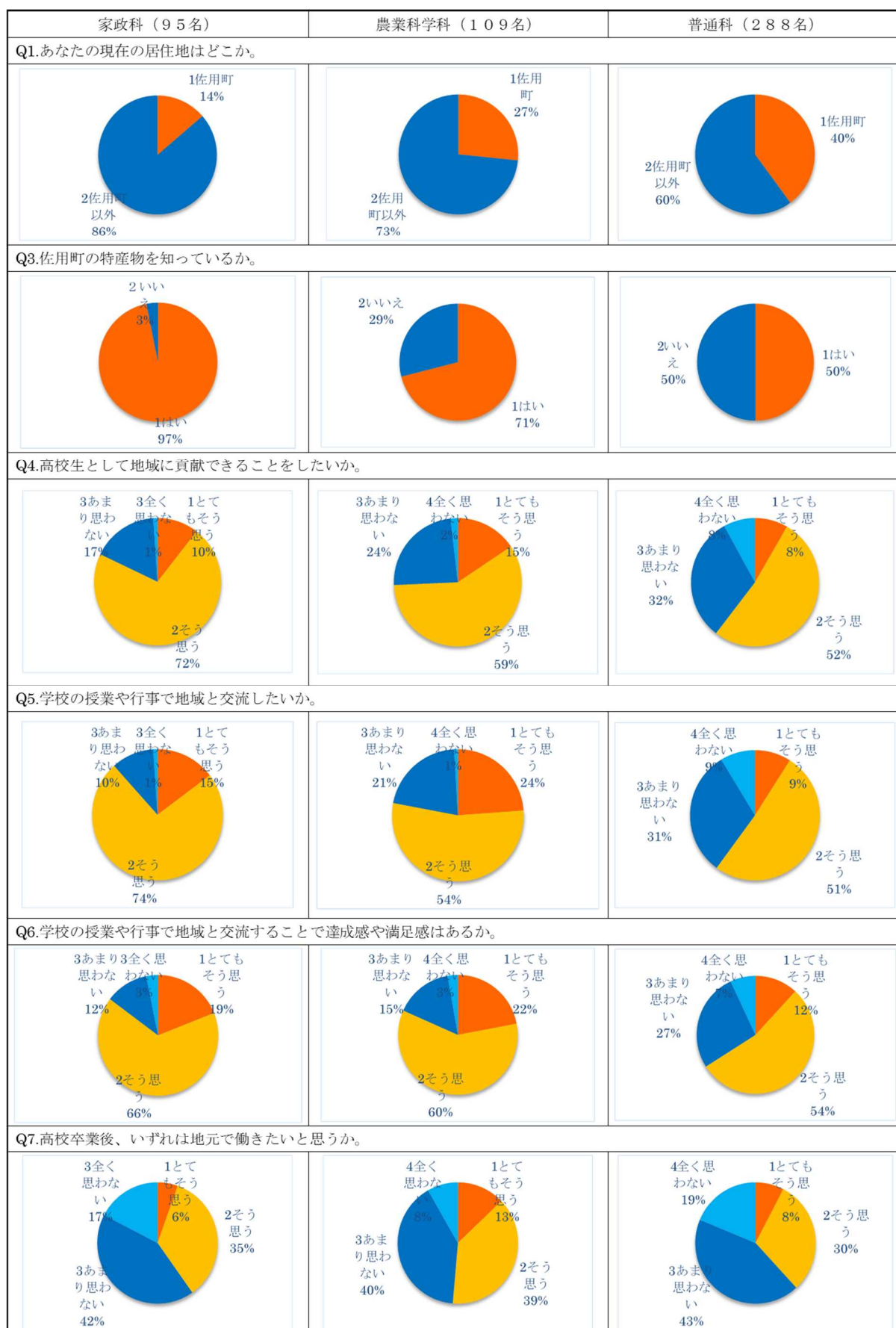
- ・成果物やアンケートの具現化と「指導と評価の一体化」

→ 今年度はそれぞれの取組の中で生徒のレポートやポートフォリオ、アンケートを多数実施した。これらの身に付いた力や評価をより反映させるためにルーブリックやパフォーマンス評価を活用した指導計画を立てる。

- ・国際的な視野に立ちグローバルな思考を身に付ける

→ 地域の日本語学校に留学中の生徒や隣接県との協働活動や情報交換の環境を作ることで、広い視野とグローバルな知識と技術の習得を目指す。

(1) アンケート結果 【図1】



(2) 目標設定シート

ふりがな	ひょうごけんりつさようこうとうがっこう	指定期間	令和2～4
学校名	兵庫県立佐用高等学校		

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート（報告時）

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(年度)	
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 地域をよくするために、地域課題の解決に関わりたいと思う生徒の割合						単位：％	
	本事業対象生徒：		90	70	80	80(R4)		
	本事業対象生徒以外：		20	20	69	40	50	50(R4)
	目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。							
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 健康寿命を延ばす食生活の在り方を考え、提言した生徒の割合						単位：％	
	本事業対象生徒：		30	65	80	80(R4)		
	本事業対象生徒以外：		0	0	0	0	0	0
	目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。							
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 佐用町の防災行事等に参加した生徒の割合						単位：％	
	本事業対象生徒：		100	100	100	100(R4)		
	本事業対象生徒以外：		30	30	30	40	50	50(R4)
	目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。							
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 家庭科技術検定（食物調理１級）取得生徒の割合						単位：％	
	本事業対象生徒：		100	100	100	100(R4)		
	本事業対象生徒以外：		5	5	0	10	10	10(R4)
	目標設定の考え方：知識と技術の定着度合いをはかる。							
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 高校卒業後、いずれは地元で働きたいと希望する生徒の割合						単位：％	
	本事業対象生徒：		43	60	70	70(R4)		
	本事業対象生徒以外：		50	50	38	60	70	70(R4)
	目標設定の考え方：地元に着用を持ち、就業することを目標としている。							
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 高校卒業後、地元で貢献したいと思う生徒の割合						単位：％	
	本事業対象生徒：		62	65	80	80(R4)		
	本事業対象生徒以外：		50	50	61	60	70	70(R4)
	目標設定の考え方：学んだことを将来に生かしたいと思う指標をはかる。							
c	(その他本構想における取組の達成目標) 地域交流や「高校生訪問サービス」等の体験的な学びに参加した生徒の割合						単位：％	
	本事業対象生徒：		100	100	100	100(R4)		
	本事業対象生徒以外：		50	50	50	60	70	70(R4)
	目標設定の考え方：学んだことを将来に生かしたいと思う指標をはかる。							
c	(その他本構想における取組の達成目標) 地域の方々と交流を持ち、協働することへの生徒の満足度						単位：％	
	本事業対象生徒：		88	80	90	90(R4)		
	本事業対象生徒以外：		50	50	73	60	70	70(R4)
	目標設定の考え方：主体的な学びにつながっているかをはかる。							

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)					単位：回
	外部講師による講義や研究会の実施回数					
	3	3	13	15	20	20(R4)
目標設定の考え方：研究開発の専門性を高めるために外部講師に委託する。						
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)					単位：回
	商品開発に際し、関係機関と生徒の会議の回数					
	0	5	10	8	10	10(R4)
目標設定の考え方：生徒が直接地域と方々と交流を持ち、課題に取り組む。						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)					単位：回
	研究開発成果の発表会の回数					
	1	1	1	2	3	3(R4)
目標設定の考え方：地域に開かれた学校づくりを目指す。						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)					単位：回
	校外に向けてイベントなどで学びを発表する回数					
	3	3	3	8	10	10(R4)
目標設定の考え方：研究開発の成果を広く校外に発信をする。						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)					単位：％
	「食」、「福祉」等に関する各種コンテストに参加した生徒の割合					
	100	100	100	100	100	100(R4)
目標設定の考え方：生徒の学びの到達度を測る。						
c	(その他本構想における取組の具体的指標)					単位：％
	地域のことが好きな生徒の割合					
	50	65	67	85	95	90(R4)
目標設定の考え方：地域に対する生徒の愛着度をはかる。						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)					単位：回
	コンソーシアムの委員会の開催回数					
	0	0	2	4	4	4(R4)
目標設定の考え方：研究開発の進捗状況をはかる。						
b	(その他本構想における取組の具体的指標)					単位：人
	協働に際し、地域と企業で人材が参画した人数					
	10	10	13	20	30	30(R4)
目標設定の考え方：連携機関の充実度をはかる。						
b	(その他本構想における取組の具体的指標)					単位：人
	校内外の探究活動などの教育活動に協力した地域の方々の延べ人数					
	50	70	10	90	110	100以上(R4)
目標設定の考え方：地域連携の充実度をはかる。						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
全校生徒数（人）	625	587	558	575	528
本事業対象生徒数			108	115	101
本事業対象外生徒数			450	460	427

『「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成』 ～佐用風土(Sayo Food)を活用したモデルプランの構築～

【研究開発の背景】

佐用町の強みと弱みを課題設定の主軸に捉え、佐用高校家政科での学びにリンクさせた上で、協働事業を考察することでカリキュラム開発に繋げる。その中で生徒のさらなる能力向上と地域への貢献を同時に展開することを目標とする。

佐用町の強み

- 「播磨国風土紀」が記す歴史と伝統
- 肥沃な土壌
- 兵庫・岡山・鳥取を結ぶHUB TOWN

佐用町の弱み

- 老年人口率40%（全国平均の1.5倍）
- 急激な人口減少（5年間で半減）
- 大規模河川災害

「食」に通じた、佐用を支えるプロフェッショナル人材の育成

- 佐用高校課題解決3施策
- 「佐用風土(Sayo Food)」商品開発
- 「高校生訪問サービス」実施
- 「保存食・非常食」開発

佐用町課題解決3方針

- 佐用の特産品を活用（商品開発・マーケティング）
- 佐用で暮らす人を守る（健康寿命延伸）
- 佐用の水害から学ぶ（安全安心な町づくり・災害レジリエンス）

【令和3年度の目標】

- 各取組を通して、生徒に様々な力を身に付けさせ「総合実践力」として定着させる。
- 三本柱毎の授業実践の中で教科横断的な内容を意識し、カリキュラム・マネジメントを行う。
- 地域や協働先との活動における主体性の向上と、専門知識と技術習得の深い学び。

【取組状況】

協働先

- ・佐用町
企画防災課
保健福祉課
社会福祉協議会
- ・IDEC
- ・ナニワフード
- ・佐用消防署
- ・瓜生原亭
- ・佐用保育園
- ・利神保育園
- ・子育て支援センター
- ・佐用小学校
- ・美作市スポーツ医療看護専門学校

佐用の特産品を活用
(商品開発・食育活動・
開発商品の広報・販売活動)



開発商品の広報販売会

佐用で暮らす人を守る
(高齢者食生活調査・
食改善レシピ開発)



高校生訪問サービス

佐用の水害から学ぶ
(災害時保存食開発・
避難時支援者育成)



防災バックッキング講習会



「高校生カフェ」in.瓜生原



給食サービスボランティア



佐用合同防災訓練

【実施体制】

商品開発

佐用町×企業×佐用高校
による商品開発会議を月に1
回開催、商品化

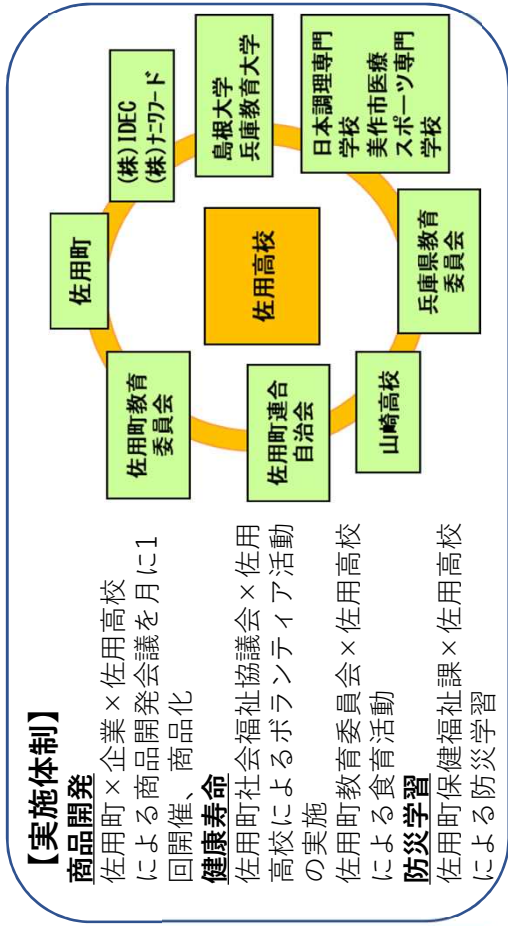
健康寿命

佐用町社会福祉協議会×佐用
高校によるボランティア活動
の実施

佐用町教育委員会×佐用高校
による食育活動

防災学習

佐用町保健福祉課×佐用高校
による防災学習



【成果】

商品開発

- 「夢茜トマトソース」「佐用もち大豆入り夢茜トマトカレー」
- 「佐用もち大豆コンテスト」で4名入賞
- 地域の特産品を使用し開発した献立や商品を地域に還元

健康寿命

- 専門学校での研修により福祉に関する専門知識と技術の習得
- 幼児から高齢者まで幅広い年代に対しての「食育」活動
- 地域高齢者に対する「フレイル予防体操」の提案

防災教育

- 「佐用町合同防災訓練～KIZUNA大作戦～」を企画運営
- 地域住民への防災意識調査と小学校「防災出前授業」の実施
- 災害備蓄食の開発と「災害マニュアルブック」の制作

その他

- 地域との協働による体験活動の中で生徒の主体性が育まれ、資格取得や学力向上意識の高まりがみられた一例
- 全国高等学校家庭科技術検定「三冠王」の取得者増加
- 「色彩検定」受験者と取得者の増加

【課題】

- 教科や学年、学科を越えてのカリキュラム・マネジメント
- コロナ禍における地域との交流活動（リモート交流の併用）
- 成果物やアンケート結果の具現化と「指導と評価の一体化」
- ルーブリックやパワーマンス評価を活用した指導計画

令和2年度入学生 実施教育課程

兵庫県立佐用高等学校

学年	学科	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
令和2年度 第1学年	家政科	国語総合②		現代社会②		数学Ⅰ②		化学基礎②		体育③			保健①	書道Ⅰ② 美術Ⅰ② 音楽Ⅰ②	C英語Ⅰ③		家庭総合④			生活産業情報②			フードデザイン②		ファッション造形基礎②		生活産業基礎①	総合的な探究の時間①		LHR①				
令和2年度 第1学年	家政科	国語総合②		現代社会②		数学Ⅰ②		化学基礎②		体育③			保健①	書道Ⅰ② 美術Ⅰ② 音楽Ⅰ②	C英語Ⅰ③		家庭総合④			生活産業情報②		フードデザイン②		ファッション造形基礎②		生活産業基礎①	総合的な探究の時間①		LHR①					
令和3年度 第2学年	家政科	国語総合②		現代社会②		数学Ⅰ②		生物基礎②		体育③			保健①	C英語Ⅱ②		音楽Ⅱ② 美術Ⅱ② 書道Ⅱ② 現代文B②	ファッションデザイン② 食文化②		生活と福祉②		※伝統文化②		生活産業基礎①		フードデザイン②		ファッション造形基礎②		服飾手芸② 調理②		LHR①			
令和3年度(案) 第2学年	家政科	国語総合②		現代社会②		数学Ⅰ②		生物基礎②		体育③			保健①	C英語Ⅱ②		音楽Ⅱ② 美術Ⅱ② 書道Ⅱ② 現代文B②	ファッションデザイン② 調理②		生活産業基礎①		生活と福祉②		※ヒューマンサービス②		フードデザイン②		ファッション造形基礎②		課題研究②		LHR①			
令和4年度 第3学年	家政科	現代文A②		地理A②		科学と人間生活②		体育②		C英語Ⅱ②		現代文B②※総合音楽② ※アートクラフト②※総合書道②		生活産業情報② 数学A②		服飾手芸③ 調理③		子どもの発達と保育②		フードデザイン③		ファッション造形③		課題研究④		課題研究④		LHR①						
令和4年度(案) 第3学年	家政科	現代文A②		地理A②		科学と人間生活②		体育②		C英語Ⅱ②		現代文B②※総合音楽② ※アートクラフト②※総合書道②		生活産業情報② 数学A②		ファッション造形③ 調理③		保育基礎②		※伝統文化②		※ヒューマンサービスⅡ②		フードデザイン②		※フーdsベシャリスト②		課題研究②		LHR①				

注釈： 上段は現在の教育課程を反映しているが、本事業を行うにあたって下段のカリキュラムに変更予定である。
※は学校設定科目である。
従来からの変更点は、網掛けで示す。

令和3年11月14日（日） 神戸新聞 朝刊

「家政科 1日限定カフェ 地元の味でおもてなし」



この日のために考案した弁当を振る舞う佐用高校生＝佐用町平福

佐用高家政科が1日限定カフェ

地元の味でおもてなし

考案した弁当や焼き菓子販売

佐用高校家政科の生徒に
よる1日限定のカフェイベ
ントが13日、佐用町平福の
古民家交流施設「お休み
処 瓜生原^{どうりゅうげん}」であつた。
生徒らは町特産の食材をふ
んだんに使った弁当や焼き
菓子を販売し、訪れた町民
らをもてなした。

「課題研究」の授業の一
環で、食物専攻の3年生15
人が取り組んだ。弁当の献
立は9月から試行錯誤し、
キノコの炊き込みご飯やシ
カ肉のハンバーグ、「さよ
う姫^{さよう}ポーク」のしょうが焼
きなど9品目に決定。それ
ぞれが担当する料理を前日
から仕込み、弁当30膳と焼
き菓子を用意した。

オープン前から客が並
び、店内の飲食スぺース
はすぐに満席に。生徒ら
は接客や会計など役割を
分担してカフェを運営し、
訪れた客との交流も楽しん
だ。

「色合いや味付けにもこ
だわった。佐用の食材のお
いしさを届けられてよかつ
た」と同科3年の山下遙さ
ん^{（17）}。友人3人と近くな
ら訪れた女性^{（73）}は「どれ
もおいしい味付け。初めて食
べるシカ肉もおいしい」と笑
顔だった。

（勝浦美香）

令和3年11月29日（月） 神戸新聞 朝刊

「家政科 商品開発販売」



姫路城周辺で 音と食が協演

姫
音
祭

街角でさまざまな音楽を演奏する「第4回姫音楽祭」(ひめじあかり実行委員会主催)が28日、世界文化遺産・国宝姫路城の周辺で開かれた。約120組のバンド演奏やダンスがステージを彩り、食べ物をオーケストラに見立てたオードブル弁当も限定販売。家族連れらが秋晴れの下、音と食の協演を楽しんだ。

(直江 純)

120組がバンド演奏やダンス オーケストラ表現の弁当も



食材をオーケストラに見立てた弁当を購入した家族連れ、佐用高校生はトマト製品を売り込んだ

昨年は新型コロナウイルス禍でオンライン限定となり、野外開催は2年ぶり。メイン会場の大手前公園では、和太鼓によるオープニングに続いて高砂高校ジャズバンド部が「サンタが街にやってくる」などを元気に演奏した。

トランプット担当の2年生、土生田紗英さん(17)は城見台公園でグラランドピアノを演奏するチューバーの「よみい」さん。若いファンたちも動画を撮っていた。いずれも姫路市本町

姫路市網干区から入学したが、コロナ禍で集まりにくく練習には苦労してきたといい「地元の人々さんの人を前に演奏できてうれし」と満足そうだった。

城見台公園では、ピアノチューバーの「よみい」さんがゲスト出演。「残酷な天使のテーゼ」などの人気曲を軽快に響かせた。他にも腕自慢の市民がよろいかぶと姿で演奏し、大

いまそろう
会 手 橋 山
館 0120
432096
（姫路市）

天守を背景に観客を沸かせた。

イグレひめじでは、市内18店がレンコンやタコなどの地元食材を盛り込んだ弁当を「シェフたちのオーケストラ」と題して500食限定で販売。レジ待ちの行列が延びると、隣にブースを構えた佐用高校家政科の生徒らがオリジナルのトマト製品を売り込んでいた。

令和3年12月28日（火） 神戸新聞 朝刊

「合同防災訓練～KIZUNA 大作戦～」

2021年(令和3年)12月28日 火曜日

訓練でグラウンドに避難する佐用高校の生徒や佐用小学校の児童ら＝佐用高



佐用高生が訓練初企画 地域防災へ住民らも参加

佐用高校家政科の2年生が初めて企画した地域との合同防災訓練「KIZUNA A（きずな）大作戦」が同校であり、全校生徒500人のほか、近隣住民や佐用小学校の児童、県立大の学生らが参加した。同科が町と結んだ包括協定の目標に「安心安全なまちづくり」があることから計画。避難所で過ごす際の知識や、日頃の備えについてもアドバイスした。

同科の2年生は秋以降、防災心理学などを専門とする県立大環境人間学部の木村玲欧教授らと学びを深め、準備を進めてきた。本

番では町職員や消防署員の協力も得た。

山崎断層帯地震を想定した避難訓練では、同科の2年生がスピーカーを備えたドローンで誘導。全校生徒とともに、あらかじめ佐用高に集まっていた地域住民や佐用小の1年生らがグラウンドへ避難した。

避難生活では温かい食事が不安を和らげることから、焼き鳥の缶詰や無洗米をビニール袋に入れて温めるパック調理のコーナーも設けた。家政科2年生が同学年の生徒に指導し、実際に作って試食した。地域住民向けに、新聞紙を使った紙皿やマスク作りの体験プログラムもあった。

近くから参加した自治会長の前井洋文さん（72）は「知らないことばかりで勉強になった。高校生たちが頼もしく見えた」。同科2年の上村若葉さん（17）は好評な様子に「一生懸命話を聞いてくれて良かった」とほっとした表情を見せた。

（勝浦美香）

令和4年2月6日（日） 神戸新聞 朝刊

「地域との協働事業発表会」

食を通じた社会貢献策提案

佐用高校家政科が研究発表

食を通じた地域課題解決の研究内容を発表する佐用高校生。さよう文化情報センター

佐用町の水害を教訓に、「災害に強い安全安心な町づくり」に取り組み！

佐用町 佐用高校

継続していく

佐用高校家政科の生徒が5日、佐用町佐用のさよう文化情報センターで、「食」を通じた地域課題解決の研究内容を発表しました。地元特産品を使った備蓄食や栄養面に配慮した高齢者向け宅配弁当、災害用非常食作りなどについて、来賓ら約70人に写真や動画を交えて紹介した。

文部科学省の高校教育改革推進事業の一環で、同事業の指定を受けた佐用高では2020〜22年度、食を通して地域を支える人材を育成する。家政科3学年の約90人が、商品開発、健康寿命延伸、防災の3分野に分かれて取り組んでいる。

健康寿命延伸のグループは、姫路市の日本調理製菓専門学校と協力して高齢者への配食サービスの献立を考案。衛生面のほか、食べやすいように食材の硬さや厚さに注意して調理した。今後の課題として、食と生活の改善を提言していく必要性を挙げた。

商品開発のグループは地元特産の野菜などを使った備蓄食や弁当、焼き菓子を町内外で販売。防災のグループは地域住民との防災訓練で、ポリ袋を使った非常食作りを実践した。

22年度は、学びの成果を地域で生かすことを掲げる。2年の岡田萌夏さん（17）は「今後も地域住民の意見を取り入れ、研究に生かしたい」と話した。

（村上晃宏）

健康寿命延伸

～佐用で暮らす人々を守る～

高齢者食生活調査、食改善レシピ開発などを行う

- 1年生：地域実態調査
- 2年生：地域課題改善策の提言
- 3年生：高校生訪問サービス

佐用の特産品「もち大豆」
を使用したパウダーです

もち大豆ミックスパウダー



夢茜トマトジャム

佐用の特産品「夢茜トマト」
を使用したジャムです

商品開発

～佐用の特産品を活用～

商品開発、食育活動、開発商品の広報、販売活動などを行う

- 1年生：基礎学習、食育活動
- 2年生：「佐用風土(Sayo Food)」[※]を使った商品開発、食育活動
- 3年生：高校生カフェ、レシピ本発行

※佐用風土 (Sayo Food)

佐用の農産物や特産品をブランド化している

佐用高校

私達の学び舎は、
普通科、農業科学科、家政科の3つに
分かれています。今回紹介するのは
家政科の地域協働の活動です。

地域協働って？

『【食】を通してローコスト・ハイクオリ
ティ社会の実現を目指す
プロフェッショナル人材の育成』
をすること！！

災害に強い町づくり

～佐用の水害から学ぶ～

災害時保存食の開発、災害時支援者育成を行う

- 1年生：防災学習、佐用について学ぶ
- 2年生：保存食、非常食開発
- 3年生：減災対策の提言

地域と学ぶ
佐用高校

令和２年度指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）
研究開発実施報告書【２年次】

発行日 令和４年３月

発行者 兵庫県立佐用高等学校
〒679-5381
兵庫県佐用郡佐用町佐用２６０番地
TEL ０７９０－８２－２４３４
FAX ０７９０－８２－２７１９
HP <http://www.hyogo-c.ed.jp/~sayo-hs/>



兵庫県立佐用高等学校

